

555

—

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



27.10.25

2436
4



先哲遺著

漢籍國字解全書

第八卷

大正
15. 11. 10
內交

先哲漢籍國字解全書 第八卷

解題 附著者小傳

近思錄 中村惕齋講述

【本書の解題】儒學の宋代に至りて、其思想界に一新紀元を劃せし
觀あるは、周濂溪、程明道、伊川、張橫渠の諸子、性理の說を唱道し、朱
文公承けて集大成せしを以てなり。蓋漢唐の諸儒は専ら重きを
訓詁度數に置き、其の弊や一部の尙書堯典の首にある曰若稽古
の四字を解釋するに、三萬餘言を費して、尙且要領を得ざる者あ
るに至れり。豪傑聰明の士は其陳腐無用を厭ふの餘、或は老佛に
投じ、或は商韓に歸し、儒教の危きこと、僅に一綫を將絶に繋ぐの
感なくんばあらず。有宋の興るに及んで、胡安定、孫明復等の諸氏

師道を以て自ら任じ、孔教を宗として士習を端くするに努力せしも、其の直ちに天人の指歸を窺ひ、心性の靈妙を究め、往聖の爲めに絶學を繼ぎ、萬世の爲めに太平を開くを以て仲尼の至教となし、一身を講學に捧げて終身怨尤なき者に至りては、周程張朱等諸子の功に歸せざるを得ず。但事物の常情、動もすれば枉を矯め直に過ぐるは、今古の通弊にして、宋學の學者、卑近を厭ひて高遠に驚せ、空疎に流れて依據する所なきに迄る者あるは、洵に當時東萊呂氏の歎息憂慮せる言の如し。是に於て朱氏は呂氏と相謀り、周張二程の書に就き、學者に切要なる語を抄録し、條分類別して一書を成せり。是れ即ち現行の近思錄なり。其の後葉采集解を作る時、朱子が嘗て書中逐篇の綱領を人に告げられし語に遵由し、多少文飾を加味して、道體爲學、致知存養、克己家道、出處治體、治法政事、教學警戒、辨異端、觀聖賢の十四篇目となせり。今其の篇

目に據りて稽考すれば、其の内容の大體果して如何なるかは推知するに難からざるべし。近思錄と名けしは、論語に子夏の言を載せて、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣とあるに基けり。眞西山の説に據れば、切問、謂以切己之事問於人也、近思、謂不馳心高遠、就其切近者思之とあり。亦以て本書編纂の主意果して何れに在るかを知るを得べし。されば朱子は近思錄好看、四子(四書)六經之階梯、近思錄、四子之階梯也と云ひ、又、修身之法、小學備矣、義理精微、近思錄詳之と云へり。此より其後宋學を講ずる者は、以て、必讀潜研の書となし、我朝徳川時代には、幕府の昌平學を始め、諸藩學校採りて教科書となし、民間學者の、朱學を崇奉する者も、攻撃する者も、亦均く一讀せし書なり。但首卷の道體一篇は編纂の當時、既に陰陽變化性命之說、大抵非始學者之事と疑ふ者ありしを、東萊は後出晚進於義理之本原、雖未容驟語、苟茫然不識其梗槩、則亦何

所_{スル}底_{スル}止_{スル}之_{スル}篇_{スル}端_{スル}特_ニ使_ル之_ヲ知_ル其名_義有_ラ所_ニ嚮_{スル}望_{スル}而已_ト云_ハへるを觀_レれば、我が邦山崎闇齋の子弟に本書を教ふる時、先づ爲學篇より始めしが如きは、亦本書講習の一法と謂ふべきか。去れども宋學の大原を窺はんとすれば、道體篇は必ず讀まざるべからず。本書の注釋頗る衆し、葉注の外に、清の茅星來の近思錄集注、江永の近思錄集注等あり。我が朝貝原益軒の近思錄備考、澤田希の近思錄說略、中井竹山の近思錄說、佐藤一齋の近思錄欄外書等あれども、皆漢文なれば、今茲には中村惕齋が葉氏注本によりて講述したる近思錄示蒙句解(刊本)を取れり。此書本と朱子の本注を存せり。原版には之を示すに白字を以てしたれども、印刷の便宜のため文字の左に單柱を施して白字に代ふ。

【講述者の小傳】中村惕齋の小傳は、第一卷解題に掲げたり。

附 録

訓蒙用字格

伊藤東涯輯

【本書の解題】此書は漢文の布字法を詳にせんが爲に、幾多の古書に照して用例を示し、布字の異なると共に、意義も亦異なる理由を詳説したるものなれば、漢文を讀み、漢文を作る者の爲に、必須のものたるや言を俟たず、「我_レ必_ズ不_レ仁_{ナリ}」と「我_レ不_レ必_ズ仁_{ナリ}」との二例の如きは、其和讀の聲、全く同じきが故に、其布字の如何を見ずしては、其意義の如何を知るべからずと雖も、既に其布字の異なる上は、其意義も亦、異ならざるべからず。前者に在りては、必_ズの字は不_レ仁_{ナリ}の二字に係るを以て、「我_レ必_ズ不_レ仁_{ナリ}」の意なれども、後者に在りては、不_レの字を以て、下_ニの必_ズ仁_{ナリ}の二字を打消せるが故に、「我_レは仁なりとは限らず、或は不仁なるやも知るべからず」の意となるな

り。斯る單純なる文例に在りては、極て初學なる者も、尙善く其意義の差を知るべしと雖も、少しく複雑なる文例に至りては、稍素養ある漢學者と雖も、往々にして其區別を誤る事あり。漢籍にはあらざれども、實語教と云ふ書に「山高故不貴、以有樹爲貴」と云ふ名文句あり。今此上半句を漢文の布字法に照して解釋すれば、不の字を以て貴の字を打消せるものなれば、山は高きが故に賤し」といふ事となりて、正に原作者の意に反すべし。原作者の意は「山高故貴」なるべきこと明なり。布字上に於ける斯の如き過失は、初學者の免れ難き所なれば、深く注意せんことを要す。故に本書は、漢文の意義を正格に解釋せんが爲にも、正格なる漢文を作らんが爲にも、極て切要のものたるを疑はず。本書は稿成りて著者の未だ刊行せざるに、早くも寫本にて四方に流布し、忽ち盜刻の厄に遭ひたるものなり。其一世に渴望せられしこと知るべし。然

るに此盜刻本は其校正粗漏にして幾多の誤を傳へたるを以て、門人奥田士亨之を歎き、綿密なる校訂を加へて梓行せしにより、之を盜刻本と區別せんが爲に、外題には新刊用字格、本文の初には新刊校正用字格、跋文には新雕用字格と記したれども、著者の序文中には訓蒙用字格と記せり。これ蓋し本書の原名なり。故に今は其原名に従つて訓蒙用字格と題す。此書の原版には布字の異同を見易からしめんが爲に、文字に括弧を施して、我(必)不(仁)、我(不)必(仁)の如くなしたれども、今は印刷の便を圖り、我(必)不(仁)、我(不)必(仁)の如く改めたり。

【著者の小傳】伊藤東涯は京師の鴻儒にして、名を長胤といひ、原藏と稱す。東涯は其號なり。父を仁齋といひ、一世の大儒なり。東涯家學を繼承し、博聞強記にして經術に深く、善く文を屬す。東涯人となり、恭儉寡黙なり。然れども其經義を講ずるや、精微神に入り、一

世の推服する所となる。紀伊侯其名を聞きて聘すれども就かず。臺閣公卿、往々弟子の禮を執る。此時に方り、碩儒輩出して其名を競ひ、互に詆排したれども、東涯は一語も他人を臧否せず。終日矻々として手に卷を釋かず、得る所あれば、隨て之を録し、遂に等身の著を成すに至る。皆天下有用の書なり。元文元年歿す、年六十七。其著書擧げて數ふべからず。訓蒙用字格は、漢文の布字法を教へんが爲に著せるものにして、廣く天下に行はれたるものなり。

近思錄示蒙句解叙

余既著小學四子示蒙解、爰不得獨遺此書、乃併及之、繕藁已成、初學後進請傳鈔者、急比小學四子、所以然者何也、蓋全帙所載、非古籍之文、則近賢之辭也、古文猶可從本編以明其義矣、近辭則在中華、固不須釋而通曉之、如鳥魚生而能飛游也、故雖有注疏而涉此者、幾希在、本邦則其所難喻者、末由尋訓詁矣、若夫博洽之儒、則或可類推以會意焉、蒙士豈得能然乎、是以雖淺解鄙說、亦不能不循由、猶學琴瑟者、必先慣雜弄也、於其精蘊微趣、非此解所能發揮、亦知讀者考求不主乎此、特庶幾蒙學漸進之一助而已、但恐其間多未愜言意而失先哲之本旨者、夫大匠制用、則天下無棄材、佗日若得與君子之採撫、切望訂正修改、以幸于世也、於是乎叙、

元祿辛巳春分之日

南郊 仲欽敬甫書

近思錄示蒙句解目次

朱子後序	一
呂氏後序	四
道體類	六
爲學類	四七
致知類	一三七
存養類	一七八
克己類	二一九
家道類	二五一
出處類	二七〇
治體體	二九九
治法類	三二三
政事類	三五九
教學類	三九五

警戒類……………四〇九

辨異端類……………四二五

觀聖賢類……………四四三

近思錄示蒙句解

中村 惕齋 講述

朱子後序

近思錄は、朱子、東萊呂氏と共に、周程張子の語を、鈔録せられたる書なり、編の終に兩先生の後序あり、今葉氏が集解に従ひて、よむ人をしてまづ此書の大意を知らしめんために、二序を編の首に移して、これを解す、

淳熙乙未之夏

淳熙は、宋の孝宗の年號、乙未は、その二年なり、

東萊呂伯恭來自東陽過予寒泉精舍

東萊は、今の山東の萊州府なり、呂氏の先祖、漢の時、東萊侯に封せられし人あるによりて、子孫これを稱號とす、其後は世々金華人なり、呂氏名は祖謙、伯恭

はその字なり、東陽は、即今の浙江の金華府なり、過るとは、たちよる義なり、精舍は、書齋の稱、寒泉精舍は、朱子の本郷福建の建寧府にあり、

留止旬日、相與讀周子程子張子之書

逗留して止ること十日ばかり、周子は、濂溪先生、程子は、明道伊川二先生、張子は、横渠先生なり、其書は、諸先生の著述する所、並に門人の記せる語録なり、

歎其廣大閎博若無津涯

歎くは、ほめてなり、閎博も、大いにして廣きなり、津は、水のわたり處、涯は、水ぎはなり、

而懼夫初學者不知所入也

廣大にして津涯なければ、初學由りて入る所の門路を知らず、

因共掇取其關於大體而切於日用者、以爲此編、總六百二十

二條、分二十四卷、道理の大體に關繫し、事務の日用に親切なる者をひろひとりて、あみつらぬるぞ、

蓋凡學者所以求端、首卷に道體を論ずる處、凡そ天道人性の類、各その名義につきて、まづその端緒を求め知るなり、

用力、二卷に爲學大要を論じ、三卷四卷に致知存養の工夫を論ずる是なり、

處己、己が行ふ所を處置す、身を脩めるのことなり、五卷の克己、六卷七卷に家道出處を論ずる是なり、

治人之要

八卷より十卷までに、治體治法政事を論じ、十一卷に教學の法を論ずる是なり、十二卷の警戒は、又通して己を脩め人を治るの戒めをあぐ、

與夫所以辯異端、十三卷なり、

觀聖賢之大略、觀聖賢は十四卷なり、

皆粗見其梗概、上二頤をすべて云、梗概は、おほむねとよむ、亦大略大率の義なり、

以爲窮鄉晚進、有志於學而無明師良友以先後之者、窮郷とは、窮迫してゆきつまりたる里を云、晚進とは、年たけてすゝみ出る學者を云、先後之とは、あと

さきになりて、ひきまはす義なり、

誠得此而玩心焉、亦足以得其門而入矣、此とは、此編をさす、玩心とは、よみ味ひ、心にかけ

て、すてざる義なり、如此然後求諸四君子之全書、

まづ此編によりて入る所の門を得るの後、周二程張四君子の文集語錄の全書にをいて、其詳なる處を

もとめてと、沈潛反覆、

沈潛は、しづむなり、心を四子の書の内に、入れをくことを云、反覆はくりかへして、よみ思ふぞ、

優柔厭飫、優柔は、ゆたかなる意、急速に會通を求めざることを云、厭飫は、あくなり、功を積むことを云、此四字は、

左傳の序に出たり、以致其博、而反諸約焉、致博とは、四子の全書にひろく求ることを云、反約とは、博きより反りて、約かなる處に至り、その簡要

を知ることを云、これ孟子の語によりていへり、則其宗廟之美、百官之富、庶乎其有以盡得之、

これ論語に子貢孔子教をうけて學びざるものは、其道德の尊きを知らざることをたとへて、不得其門而入不見宗廟之美、百官之富といへるを借りて、四

子の道德を擬す、その門内にある宗廟のうるはしく、百官のさかななることを、見つくさるべしとなり、

若憚煩勞、安簡便、以爲取足於此而可、

もし四子の全書をよむ、煩悶勞苦ををそれて、此書の簡約便利なるに安んじ、わづかに足れることを、此に

取りても可なりと思はし、則非今日所以纂集此書之意也、

纂も、あつむるなり、わが今日此書をあつめたる本意にあらずと、五月五日朱熹謹識、

呂氏後序

近思錄既成

集錄之功既成就す

或疑首卷陰陽變化性命之說

大抵非始學者之事

首卷の道體類に云所、大抵深遠精微の道理にして、初學のさとりがたきことなるを疑ふ、蓋し近思と云題號にそむけりと、思へるなり、

祖謙竊嘗與聞次緝之意

次緝は、つぎつぐなり、あみつらぬることを云、朱子此書を編次せられたる意をきけりと、これ兩先生共に作れる書なれども、謙退してかくの如くいへり、

後出晚進

後出とは、人より後にいで學ぶ者を云、

於義理之本原雖未容驟語

義理の由來深遠なること、木の本、水源如し、

苟茫然不識其梗概則亦何所底止

茫然とは、はるかなる貌なり、底止とは、相持つ義なり、もし義理の本原にをいて、茫々として、その大槩を知らずは、亦何のとりとめ所もあるまじとなり、

列之篇端特使之知其名義有所嚮望而已

太極陰陽性命等のことを、篇端につらぬること、唯初學の人をして、各その名義を知りて、道理の本原至極處は、こゝにありと、向ひ望む方角あらしむるばかりぞと、

至於餘卷所載講學之方日用躬行之實具有科級

科級は、しなゝり、きざはしの段々ある如くなることを云、二卷より以後の載する所は、みな致知力行して學を講はすの方法、日用躬に行ふの事實をなはりて、科級の次第あり、

そのついで必空寂虛無の境界に流れ陥りて、身心の依り據る所なきに至るぞ、

循是而進

此句まづ向望する所を知りて、後に科級によりて學ぶことを兼て云、

自卑升高自近及遠

必ひきくちかきよりはじめて、又ついに高く遠き所をきはむるぞ、

庶幾不失纂集之指

上に云如くして後に、此書の纂集の旨趣を得て、とり失はざらんぞ、

若乃厭卑近而驚高遠

此より下は、上文に云所の學術に、循はざる、ついえをとく、これ卑近よりはじめずしてたゞちに高遠を求る者を云、

躡等陵節

等級をこえてのぼり、節限をしのぎてすゝむ、みな卑近を厭ひて高遠に驚るの事なり、

流於空虛迄無所依據

則豈所謂近思者耶覽者宜詳之

上に云如くなるは、反て此書に名づけたる、近思と云者にあらず、見る人此意を詳にすべしと、按ずるに、近思の二字は、もと論語の子夏の語に出たり、明道の意は、近く己が身にある所の者を、親切に思ふ義にとる、伊川の意は、己に近き處より思ひて、類を以て、遠き處に推し及ぼすの義にとる、今呂氏の説によりて見れば、篇に名づくるの義、二程の意を兼とれるならん、

淳熙三年四月四日、東萊呂祖謙謹書

近思錄

道體類、凡五十一條

道體とは、體は體統の義にて、すぶる意あり、凡そ天道人性の類、みな道理をすべたる者にして、學問の根本なり、この故に、まづ首にこれをあつむ、

濂溪先生曰、無極而太極

此一章は、周子の太極圖說なり、此句まづ太極の二字を會得すべし、太極は、天理の尊號なり、太とは、これを尊ひて、大いなりとする詞、極は、もと屋の棟の名なり、その一屋の上において、衆材をすべたる者なるを以て、これを借りて、種々の義にとる、此極には、根極極の義あり、根極は、木の幹枝、根にすべたるが如くなることを云、樞極は、戸の開闔、樞にすべたるが如くなることを云、蓋し一箇の天理、品類を生ずる根本となり、造化をなす樞紐となるを以て、太極と

稱す、然れども、他の極には、みな極の形あり、天理には、その極たる形状方所なくして、而も天下の大根本、大樞紐となるを以て、無極にして太極なる者ありと云なり、

太極動而生陽、動極而靜、靜而生陰、靜極復動

太極は、理にして形なし、陰陽は、氣にして形あり、理は氣の主宰にして、氣は理の形體なり、もと兩物にあらず、太極に動靜の理あるによりて、陰陽に動靜の機あり、太極その機の動くに乗る時は、陽氣あらはる、その機の靜なるに乗る時は、陰氣あらはる、これ動いて陽生じ、靜にして陰生ず、こゝにをいて、始めて出生すと云にあらざるなり、而してその動靜の機は、これをせしむる者あるにあらず、動くこと極まる時は、その勢によりて、をのづから靜に變じて陰生ず、靜なること極まる時は、亦その勢によりて、をのづから動

一動一靜、互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉

動くこと極りて靜なるは、これ靜動に根ざす、靜なること極りて又動は、これ動靜に根ざす、兩儀は、兩體の容儀なり、易には陰陽を兩儀とす、こゝには借りて天地となす、立つとは、その開闔の初につきて云なり、蓋し陰陽兩端あれども、もと一氣なる故に、そのうつりゆくこと、かはるゝ相推して相變ず、これを流行の陰陽とす、一氣なれども、又兩端ある故に、その分れ立つこと、相反きて相濟す、これを對待の陰陽とす、流行對待二つの者、一時に俱にありて、相悖らず、而して太極の理、至誠無妄なるによりて、流行する者、萬古とこほりやむことなく、對待する者も、亦萬古うつりかはることなし、

陽變陰合、而生水火木金土

これ五行の質を生成することを云、太極陰陽を生じ、陰陽五行を生ず、理よりして氣、氣よりして質、これそ

の言を立る次第なり、變とは、變り動くなり、合とは、凝りて合ふなり、生ずるは、成すを兼て云、水火木金は、これ五行生成の序なり、よりてその質微なるよりして、漸くに著なり、はじめに陽氣進みて、變動する時に、水を生ずれば、陰氣退きて凝合する時に、これを成す、陰氣の凝合によりて、又火を生ずれば、陽氣ふたゝび變動して、これを成す、木金土の生成も亦かくの如し、これを生ずる者は、内にありて精となり、これを成す者は、外にありて體となる、この故に、水は外くらくして、内明なり、火は外明にして、内くらし、木金土の質も、これに例して見るべし、木金は、陰陽の氣、水火にまじはりて生ず、土は最後に成る、地の體質にして、水火木金を、のする者なり、

五氣順布、四時行焉

五氣は、五行の氣、順布とは、順ひ由りて、流れ布くなり、蓋し五行は、質地に具はりて、氣大に行く者なり、春は少陽にして、木氣行く、夏は太陽にして、火氣行く、秋は少陰にして、金氣行く、冬は太陰にして、水氣行く、冬をはりて、又春なり、土は沖和の氣、四時の内

に貫き行きて、夏秋の間に旺なり、かくの如くに、其氣この序に順由して流布す、これ流行の陰陽なり、

五行一陰陽也、陰陽一太極也、

太極本無極也、

五行の質成り、氣めぐるに、とき至る時は、天地造化をなすの具、すでにそなはることを見る、而してこれをよむ者、太極陰陽に變じ、五行に分る、を、くだくだしく見なさんことを恐る、この故に、又五行よりはじめにまきかへして、このあまたの者共に渾然として、一體なることを示す、云意は、五行は五物なりといへども、唯これ一陰陽の變台によりて成る、陰陽兩端ありといへども、唯これ一太極の動靜によりて生ず、而して太極はもと無極にして、形なき者なれば、亦二氣五行の外にあるにあらずと、

五行之生也、各一其性、

これ五行各一物にわかるれども、亦各々に一太極の理を、全く具ることを云、性は物の生じて、うけ具ふる所の理、即太極なり、されども五行は五物にして、

こゝにその生ずることを、云によりて、太極といはずして、性と云なり、蓋し陰陽兩端にわかるれども、それなを氣なるによりて、一太極を共にす、五行は其質各異なるによりて、亦各一箇の太極を具るなり、

無極之眞、二五之精、妙合而凝、

此より下は、天地の萬物を造化することを云、無極の理の、眞實にして妄なきは、即これ太極のことなり、陰陽五行の氣の、精純にして雜りなきは、その本來を以て云、妙合とは、自然にとけあふことを云、蓋し太極の理の眞實なる、その主宰となり、二五の氣の精純なる、これが材料となり、二つの者、をのづから渾合して、へだてなし、この故に人物の形質、凝りかたまりて、出來るなり、形質すでに成る時は、亦各一太極を具ふ、これ天地のはじめ、人物氣化の時を云、蓋し其生いまだ父母によらず、唯二五の氣をうけて化生す、

乾道成男、坤道成女、

これ易の語をとり用ふ、乾は、健なる意、坤は、順ふ義なり、人物氣化の間に、又陰陽の分あり、その陽に屬

して、乾道を得る者は、剛健にして男の體をなす、その陰に屬して、坤道を得る者は、柔順にして、女の體をなす、

一氣交感、化生萬物、

男女二體の氣、その形の交るによりて感通す、よりて各その種類を以て、萬物を化生するなり、此萬物は、人を兼て云、化は、かはる義なり、氣をかへて物となす故に、化生と云なり、これ形化のことを云、形化するにまじはれる後は、又氣化の物なし、

萬物生、生變化無窮焉、

これ唯上二句をうけてその生々の窮りなきことを云、變化は、みなかはる義なり、化の漸くする所より變と云、變じてすでに成る所より化と云なり、

惟人也、得其秀而最靈、

萬物の中に、たゞ人のみ二五の氣の秀でたるをうけて生る、この故に、其心最靈妙にして五常の性全くそなはりてかぐることなし、

形既生矣、神發知矣、

神は、たましひなり、知るとは、知識ひらけて、物をわきしるなり、蓋し氣すでにこりかたまるの時、形體は陰の類なれば、陰氣によりて出生す、神知は陽の類なれば、陽氣によりて發出す、

五性感動、而善惡分、萬事出矣、

五常の性は、即五行の理、仁は木、義は金、禮は火、智は水、信は土なり、人の形神、外事物にまじはる時は、五性これがために感じ動きて、喜怒哀懼愛惡欲の七情出づ、其情本然の理にもとづきて、すぐさまに出れば、善となる、形氣の欲にふれて、な、めにあれば、惡となる、情の善惡わかる、によりて、吉凶悔吝相まじはりて、天下の事、千狀萬態、その變きはまりなきに至る、蓋し性は即太極なり、形生り神發するは、陰陽の分なり、五性の感動は、五行の生なり、善惡わかる、は、男女となるの象なり、萬事出るは、萬物化生の義なり、陰陽の氣に、もと善惡のわけあらざれども、人情に發する時は、善は其理公明にして、陽の類なり、惡は其理闇曲にして、陰の類なり、易象に、君子を陽に屬し、小人を陰に屬するも、此義なり、

聖人定之、以中正仁義、聖人之道、仁義中正而已矣、而主靜無欲故靜、立人極焉、

中は、禮を行ひて、其宜きを得る處、正は、智を用ひて其當れるを得る處、仁義禮智と云時は、性の名にして體なり、中正仁義と云時は、道の名にして用なり、人極とは、天地人各一太極にして、人にある太極を云なり、此段上文をうけて説く、人の動作、萬變きはまりなくして、凡民善におもむき、惡にさかる法を知らざれば、人にあるの極、たゞざる所あり、聖人の氣質は、秀でたる中に、又秀でたるをうけたるが故に、其性渾全粹美なり、其理心の動靜の間に行はれて、その靜なる處、常に主本となり、動上にをけるの過失なくして其する所、みな天下の法則となれり、この故に、よく中正仁義の道を以て、天下の動作を鎮め定めて、妄に動くことなからしむ、人にあるの極、これによりてとり立ち、人々これを失はざることを得たり、これ聖人靜を主として、人極を立るなり、中正仁義を動靜にわ

くれば、中と仁とは、動に屬す、正と義とは、靜に屬す、又四つの者に、各體用ありて體は靜、用は動なり、上の本注の意は、聖人の道、廣大精微なりといへどもその大綱は、仁義中正の外なしとぞ、下の本注に、無欲故靜なりとは、凡そ人の身は、形ある動物にして、形氣の欲なきことあたはず、よりにて動靜の理並に具はるといへども、あやまつ所、常に動上にあり、聖人の心は、澹然として明潔なり、一毫も形氣にわづらはざる、欲なし、動靜の機、とゞこほらずして、靜常に主となり、一つも妄に動くことなき故に、動くといへども亦靜なり、こゝを以て、よく天下の動を定むるとり、

故聖人與天地合其德、日月合其明、四時合其序、鬼神合其吉凶、

これ易の語をひく、それ聖人中正仁義の道を以て、天下の動を定め、人にある極をたて、天地と共に、三才ならび立つ位にあり、この故に、其徳の大なるこ

と、天地と合ひ、其智の明なること、日月にひとしく、その動き靜まり、張り弛すこと、四時の序、うつりかはるが如く、その善におもむき、惡にさかり、徳を賞し、罪を討するの類、鬼神の吉凶をなすにかなへり、日月四時鬼神に合ふことは、みな徳を合はする内のことなり、

君子脩之吉、小人悖之凶、

二つの之の字は、中正仁義をさす、此段上文にひきつけて説く、聖人天地と徳を合するは、即太極の全體にして、一動一靜、ゆくとして、中正仁義の至極に、あらずと云ことなし、これ修爲工夫を借らずして、自然にかくの如し、いまだこゝに至らずして、これを修するは、君子の吉におもむく所以なり、これを知らずして、これに悖るは、小人の凶にかゝる所以なり、これを修すると、これに悖るとの、わかるゝちまたは、唯敬すると、肆なるとの間にあり、

故曰、立天之道曰陰與陽、立地之道曰柔與剛、立人之道曰仁

與義

陰と陽とは、物の象なるを以て天に屬す、柔なるは剛とは、物の質なるを以て地に屬す、仁と義とは、心の徳にして人にある、陰柔義は一類、陽剛仁も一類なり、道は、即太極なり、わきて云時は、三才各一太極なり、合せて云時は、三才共に一太極なり、此段は又易の文をひき、上文聖人よく中正仁義を以て、天下の動を定めて、人の極をたて、其徳天地日月四時鬼神にあふことは、三才の極、由て立つ所以の者、共に一理なるが故なりと云意を明す、而して又三才の道、各兩端ありて、相對せざれば、立たざることを示す、其兩端に亦各兩端あり、天に太陽少陽、太陰少陰をわく、地の剛柔にも亦各太少あり、人の仁義も、禮は仁の著れたる所、智は義の藏れたる所にして、わくれば四つ、つゞむれば仁義の二つなり、なを春夏秋冬の一寒一暑に歸するが如し、又體用を以てわくれば、陽剛仁は、用の行はる、所以なり、陰柔義は體の立つ所以なり、然れども仁を以て心を存し、義を以て事を制すと云時は、又仁は體にして、義は用なり、又性情を

以て云時は、仁義は體なり、惻隱羞惡の類は用なり、各其當る所ありて、條理みだれざるなり、

又曰、原始反終、故知死生之說、

これ又易の文をひきて、上文兩端の體用、又各始終を相爲して、始終亦一理なることを明す、凡そ古今生死晝夜語黙の類みな今より前の始れる所を、たづねきはめて、則ひきかへして、今より後の終る所を見れば、亦かくの如し、人の生死のありさま、知りたきことなりといへども、亦よく其説いかんと云ことを知るとなり、

大哉易也、斯其至矣、

上文を合せ結びて云く、易の書たること、包る所廣大にして、天下の理ことごとくそなはる、まことにそれ大いなるかな、然れども、此圖の發明する所、これ易道の至極なりとぞ、

○誠無爲、

これ亦周子の語なり、凡そ章の首に名のなきは、前章をかうむりてなり、下みなこれに倣ふべし、誠とは、

智守曰信、

徳は、得の字の義にて、人この道理を天に得て、己に具へたるを云、蓋し誠はこれ性の本然、幾はこれ情の端倪、徳は、これ體を主として、用を兼たる名、性情みな其内にあり、愛は、あはれみいつくしむ意、宜とは、心の事をはかりて、宜きかなふ處、理は、爲る所の條理ありて、混ぜざるなり、通は、分別の通達して、ふさがらぬなり、守るとは、その守りのたがはず、わすれざることを云、これ五つの者の用によりて體に名づく、即五行の性なり、

性焉安焉之謂聖、

五常の徳、天性のまゝにして、安らかに己に全きを聖人と云、これ學問勉強の工夫を待たずして、誠たらずと云ことなく、幾明ならずと云ことなく、徳そなはずと云ことなき者なり、

復焉執焉之謂賢、

修爲工夫を用ひ、氣質を變化して、天性の本然にかへり、これをとりまもりて失はざるを賢人と云、これ誠

人心本然の實理、即天命の性にして、太極の象なり、その靜なる時は、まことに爲ることなし、動いて爲ることあれども、實理の本體は、亦天然のまゝにして、人の作爲に、わづらはされざるを以て、すべて爲ることなしと云なり、

幾善惡、

本心うごく時は、爲ることありて、善惡あらはる、幾は、情のうごくきざしの、かすかなる處、善惡のわかちまたにして、陰陽の象なり、蓋し人心わづかに動く時は、天理まことに發し、人欲も亦その間にきざす、天理は性命の正きにもとづき、人欲は形氣の私に生ず、人よく獨を慎みて、その幾を審にし、必自欺くことを禁止して、必自慊からんことを求むべし、朱子おもへらく、周子力を極めて、この幾の字を説く、すこぶる人を警發する所あり、近くは心の公私邪正、遠くは國の興廢存亡、たゞ此處にをいて看やぶれば、すなはちとりまはすことを得べし、此はこれ日用の親切第一の工夫なり、

徳愛曰仁、宜曰義、理曰禮、通曰

を思ひ、幾を審にして、以て其徳を成す者なり、

發微不可見、充周不可窮之謂

神、

發は、うごくなり、一念きざす時に、至理すでに具はる處、微妙にして、人これを見つけられず、その居る處に隨ひて、徳光充滿し、及ぶ所のおまねきと、きはめつくされず、これを神人と云、然れども神とは、聖人の妙用、測り知りたきことを云なり、實は聖人の上に、又神人と云者あるにあらず、

○伊川先生曰、喜怒哀樂之未

發謂之中、中也者、言寂然不動

者也、故曰天下之大本、

此章は中庸の説をあげ、易の文をあはせて、これを釋す、喜怒哀樂の情いまだ發動せざる時は、性の理まん中にありて、かたよらず、かたぶかざる故に、中と名づく、これ性の徳なり、即これ人心の寂然としづかにして、いまだ動かざる所以の者をいへり、萬事萬物の

理、みな此處より出るが故に、天下の大本と云なり、
發而皆中節謂之和也者、言感而遂通者也、故曰天下之達道、

節は、ほどよき處なり、喜怒哀樂の情、發動するに及んで、一々みな節度にあたる時は、四の者相雜るといへども、五味の調和するが如くにして、そむきもとる所なき故に、和と名づく、これ情の徳なり、これ即人心の物に感じて應ずる處、ついに天下のことに通ずる所以の者をいへり、凡そ道理のこれによりて行はるゝ者、ゆくさきみな通達して、ふさがる所なき故に天下の達道と云なり、九達の道路通行せずと云ことなきが如し、

○心一也、有指體而言者、寂然不動是也、有指用而言者、感而遂通天下之故是也、惟觀其所

見如何耳、

それ人心は一つなれども、經書に心を云處、體をさして云者あり、體はいまだ發せずして、靜なる處なり、用をさして云者あり、用はすでに發して、動く處なり、唯その文字にあらはるる所、いかんと云とを見て、體用をわき知るべしとなり、よりて易の文を注として、その例をあぐ、

○乾天也、

古は天を稱して乾ともいへるなり、

天者、乾之形體、乾者、天之性情、乾健也、健而無息之謂乾、

此段まづ健の字を會すべし、乾とは、健の字の義にてすぐやかなるを云、それ天一晝夜に、地球九萬里の外をめぐりて、萬古しばらくもやむことなし、これその性情至健なるが故なり、天に性情なければども、その體にそなはり、用にはどこす所よりこれを云、然ればこれを天と云は、此乾の形體廣大にして、涯りなきより

稱するなり、これを乾と云は、此天の性情、剛健にしてやむことなきより稱するなり、

夫天專言之則道也、天且弗違是也、

天をかたどる、種々の名稱ありといへども、其實を全くさし出して、專にこれを云時は、唯これ一つの道理なり、よりて易の文をひきて、此意を明す、云意は、聖人の爲る所は、道にかなはずと云ことなき故に、至尊の天といへども、聖人にそむくことあたはず、况や其外の者をやと、これ道を以て天を稱するなり、
分而言之、則以形體謂之天、
天を專にいはずして、分きて名づくる時は、その形體を以てこれを天と云、義は上文に見えたり、

以主宰謂之帝、
上に居て下に臨み、主張宰制して、命令を降し賦く所より、これを稱して帝と云、
以功用謂之鬼神、

造化の功を運らし用る所より鬼神と稱す、鬼は、歸なり、神は、伸なり、物の生息して、伸び来る所を神と云、物の消化して屈まり歸る所を鬼と云なり、
以妙用謂之神、
唯これを稱して、神とばかり云は、天の運用微妙にして、測り知らざる所より云なり、

以性情謂之乾、
義は上文に見えたり、

四德之元、猶五常之仁、

天道の四德元亨利貞の運、四時に合せて見れば見やすし、元は、唯是生意なり、天地も人と同く生き物にして、その生意たゆる時なし、元は春にして、生意發見のはじめなり、亨は夏にして、生意のひらけとをる時なり、利は秋にして、生意の收まりて遂る時なり、貞は冬にして、生意の成りかたまる時なり、貞又元を生ず、冬きはまりて春にかへるが如し、生意は始終に貫かずと云所なし、五常の仁も、惻隱は、人心本來の眞情なり、此眞情にふれて、そむくことある時は、義

の羞惡の情發す、此眞情を節文に施す時は、禮の辭讓の情發す、此眞情にて善惡をわかす時は、智の是非の情發す、信は唯これ此眞情の實にある處なり、仁の惻隱は義禮智信の間に貫かずと云所なし、四徳の元も、なをかくの如くなり、

偏言則一事、專言則包四者、

もし仁を偏にかたつけ、義禮智信にならべて云時は、唯これ慈愛の一事なり、又仁を専ら一つ者にして云時は、義禮智信四つの者をかねて、みな其内に入り、元亨利貞をかぬるも、亦これに同じ、

○天所賦爲命、物所受爲性、

賦すとは、しきくばる義なり、物は、人をかねて云、これ中庸に天命を性と云義によりて、命と性とは、本一つなれども、天の賦する所と、物の受る所より、其名かはれることを明せり、それ天陰陽五行の氣を以て、人物を生じ、其氣形となる時は、氣にそなはれる理も亦これにしたがひてしきくばる、これ上より下に事を命令する如くなるによりて、これを命と云、人物をのく其賦する所の理をうけて、心にそなへたる時

は、これを性と云、仁義禮智信の性は、即これ木火土金水の理なり、

○鬼神者、造化之迹也、

造化とは、造はつくる、化はかはるなり、天地の物を生々することを云、たとへば草木を、地よりうみだすは造なり、井間に春きざし、夏しげり、秋收まり、冬成るは化なり、其造化をなすありさまの、見とめ、さし云べき所をば迹と云、蓋し鬼神とは、唯これ陰陽の氣、をのづから靈妙にして、萬物を造化する迹を以てこれに名づく、別に鬼神と云者ありて、不思議をなすにあらずとなり、わかちて云時は、陽の靈なる所を神と云、陰の靈なる所を鬼と云、神は、伸の字の義にて、のぶるなり、物の生じてさかんなるまでは、陽のなす所、のびて來ることなるによりて神と云、鬼は歸の字の義にて、かへるなり、物のおとろへてほろぶるは、陰のなす所、かがまりてかへることなるによりて鬼と云なり、

○剝之爲卦、諸陽消、剝已盡、獨

有上九一爻尙存、

易卦皆六爻あり、四月は、六爻純陽の乾卦、五月に下より陰を生じて、一陽爻を變するを姤卦とす、これより毎月一爻を累變して、九月に至る時は、諸陽爻消え剝て、上九一陽爻を存す、これを剝卦とす、如碩大之果不見食、將有復生之理、

上九亦變、則純陰矣、

上九も亦變じて、陰となる時は、則純陰にして、十月の坤卦なり、

然陽無可盡之理、變於上則生於下、無間可容息也、

天地の間に、陽氣たえつくさるゝ道なし、十月純陰な

りといへども、上九なをいまだ變じつゝ、舊陽わづかに上につくれば、新陽即下に生ず、其つぎめに、唯一息をいゝるの間もなし、

聖人發明此理、以見陽與君子之道不可亡也、

聖人剝の上九にをいて、此理を發明して、これを以て天地の陽氣と君子の道とは、ついに亡ばされざることを見る、凡そ易象には、君子を陽類とし、小人を陰類とす、

或曰、剝盡則爲純坤、豈復有陽乎、

或人疑ふ、剝して陽氣盡る時は純陰の坤となる、なんぞ又陽あらんやと、

曰、以卦配月、則坤當十月、以氣消息言、則陽剝爲坤、陽來爲復、陽未嘗盡也、剝盡於上、則復

生於下矣

消は、きゆるなり、息は、生するなり、卦を以て月に配合すれば、剝九月に當り、坤十月に當るといへども、氣の消息を以て云時は、陽氣剝盡するを坤とし、來復するを復とす、新陽生するまでは、舊陽いまだかつてつきず、剝して上に盡る時は、則又下に生するなり、故十月謂之陽月、恐疑其無陽也、

古人十月を稱して陽月と云ことも、人その陽なきかと、疑はんことを恐るゝが故に、反てこれを陽月と云なり、

陰亦然、聖人不言耳

四月純陽の乾卦の上に。陰のつきざること、亦かくの如くなりといへども、聖人これをいはぬのみなり、而して剝を以てこれを云ことは、善人を慰めて、君子の道、ついにほろびざるたのみを、失はざらしめ、小人を戒めて、その悪をする志を、敢てきはめざらしめんためなり、聖人陽をたすけ、陰を抑ふる意、つねに

一陽復於下、乃天地生物之心也

これ復の象辭に、復其見天地之心乎と云を釋す、それ復は、靜なること極りて又動き、舊陽上に盡て、新陽下に復るの時なり、天地生物の心、しばらくもやまざることは、いつとでもこれを見つべし、されども此時最見やすきによりて、こゝにをいていへるなり、

先儒皆以靜爲見天地之心、蓋不知動之端、乃天地之心也

魏の王弼が易の注、老莊有は無より生するの說にまどひ、冬至を極靜至無の時として、これを天地の心萬化の本とす、從來の諸儒大概此說によれり、動の端とは、即一陽初めて萌す時をいふ、

非知道者、孰能識之

此より下に、此類の詞多し、大抵これ經の本語を稱贊する者にして、自贊の詞にあらず、されども程子も道に明なるを以て、よく先儒の非を見ひらけるなり、

かくの如し、○此章朱子易本義の說には、十月の中氣小雪に、剝の上九變盡して、すなはち復の一陽萌し、三十日を積て十一月の中氣冬至には、初九一爻すでに成ると見えたり、諸儒みな此說に従ふ、ひとり艸廬吳氏冬至を以て、陰陽消息の界限とす、今竊に此說をとる、蓋し程傳の盡の字、みな舊陽の盡るを以て云、新陽生するを兼て云と見がたし、又日、また南至せざるの前に、陽氣來復するの理あるべからず、上古の曆元は、朔日冬至にして、其前の日なし、今月朔を中氣の前半月にをくことは、これ曆作るの法なり、歲の首は、冬至なれども、十一月の朔を、其前にをくこと、なを子の正刻は、日の始なれども、子正を中とせんために、昨日の終り半時を借りて、子初刻とするが如し、又十一月の中冬至に、一陽萌して、十二月の中大寒に、復の初九成り、正月の中雨水に、臨の九二成り、二月の中春分に泰の九三成る、これ正に陰陽中分交泰の象なり、もし本義に従ふ時は、冬至にして一陽成り、大寒にして二陽成り、雨水にして三陽成り、春分には四陽成りて、大壯の卦なり、交泰の象なし、三陰の否も、亦かくの如し、よりに疑なきことあたはざるなり、

仁者、天下之公、善之本也

仁者は、天地萬物を以て一體とす、天下公共の徳にして、一毫の私意なきを以て、天下の公と云、而して四徳萬善、仁に統せずと云ことなきを以て、又善の本と云なり、公とは心を以て云、善とは理を以て云、公なれば必善なり、二事あるにあらず、易に四徳の元を、善の長なりと云も、亦此意なり、天道の元は、即人心の仁なり、

有感必有應

感とは、彼氣彼心を以て、此氣此心を動かすなり、應とは、此その感にこたふる所なり、凡そ感ずることあれば、應せずと云ことなし、天地の間のこと、唯一つの感と應とあるのみにて、更に他の事なし、

凡有動皆爲感、感則必有應、所應復爲感、所感復有應、所以不已也、

凡こゝに動くことあれば、必よく感ずることをす、感

する所必應ありて、その應する所又感をなし、その感に又應あり、感應のやまざる所以なり、
感通之理、知道者默而觀之可也、

通とは、彼より此を感動する時に、此うけてこれに通達すること云、通するによりて、則これに應するなり、凡そ感通の道理、道を知る人、言語にあらはさずして黙してこれを觀察せば、天下の事みなこれなることを見るべしとなり、○朱子おもへらく、感應の二字、對して云時は、彼感じて此應するなり、又唯感とばかり專にいひて、應をかぬることあり、恩を感じ、徳を感ずるの類これなり、

○**天下之理、終而復始、所以恒而不窮、**

これ恒卦の家辭に、天地の道恒久而不已也、終則有始也と云義を釋す、蓋し其體を論ずれば、始終常ありてかはらず、其用を論ずれば、始終變易して窮せず、四時たがひにゆき、日月かはるく明なるは、これ用

の變なり、二つの者其度の爽はざるは、これ體の常なり、其體常ありて、而して後によく用の變をなす、其用の變するは、則體をして常久ならしむる所以なり、
恒非一定之謂也、一定則不能恒矣、唯隨時變易、乃常道也、

これ上文の理を發明す、按ずるに、變易に亦經權の別あり、人の老少相ゆづり、盛衰かはるく遷るを、各その時に宜く處置するが如きは、これ變易の常なり、綱常倫理の如き、一定して易へざる者をも、塞がる所ある時は、則亦變じて通するの道あり、これ變易の權なり、みな其道の常久にして、窮せざる所以なり、

天地常久之道、天下常久之理、非知道者、孰能識之、

此章の旨蓋し常久の理を論ずるによりて、常久の道をあはせ云なり、

○**人性本善、有不可革者、何也、**
これ革卦上六の爻辭に、小人革面と云につきて論ず、

人の性本來たれも善なれど、又その間に、小人ありてたゞ外のみを革れども、其内を革められざる者ある

はいかんと、まづ此問をまうくるなり、
曰、語其性則皆善也、語其才則有下愚之不移、

才は、能なり、氣質の能する所と、能せざる所あるを云、性はみな善なれども、才には論語に所謂下愚の移らざる者あるなり、蓋し其才昏く弱きこと極りて、善に移ることあたはざる者を云、

所謂下愚有二焉、自暴也、自棄也、

下愚に亦兩様あり、孟子の所謂自暴自棄これなり、自暴とは、自その性の善を暴ふ者を云、自棄とは、自その性の善を棄る者を云、詳に下文に見えたり、
人苟以善自治、則無不可移者、
自治とは、自その氣質の偏を克治して、改るなり、
雖昏愚之至、皆可漸磨而進、

水に漸し、石にて磨くやうにして、やうやくに善にすまるとぞ、

唯自暴者、拒之以不信、自棄者、絶之以不爲、雖聖人與居、不能化而入也、仲尼之所謂下愚也、

昏愚の中にとり、自暴者は、善を聞けども、そむきもとりて信用せず、これを以て自善をふせぐ、自棄者は、善を知れども、をこたりすて、ふみ行はず、これを以て、自善を絶つ、これらは聖人これと共に居るといへども、感化して善に入ることあたはず、これ所謂下愚の移らざる者なり、

然天下自暴自棄者、非必皆昏愚也、往往強戾而才力有過人者、商辛是也、

往々は、毎々と云義なり、暴棄を下愚なりといへども、亦必しも昏愚なるのみにあらず、氣質強く、物に戻り

て、才智勇力、人にこえたる所ある者まゝ、多し、商辛が如きこれなり、辛は紂が名なり、

聖人以其自絶於善、謂之下愚、然考其歸、則誠愚也、

暴棄二つの者、畢竟みな自善道にたぢさかるを以て、聖人共にこれを下愚と云、愚ならざるには似たりといへども、その歸く所を考れば、まことにみな愚におつるなり、

既曰下愚、其能革面何也、

これ又問をまうく、もし下愚と云者ならば、外をあらたむることをも、知るまじきに、そのよく面を革るはなんぞと、

曰、心雖絶於善道、其畏威而寡罪、則與人同也、

威とは、上の法令の威嚴をさして云、唯其有與人同、所以知其非性、

之罪也、

その善を善とし、悪を悪とすること、人と同き所ありて、悪をおほひ、善をあらはすことを知る、この故に暴棄といへども、本性の罪にあらずして、氣質の然らしむる所なることを知るとなり、

○在物爲理、處物爲義、

處は、はからふ義なり、義は、宜の字の意なり、凡そ事に應じ、物に接るに、みな當然の理あり、物にあるを理とするなり、心に其理をさしはからひて、宜き所にかなはしむるを義とす、物を處するを義とするなり、此説蓋し告子が義外の説を正せり、朱子も義の字を訓して、心の制、事の宜といへり、義は即心に事の宜を裁制する處にして、外にあるにあらざるなり、

○動靜無端、陰陽無始、非知道者、孰能識之、

動靜の機をのづから互に相推てやまず、めぐれる環の端なきが如し、この故に陰陽のうつりかわること、陰の前は陽、陽の前は陰にして、いづれを始めとする

ことなし、

○仁者天下之正理、失正理、則無序而不和、

これ論語に、子曰人而不仁、如禮何、人而不仁、如樂何と云義を明せり、仁は專言の仁にて、義禮智信を兼ねぬ、それ仁は本心の徳にして、天下の道理、これより正きことなし、不仁の人は、心の全徳を失ふ故に、その發して事にあらはるゝ所、みなそむきもとりて次序なし、次序なきによりて、其事相和がぬなり、蓋し序は禮の本、和は樂の本なり、人もしそのする所、序でなくして和がざれば、禮樂の儀文物器をなはれども、これをいかなともすることなし、禮樂其人の用をなさざるなり、

○明道先生曰、天地生物、各無不足之理、

天地の萬物を生ずること、各一箇の太極を具足する故に、もと其徳の不足なる道理あることなし、

常思天下君臣父子兄弟夫婦、有多少不盡分處、

われ常に思ひみるに、天下の君臣父子兄弟夫婦たる者、忠孝順正等の道にをいて、そこばく其分量をつくさざる處ありと、然れば人その道あることを知らざる者は論せず、もし其道を行へども、行ひ得ざる所ある者、各其身にかへりて、自責めずばあるべからざるなり、

○忠信所以進德、終日乾乾、

これ易乾卦九三の爻辭文言の語を合せとく、乾々と、自強めてやまざる義なり、云意は、夫子徳に進み、業を修るを以て、君子終日乾々たるの事實とす、中にも忠信を、徳に進む所以のこととして、人をして終日乾々としてつとめしむと、蓋し忠信は、實心なり、心の實いまだ至らざる時は、工夫をつみても、其效なし、徳に進むことあたはざる所以なり、

君子當終日對越在天也、

對すとは、こなたよりさしむかふ義なり、越は、於の字と同じ、詞の助なり、在天とは、天にある神明なり、上帝をさす、此四字は周頌清廟の詩の詞なり、程子又これを引ておもへらく、君子終日天帝にさしむかふ敬畏を、忘れざるべし、然らば忠信の心至りて、工夫を用ること、をのづからやむことあたはずして、徳にすゝむことを得べしとなり、

蓋上天之載、無聲無臭、其體則謂之易、其理則謂之道、其用則謂之神、

此より下二段は、天と人と一理なることを云て、君子終日乾乾して在天に對越するの工夫を用ひざるこゝとあたはざる故をとく、首の二句は、大雅文王の詩の詞なり、載は事なり、道を以て云、體は、すがたと云義なり、云意は、天道は空虚にして、音も臭もなし、然れどもその陰陽の往來變化するすがたの顯然たるは、これを易と云、聖人卦にかたどりて、其變をつくせり、而してその往來變化する所以の理は、これを道と

云、此はこれ天道即無極にして太極と云者なり、その功用の見つべき處、これを神と云、即功用を以て鬼神と云なり、

其命于人則謂之性、率性則謂之道、修道則謂之教、

說中庸に詳なり、蓋し天理の人に命じてそなはれるは、これ性なり、然れば人心の動靜感應は、即天の易なり、言動作爲の見つべきは、即天の鬼神なり、上文の道は、此段の性にして體なり、この性に率ふの道は、用なり、此道を修めて、人行はしむるは、教へなり、これ上文をうけて、人の性道教、みな天理と一つなることを云、

孟子去其中、又發揮出浩然之氣、可謂盡矣、

去るとは、ゆくと云義なり、發揮は、ひらきふるふぞ、浩然とは、盛大大いにして、流れゆく貌、これ天地の間の正大の氣なり、人よく敬を持ち、義を積む時は、わが身に此氣を養ひ成して、天地の間にみちふさが

り、つねに道義の助けとなりて、天下の事大小となく、これを負ひ荷ひてよくせずと云ことなし、蓋し從上の聖人、たゞ道理をとく、孟子又其中にゆきて、養氣の工夫を發揮し出す、人これによりて、たゞ天人一理なることを知るのみならず、又人の氣と天地の氣と、一つに貫けることを知る、凡道體をとくことここにをいて盡くせり、

故說神如在、其上下如在、其左右大小大事、而唯曰誠之不可揜、如此夫、徹上徹下、不過如此、

これ又上文をうけ、中庸の語をひきて、天と人と、理氣すべて一つなり、この故に道體ゆくとして在らずと云ことなきを云、大小は、多小の義と同じ、誠は實理を云、徹は、とをるなり、云意は、中庸に説く鬼神を祭る時に、洋洋として、其上にも、其左右にもいます、が如く、流動充滿して、いちじるしと、かくの如くに、道體の發見そこばく盛大なることをときて、その結語に、實理のあらはにして、おほはれざることを、かく

の如しといへり、然れば上にして天地鬼神、下にして萬事萬物、凡あらゆる者、みな其上下に貫き徹りて、此道理の外に、こえ出ることなしと、かの君子必乾々對越する所以の意、亦其中にあり、

形而上爲道、形而下爲器、須着如此說、器亦道、道亦器、

これ又易繫辭の文をひきて、これを釋す、道とは、事物の理を云、器とは、事物の體をさす、物にある道理は、虚くして形なき故に、物の内にあれども、形よりして上なる者とす、上に對して云時は、その形體は、下にある者なり、もし形よりして上下といはずして、形なく形ありと云時は、物と理と相離る、よりてかくの如きの説をつくべし、然れば物は理の寓る所にして、常に相はなれざるを以て、器も亦道なり、理は物の物たる所以にして、外にあらざるを以て、道も亦器なりと、これ上文に道は天人一にして、在らずと云ことなきことをとくにうけて、則この道の須臾もはなるべからざることを云、これを以て、ますます君子乾

々對越する所以の意を明せり、
但得道在不繫今與後己與人
人よく道に體して、道我に在ることを得る時は、今の世と後の世と、己と人にかゝはらず、ゆくとして此道とそむきもとることなしと、これ道の一なることをいひきはめて、上文をひきむすび、徳に進みて、道を得る者よくかくの如くなることを示す、

○醫書言手足痿痺爲不仁此言最善名狀、

痿は、なゆる、痺は、しびる、なり、手足痿痺して、物にふれても、痛く痒きを覺えざる疾を、名づけて不仁と云、名狀とは、なづけかたどるなり、義は下文に見えたり、

仁者以天地萬物爲一體、莫非己也、

それ仁は、天地物を生ずるの心なり、人物みな此心を受け生れて、亦各これを以て其心とす、然れば天地と

なり、人物となり、其形體はわかるれども、其氣脈みな貫通して、己が身と一體にあらずと云者なし、この故に仁者の見る所、常にかくの如し、

認得爲己、何所不至、

認むとは、此を是と識り得る義なり、人よく天地萬物、みな己と一體の者なりと、體認し得る時は、其心いづくにかゆきと、かざる所あらんや、何物にをき何事につきても、自然に慈愛せずと云ことなかるべし、

若不有諸己、自不與己相干、如手足不仁、氣已不貫、皆不屬己、

もし身より外なる者を、みな己が身にある所ならずと見る時は、をのづから彼と己と、相おづからず、手足は一體なれども、不仁する時は、氣血相つらぬかすして、己が身につかざる者のやうなるが如くなり、不仁者の心、かくの如し、蓋し手足の不仁は、風濕の邪氣にへだてらるゝが故なり、人心の不仁は、物我の私欲にへだてらるゝが故なり、

故博施濟衆、乃聖之功用、

子貢ひろく恩澤を施して、民を濟ふことおほきは、仁といはるべきかと問ければ、夫子此はこれ唯仁と云のみならず、堯舜もなを難しとして、うれへ玉ふ所なりとの玉へり、程子これを引ておもへらく、仁の義は、上に云如し、この故に、子貢のとへる所は、これ乃聖人の功業作用にして、仁を求るには切ならずと、

仁至難言、故止曰己欲立而立人、己欲達而達人、能近取譬、可謂仁之方也已、

仁の徳たる、全體精微にして、至極いひがたき者なり、この故に、夫子たゞ子貢に告ての玉は、仁者は其心至公なるによりて、己が身をたてまく欲すれば、則亦人をも同くたせ、己がする所を達せまく欲すれば、則亦人のする所をも同く達せしめ、よく近く己が身に取りて、己が心を以て人にたとへ、人も亦己に同じことを知りて、その欲する所を推して、人に及

ばす、かくの如くなれば、私欲にへだてられずして、其愛をのづから物に及ぶ、これを仁を求るの方といひつべきのみぞと、

欲令如是觀仁、可以得仁之體、

聖人人の仁を求ること、外に向ひて、事功の上へ求めず、かくの如くに、わが心の内よりたづね見て、仁の本體を知り得さしめまく欲すと、仁の本體は、即天地萬物を以て、わが身と一體とするこれなり、

○生之謂性、

此章性を論じて、まづ性の名義より説き出す、性の字、心に從ふ、生は其聲、亦其義なり、蓋し性は即理なり、此理を人物生れうれば性と云、凡そ人物の生ずること、理これが主となりて、氣はその形質をなす、形質すでに成る時は、各一箇の性を具へて、本然の理、仍て其中に寓す、これ性の全體なり、然れども、氣質をなはりて後、はじめて性の名あり、よりて生を性と云なり、

性即氣、氣即性、生之謂也、

これ申て上句の義を明す、蓋し人物に、氣質をはなれたる性なき故に、性をいへば即氣質なり、氣質をいへば即性なり、而して氣質は唯これ性の形體なり、然れば性とは、即此生と謂ことなり、

人生氣稟理有善惡然不是性中元有此兩物相對而生也、

此より下二段は、通じて氣質の性を論ず、天地の氣に、清濁純雜あるによりて、人の生れて氣質を稟る所、善惡ひとしからざる道理あり、その清みて純なる氣をうくる者は善なり、その濁りて雜はれるをうくる者は惡なり、然れども、性の本然の理は、みな善なり、其中にもと善惡兩物ありて、人これをうくる時に、善惡相對して生ずるにあらざるなり、

有自幼而善有自幼而惡后稷之克岐克嶷子越椒始生人知其必滅若敖氏之類是氣稟有然也、

人の氣質善惡異なりといへども、生る、初は、なほ相近し、生れて後に、習れ染む所にしたがひて、善惡のおもむき相遠し、然れども又幼少の時よりして、即善惡見ゆるあり、本注后稷は、周の初祖、岐嶷は、すぐれてさかんなる義なり、后稷の生れて、はひゆく時より、すでによく人にすぐれたる形狀ありしとぞ、事大雅生民の詩に出たり、楚の司馬子長越椒を生ず、其兄子文これを見て云く、必これを殺せ、この子熊虎の狀にして、豺狼の聲あり、殺さずは必わが若敖氏の族を滅さんと、事左傳に見えたり、これ幼よりして善惡異なるの引證なり、此みな氣稟によりて、かくの如くなることあり、性の本體然るにはあらざるなり、

善固性也然惡亦不可不謂之性也、蓋生之謂性人生而靜以上不

容說才說性時便已不是性也、

此より下二段は、凡そ人、性の本體善なるを論ずること、しばらく氣質に雜へずして云ばかりにて、性の名義には、あたらざることをいひて、申て生之謂性の義を明す、人生而靜天之性也と云は、樂記の文なり、人初めて生れをち、人欲いまだおこらずして、靜なる時に、天理渾然としてあることを云、こゝにこれを引て云意は、人の生る、初にして、はじめて性の説あり、これより以上は、唯これ理なるによりて、性を説かれず、わづかに性を説く時は、生れて後の氣質におちて、即すでに性の本體にあらずと、

凡人說性只是說繼之者善也孟子言性善是也所謂繼之者善也者猶水流而就下也、

易繫に云く、一陰一陽之謂道繼之者善也、成之者性也と、一陰一陽、互に相推は、天地物を生ずるの機關にして、その然る所以の者は、これ道理なり、而し

てその生ずる所の氣、此陰陽繼ぎ續ぐの機に由て出づ、但いまだ質をなさず、此時に賦する所の理も、亦いまだ物につかずして、純粹至善なり、すでに形質を成せる時は、此理各物にそなはる、これ乃性なり、程子これを引ておもへらく、凡そ人性の本體善なることをとくは、唯これを繼ぐ者の善なるを以て云、孟子の性善なりと云これなり、孟子又云く、人性之善也、猶水之就下也と、程子又これによりておもへらく、所謂これを繼ぐ者の善、氣質の内にも變せずして、性の本體たるを知ること、四端の情の善なるの類、なを水の流れて、必下きに就が如くなるを以て、これを知らんと、

皆水也、有流而至海終無所汗此何煩人力之爲也、有流而未遠固已漸濁有出而甚遠方有所濁有濁之多者有濁之少者清濁雖不同然不可以濁

者不爲水也

これ上文に水を云にうけて、却て水の清濁を以て、氣質の善惡にたとへとく、皆水也とは、清むも濁るも、みな水なりとぞ、煩ふとは、俗にむづかしと云義なり、人力とは、濁りをすまず工夫をさす、これ第一に、氣質習染の蔽はれなくして、天然の全き者を云、これ聖人の性なり、其外は、清濁の遠近多少あり、遠近は、氣質さまでにあしからね共、習染にそこぬるの遲速を云、多少は、氣質を混じてとく、末二句は、上文善固性也と云の二句に應ず、

如^カ此^コ則^ニ人^ニ不^レ可^レ以^テ不^レ加^シ澄^ス治^ス之功^ヲ故^ニ用^フ力^ヲ敏^ニ勇^ニ則^ニ疾^ク清^ク用^フ力^ヲ緩^ク怠^ク則^ニ遲^ク清^ク

澄治とは、すましおさむるぞ、水の濁りを、あさせ、こして、すますること云、功は、工夫なり、敏勇とは、とくしていさむなり、緩怠とは、ゆるびをこたるなり、これ上文をうけて云、性の悪きは、みな氣質にして、その本體にあらず、かくの如くなれば、人まさに修爲

工夫の力を加へ、これを變化して、本性にかへるべし、而してその效を得るの遲速は、力を用ることの勇むと、怠るとによるとぞ、

及其清也、則却只是元初水也、不是將清來換却濁、亦不是取出濁來置在一隅也、

云意は、氣質の惡を變化して、善に至る時は、唯これ元初の天性なり、別に善性をもて來りて、惡性にひき換るにもあらず、亦その惡き處を取り出して、かた隅によせ置にもあらず、唯これ氣質を變化して、本來の性にかへれるなり、

水之清、則性善之謂也、故不是善與惡在性中、爲兩物相對、各自出來、

各自とは、をのくわれくと云義なり、云意は、水の本來清めるは、則性の本體なるのいはれなり、この

故に、その本體の中に善惡兩物相對しありて、其情各自に出来るにはあらず、情の惡きはみな氣質のなす所なり、

此理天命也、順而循之則道也、循之而修之、各得其分則教也、自天命以至於教、我無加損焉、此舜有天下而不與焉者也、

これ上文に性の善なることを論ずるにうけ、中庸の性道教の説によりて、性善の分量を推し廣む、云意は、此性善の理は、天命によりて具はる、よくこれにうけ順ひて、その條理のまゝに循ふ時は、これ日用當然の道なり、これに循ひて、これを品節し、天下の人物をして、これに由らしめて、各その分際を得るは、これ教なり、天命の性より、教に至るまで、ひたすら天理のまゝにして、一毫もわが智慮作爲を以て、これに加へ、これを損することなし、これ聖人にあらざれば、あたはざる所なり、これ舜の天下をたもちて、至治をなし玉ふこと、みな天理のまゝにして、我これと相あ

づからすと云者なりと、文は論語に出たり、

○觀天地生物氣象、周茂叔看

天地の造化流行して、萬物を發生長育すること、ひろくあまねくして、條理通達す、人この氣象を觀る時は、その良心をして、油然として生せしむるの益あり、仁の體を知るにちかし、昔周子その窓の前の草、はらはせずして云く、生意自家と一般なりと、本注これを引て、此事程子にはじまらざることを云、

○萬物之生意最可觀、

萬物發生の意、これ初めてきざしもゆる時につきて云、此時最見るによしと、意は上章の如し、

此元者善之長也、斯所謂仁也、

元は善之長也とは、乾卦文言の詞なり、それ元は四徳をかぬ、時にをいては春なり、人道を以て云時は、即これ仁にして、萬善の長がしらなり、萬物の生意を見るによきは、この故ぞと、義は前章に詳なり、

○滿腔子是惻隱之心、

腔子とは、身のことなり、俗にからだと云が如し、惻隱とは、孟子の文、人の患難疾苦を見て、おどろきいたむ心なり、それ人の血肉の心、その用一身に充ち満る故に、手足のつまさきまでも、わづかにさしつくことあれば、その痛みをほえずと云ことなし、これ即わが惻隱の真情なり、程子此言、人わが痛みを知るの心、即人の痛みを惻隱するの心なることをさとりて、これを推し充てまく欲してなり、蓋し人みな天地の生氣をうけて生れ、即その生意を以て心とす、この故に、人心の徳、即これ仁にして、物をあはれみ、いつくしますと云ことなし、然れば身の痛く痒きことも、その歡び戚ることも、人と我と、異ならず思ふべき道理なり、されども常人は、人我の形ことなる處より、私欲生じて、ふさぎへだてらるゝなり、もしよくその私欲を克治する時は、心の徳全うして、天理流行し、惻隱の情をのづから物に及ばすと云所なし、天地萬物一體の仁を示すこと、これより切なるはなし、

○天地萬物之理無獨必有對、皆自然而然、非有安排也、

安は、をく、排は、つらぬるなり、凡そ天地萬物の理、ひとりだちなる者なし、必相對することあり、天地陰陽寒暑晝夜、男女生死、寤寐動止の類、これなり、此みな自然にしてかくの如し、一つも人のをきつらねたることあるにあらず、

○中者天下之大本、

每中夜以思、不知手之舞之、足之蹈之也、

中夜に理の對あることを思ふことに、條理通達して、ふさがる所なし、そのおもしろきこと、舞樂に熟したる者の、手にまひ足のふむ所、をのづから拍子にあひて、われこれ知らざるが如し、本文は樂記並に孟子に出たり、

說前章に見えたり、

天地之間、亭亭當當、直上直下、之正理、

亭々當々とは、物のよきほどに、ちやうどあたりたる

義なり、直上直下とは、ますますにして、上下にとをりぬけ、前後左右に、かゝりさはることなき義なり、その天地の間の正理なることかくの如し、

出則不是、

此中發して外に出る時は、即これ和中にして、中にあらず、

惟敬而無失、最盡、

中を存養する工夫は、たゞ敬してこれを失ふことなきを、最つくせりとするなり、即その略ざるにも、戒愼し、その聞かざるにも、恐悞すること、これ此中を存して、失ふことなきの方なり、

○伊川先生曰、公則一、私則萬殊、

凡そ人心公なる時は、諸人の心みな一つなり、私なる時は、諸人の心萬般に殊なり、かくの如くなれば、下文と一意なり、又此段を一人の心に見るも可なり、云意は、凡そ人、心を立ること公なる時は、萬事に應ず

といへども、唯純一にして、理の當然を見るばかりなり、もしそれ私なる時は、一事に應ずといへども、千緒萬端にわかれて、定まらず、

人心不同、如面、只是私心、

上の句は、鄭の子産が語、左傳に出たり、天下の人心、各かはれること、その面の異なるがごとし、唯これ人々、己を私にするの心なり、もし彼此共に公なる時は、その同じこと、符節を合するが如し、

○凡物有本末、

文大學に出づ、凡そ事物の間に、本とする所の者あり、末とする所の者あり、亦一事の上にも、本末あり、

不可分本末爲兩段事、

事は萬殊にして、本末わかるれども、理は唯一つにして、本末精粗なし、わきて兩段のこととせられぬなり

洒掃應對、是其然、必有所以然、

洒掃應對は、童子の禮節なり、文は論語、義は大學の序に詳なり、然りと云は、如此と云義なり、事を以て云

時は、心を治め、身を修るは、大節にして本なり、洒掃應對は、小節にして末なり、節文小きなること、これそれ然りといへども、亦必その然る所以の理あり、理は唯一つにして、大小本末なし、

○楊子拔一毛不爲

楊子は、楊朱なり、其道たゞ我が爲にするばかりにとりて、人のためには、身の毛一すぢぬくほどのことをもせず、

墨子又摩頂放踵爲之

墨子は、墨翟なり、其道人をひとしく兼ね愛して、その親疎をわかず、もし人に利あることなれば、頂より踵にいたるまで、一身体にあたりて、つきすらるゝほどの勤苦をも、いとふことなくして、これをするなり、

此皆不得中

二子のする所、みな中道を得ず、

至如子莫執中、欲執此之二一者

中

子莫は、魯の賢人なり、楊墨が道、みな中を失へりと思ふ故に、此二つの者の中分をとりて、これを用ひまく欲す、此三子の事、みな孟子に出たり、

不知怎麼執得

物の中分を中とするは、定れる處あり、子莫これを執らまく欲す、聖人の時中は、時にとりての理の當然、即至善のある處なり、中にもあり、端にもあり、又外にもあり、定れる處なし、いかんとしてこれを執り得ん、子莫此道理を知らざるなり、

識得則事事物物上皆天然有箇中在那上不待人安排也安

排着則不中矣、道理を知り得る時は、事々物々の上に、天然としてこの中なる處、各その上にありて、人の安排することを待たず、もし人知慮を以て安排して、中とする處は、眞の中にあらず、着とは、只つけ字なり、

○問時中如何

時中とは、中庸の君子にして時に中するの中なり、

日中字最難識、須是默識心通

凡そ道理を會得すること、唯言語を以て解説するばかりにては、いまだ意味の深き處を得がたし、この故に、黙して其理を認め識り、われとみづから、心を以てこれに通すべし、

且試言

しばらく云て見んとぞ、

一廳則中央爲中

廳とは、端の間なり、中央は廳のまんかななり、

一家則廳中非中、而堂爲中

廳中は、廳の中央、堂は、一家の中の間なり、

言一國則堂非中、而國之中爲中

國の中は一國の中央なり、

推此類可見矣

上に云所は、唯その一例なり、

如三過其門不入、在禹稷之世

爲中、若居陋巷則非中也、居陋巷、在顔子之時爲中、若三過其門不入則非中也、

禹の水を治め玉ふ時、外にあること八年、事いそがはしかりける故に、三たび其門外を過ぎて、内に入り玉はず、稷は、后稷農事をつかさどる、水治まりて耕作すべし、其事相まつを以て、稷を並せ云、顔子は亞聖の徳、王佐の才あれども、時に道をこなはれず、又夫子教を主どり玉ふ故に、自事とする所なし、よりて陋巷にかくれて、身を終へたり、其跡甚異なりといへども、皆時中なり、もし彼此其時を相易れば、みな中にあらず、もし其處を相易へば、顔子も亦禹稷の如くなるべし、禹稷も亦顔子の如くなるべし、事はみな孟子に見えたり、

○無妄之謂誠

一念一動、をのづからみな眞實にいで、一毫も、うきて妄なることなきは、これ天道の誠に至れるなり、

不欺其次矣

力を用ひて、眞實を守り、かりにも敢て欺くことをせざるは、これ誠を思ふ人道にして、自然に誠なる次なり、

李邦直云、不欺之謂誠、便以不

欺爲誠、徐仲車云、不息之謂誠、

中庸言至誠無息、非以無息解

誠也、或以問先生、先生曰、云云、

不欺を以て即誠とするも、いまだあたらず、又至誠やむことなしと云は、眞實の心常久にして、しばらくもたえまなきことを云、不息を誠の義とするにあらず、よりに或人此兩説を以て、伊川先生にとひければ、先生のこたえかくのごとし、

○沖漠無朕、萬家森然、已具

沖漠とは、あはゆくしづかにして、色も音もなき貌なり、朕とは、獸の子の目いまだ開かずして、そのあはせめばかりあるを云、よりに物のきざしを朕とす、無朕とは、これもなきなり、森とは、木の多き貌なり、それ理は影形なけれども、其内に萬事の法象、森然としてすでにことごとく具はる、なほ無極にして太極といひ、體用一源云が如し、

未應不是先、已應不是後

これ上文の意を人心につきて云、その寂然としていまだ物に應せざる時は、これ先なりといへども、其内にそなふる所の者、唯これ應ずる事の理なるによりて、これ先ならず、感じて應ずる時は、これ後なりといへども、その事にあらはる、所の者、いまだ應せざる先の理なるによりて、これ後ならず、

如百尺之木、自根本至枝葉、皆

是一貫

百尺の木は、大木なり、根本は地中にかくれて、未應

の時の如し、枝葉は地上にあらはれて、已應の時の如し、されども上下の氣脈一貫して、兩段へだたれるにあらず、

不可道上、面一段、事無形、無兆

却待人旋安排、引入來教、入塗

轍

兆は、物のきざしなり、旋とは、くりつゝくる義なり、塗轍とは、塗はみち、轍は車のあと、なを路脈と云が如し、俗に云みちすぢなり、云意は、上面一段未應の時、形も兆もなく、唯茫々と虚無にして、已應の時、はじめて發生する道理を、却て人のうたゝ安排するを待ちて、それくの事爲の路脈にひき入れ來らしむと云べからず、未應の時に、ことごとく具はれる道理、感ずることあるに隨ひて、あらはれ出るばかりなり、即根本枝葉一貫するが如し、

既是塗轍、却只是一箇塗轍

すでにこれ路脈あれば、未應已應、唯これ一すぢの路

脈にして、かくれたると、あらはれたるとの、異なるばかりなり、

○近取諸身、百理皆具

天地萬物、その理も一貫す、この故に、近く身に取りて見れば、百理みな具る、

屈伸往來之義、只於鼻息之間見之、

百理身に具はる故に、屈伸往來の義、唯鼻息の間にても見ゆるなり、蓋し息の呼は來りて伸る者なり、吸は往きて屈まる者なり、

屈伸往來只是理、不必將既屈之氣復爲方伸之氣、生生之理、自然不息、

屈伸往來する者は、氣なれども、その然る所以の者は、唯これ理なり、必しも既に屈まるの氣を以て、又方に伸るの氣とするにあらず、往きて屈まるの氣散

じ肅くれば、來りて伸るの氣新に生ず、これ天地生々の理、かくの如くなるによりて、屈伸往來の氣も、自然に相推してやまざるなり、もし既に屈まるの氣、又方に伸るの氣とならば、天地の間に、唯許多の氣ありて、來々去々するばかりなり、造化の功、豈窮まらざることを得んや、釋氏此理を誣みて、輪廻の説あり、

如復卦言七日來復

陽氣五月の夏至より、はじめて消じ、十月に舊陽上に消じ盡くれば、十一月の冬至に、新陽即又下に生ず、前後七箇月めの日に、必來り復るとぞ、

其間元不斷續、陽已復、生物極必返、其理須如此、

坤と復との間、陽氣一たび斷えつきて、又別に續ぎて生ずるにあらず、蓋し生々の理やまざる故に、元氣も亦生々して、斷續なし、唯陽氣上に極まるによりて、又下に復り生ずるなり、陰氣も亦これに同じ、凡そ物極りて必返る、其理みなかくの如なるべきなり、

有生便有死、有始便有終、

物の生死、事の始終も、亦みな一理なり、生あればすなはち死あり、死するによりて又生ず、されども既に死したる者、又生するにあらず、事の始終も亦これに同じ、

○明道先生曰、天地之間、只有一箇感與應而已、更有甚事、

感應の字義、前に見えたり、凡そ天地の間のこと、陰場の造化、時運の盛衰、萬物の始終、人事の往來、みな一感一應の理にもる、ことなし、此外さらに何事かあらん、

○問仁、伊川先生曰、此在諸公自思之、

諸公とは、即仁を問ふ諸弟子をさす、自思ひとるべしとなり、
將聖賢所言仁處、類聚觀之、體

認出來

これ自思ふの方を示す、類聚とは、其類を以てこれを聚るなり、體認とは、心その事と一體になりて、理味を親しく認め知るなり、

孟子曰、惻隱之心、仁也、後人遂以愛爲仁、愛自是情、仁自是性、豈可專以愛爲仁、

此より下は、聖賢仁を云所を、類聚して見る一例なり、惻隱は即愛なり、心は性情をかねずる者なるによりて、惻隱は情なれども、大概に亦心と云、然るを後人知らずして、愛を即仁とするなり、

孟子言、惻隱之心、仁之端也、既曰、仁之端、則不可便謂之仁、

これ孟子の正説を以て、前説の意を明す、
退之言、博愛之謂仁、非也、仁者固博愛、然便以博愛爲仁、則不

可

韓退之仁の用を以て、即體の義を釋するは非なり、周子の云く、徳愛曰仁、徳は體用を兼るの字なり、これは其徳の用を以て、其體に名づくる故に、不可なり、

○問仁與心何異、

その異なる所をとふ、
曰、心譬如穀種、生之性便是仁、陽氣發處乃情也、

張子の云く、心は性情を統ぶ、朱子の云く、仁は心の徳、愛の理なりと、蓋し人心をのづから生を好み、物を利する意を具へたるは、これ其徳にして仁なり、體なり、なを五穀の種の如し、穀種の全體は、これ心なり、その發生の性をふくみたるは、穀種の徳、これ仁なり、此仁即亦これ物を愛する所以の理にして、發見する時は、よく愛をなす、愛は情なり、用なり、なを穀種の陽氣發して、さざしめぐむ處の如し、

○義訓宜

事理を裁制して、宜きに稱はしむる處なり、
禮訓別、

上下親疎、男女長幼の分別を主とす、

智訓知、

是非異同をわき知る所以なり、

仁當何訓、說者謂訓覺訓人、皆

非也、

覺とは、痛痒歡戚をおぼゆる義なり、惻隱之情、四端
につらぬく故に、仁者は事に在いて、覺せすと云所な
し、されども覺を以て、仁をば訓せられぬなり、中庸
孟子に、仁は人なりと云といへども、唯これ人の人た
る所以の理を以て、親切に其義をさし示す詞なり、亦
以て仁の字を訓するにあらず、

當合孔孟言仁處、大概研窮之、
必しも一字を以て訓すべからず、研窮は、みがききは

むるなり、

一三歲得之未晚也、

仁の義全體精微にして、急速に得がたければなり、

○性即理也、

理は、天下公共の道理、性は、即物のうけ具へたる理
なり、

天下之理、原其所自、未有不善、

此より以下、理の本善なるを以て、性の本體善なるこ
とを明す、所自とは、事物のよりてはじまる所を云、

喜怒哀樂未發、何嘗不善、

未發の前、形氣いまだ事を用ひず、この故に、唯善の
みにして、惡の名づくべきなし、

發而中節、則無住而不善、

喜怒哀樂の情發して、みなそのよきほどにあたる時
は、則亦天性のまゝなる故に、ゆくとして善ならずと
云ことなし、孟子の集註にこれを引て、此間に發而不

中節、然後爲不善と云二句あり、其義最明なり、

故凡言善惡、皆先善而後惡、言

吉凶、皆先吉而後凶、言是非、皆

先是而後非、

事の初は皆善なる故に、人の詞に出る所も、大抵亦か
くの如くなり、

○問心有善惡否、曰、在天爲命、

在物爲理、在人爲性、主於身爲

心、其實一也、

物とは、事を兼て云、心は一身の主宰なり、心は性を
以て體とする故に、亦性と一なりと云、

心本善、發於思慮、則有善有、不

善、

性善なる故に、心の本體も亦善なり、

若既發、則可謂之情、不可謂之、

心、

程子此一句、いまだ瑩けざる所あり、蓋し心は體用を
兼ね、その情意に發するをも、亦心と云べし、朱子の
云く、既に發する、これを心に非すと云べからず、但
不善ある時は、則心の本體にあらず、

譬如水、只可謂之水、至如流而

爲派、或行於東、或行於西、却謂

之流也、

派とは、水のわかれて、ながるゝを云、朱子の説によ
る時は、水の流派をも、亦水と云べきなり、

○性出於天、

性は天より人に命するの理なり、出るとは、其由て來
る所を云、

才出於氣、

才は、材の字の義なり、人の能を云、事を爲るに堪た
る所あるなり、これは其氣質より出づ、

氣清則才清、氣濁則才濁、才則有善有不善、性則無不善、

○性者自然完具、

人性仁義禮智の徳一つ、自然に完く具はりて、彼此相借らず、

信只是有此者也、故四端不言信、

信は唯これ仁義禮智の實にこれあるを云、四つの者の外に、別に信あるにあらず、この故に、惻隱羞惡辭讓是非の四端の外に、信の情あることを、いはざるなり、

○心生道也、

人心は、天地生々の徳を具へたる者なり、これ其徳の行はるゝ所より云、この故に徳といはずして、道と云歟、

有是心、斯具是形、以生、

易繫に云く、天地の大徳を生と云、蓋し天地の心、物を生ずるの外なし、人此徳によりて生れ、乃亦此徳をそなへて心にあり、これを仁と云、必此心をうけ生るゝ者にして、乃此形を具へて、こゝに此身あり、これ仁は人の人たる所以の者なることを見る、

惻隱之心、人之生道也、

惻隱の心は、仁の發用、これ人の身の生をうけて、今日に至るまで、此身の生ける所以の者なり、然れば生々の徳は、天の仁道、惻隱の心は、人の生道、二つあるにあらざるなり、

○横渠先生曰、氣塊然太虚、升降飛揚、未嘗止息、

此章は元氣の流行變化することを論ず、氣は、元氣なり、塊然とは、盛大にして、ほのかにみちみてる義なり、大虚は、虚空なり、升降は、此氣の降り降る兩端あることを云、飛揚は、とびうかむなり、その升降の間に、往來する遊氣をさす、升降飛揚の氣は、物を織るたてぬきあるが如し、上古よりこのかた、かくの如く

にして、しばらくも息まざるなり、

此虚實動靜之機、陰陽剛柔之始、

虚實は、有無生死なり、上文の升降飛揚の氣は、これ天地の造化をなす所、虚實相變し、動靜相推すの機にして、陰陽剛柔の物の、體を成す始なり、

浮而上者陽之清、降而下者陰之濁、

物すでに形體を成すに至りて、其うきて上る者は、陽の類にして清めり、其降りて下る者は、陰の類にして濁れり、而してその大なる者は、天地となりて、凡そ輕清なる者はみな天に屬し、重濁なる者はみな地に屬す、

其感遇聚結、爲風、雨、爲霜、雪、萬品之流形、山川之融結、糟粕煨燼、無非教也、

これ又造物の變化を云、或は彼來りて此を感動し、或は此往きて彼に遇合し、乃聚り結んで、形質をなす所の者風雨霜雪以下、みな是なり、萬品は、萬般の品物これ人物をすべて云、流形とは、形を賦してしきつらぬるぞ、融は、とくるなり、水流につきて云、結は、山石につきて云、糟粕は、滋味をしぼりたるかすなり、煨燼は、火のもえしさりたる灰なり、此二つは造化の査滓なり、凡そ有情無情の物、至理具はらずと云者なき故に、よくこれを觀れば、糟粕煨燼も、世の教にあらすと云ことなし、

○游氣紛擾、合而成質者、生人物之萬殊、

游氣紛擾は、即上章の飛揚の氣、往來遊蕩して、紛れ擾るゝなり、かくの如くにして、ついに凝り合ひて物の形質を成す、これ人物萬品の殊なる者を、生出する所以なり、

其陰陽兩端、循環不已者、立天地之大義、

陰陽兩端は、即上章の升降の氣、循環とは、循れる環の如くに、始終なくしてめぐること、大義は、大經と云が如し、陰陽の兩端相推すこと、循環してやまざる者は、これ游氣紛擾の間に、その紀綱となりて、天地造化の大經を立る所以なり、游氣紛擾は、緯なり、陰陽循環は、經なり、經緯を以て織り出す者は、人物の萬殊なり、

○天體物不遺、猶仁體事而無不在也、

體物とは、物の體となるなり、凡そ天の生ずる所の物、人の一身につきて云時は、四肢百骸、一毛一髮、これとなく天理つらぬきて、其體となり、一つもこれは、天の體せざる所として、とりわきてのこしをかることなし、その萬物に體することも、亦みな然り、これなを仁の萬事に體して、ゆくとして在らずと云ことなきが如くなり、其義下文に見えたり、

禮儀三百、威儀三千、無一物而非仁也、

これ仁事に體する一例をあぐ、禮儀三百、威儀三千は、中庸の文、一物は、一事と云が如し、禮儀は經禮にして、大綱なり、凡そ三百條あり、威儀は曲禮にして、細目なり、凡そ三千條あり、それ亦一事として、愛敬懇惻の仁より出る者にあらずと云ことなし、もし仁心なき時は、禮を行ふといへども、みな虚文なり、

昊天曰明、及爾出王、昊天曰且、及爾游衍、無一物之不體也、

詩の大雅板の篇の詞をひく、昊天は、たゞ天なり、その元氣廣大なる所よりこれを稱す、爾とは、天より人をさす詞なり、王は、往の字と通ず、云意は、天道照明にして、てらさすと云所なし、人のいでゆき、あそびたのしむ處までも、凡そ行住坐臥一つとして、天これと共につれてせずと云ことなし、これ天一物の體せざる者なき所なりと、人よくこれを知る時は、常に天威を敬畏する意わすれずして、かりにも道理にそむきもとることあたはざるなり、

○鬼神者、二氣之良能也、

良とは、自然によき義なり、それ鬼は陰氣の靈なる處、神は陽氣の靈なる處、その屈伸往來して、造化をなすこと、これをせしむる者なくして、自然にこれを能くす、よりに二氣の良能と云なり、

○物之初生、氣日至而滋息、

滋息は、しげります義なり、凡そ物の初めて生ずるより後、其氣日々にすゝみ至りて滋息す、人の初生より、壯年に至るまでもこれなり、

物生既盈、氣日反而遊散、

遊散は、たゞよひちる義なり、物生じて其氣既にみちきはまる時は、日日にしりぞき反りて遊散す、人の老ひて死に至るまでもこれなり、

至之謂神、以其伸也、

其氣至りて伸る處を神と云、即伸の字の義なり、

反之謂鬼、以其歸也、

其氣反りて歸る處を鬼と云、即歸の字の義なり、又くみまじへて云時は、人の生ける間は、神なり、その老

て死するまでは、神中の鬼なり、人の死して後は、鬼なり、これを祭りて來格するは、鬼中の神なり、

○性者萬物之一源、非有我之得私也、

天下唯一太極の理にすべて、人物各これうけて性とす、なを水の流派は多けれども、其源を一つにするが如し、よりに萬物の一源なる者と云なり、すでにこれ一源なる時は、この性の徳、これ天下公共の者にして、我ひとり私にすることを得る者にあらず、

惟大人爲能盡其道、

大人とは、聖人を以て云、其道を盡すとは、所謂其性を盡すなり、凡そ性中にそなはれる道理、これを知り、これを行ふこと、つくさずと云所なきを云、

是故立必俱立、知必周知、愛必兼愛、成不獨成、

萬物一源の性を盡せる故に、立つ時は必物と俱に立ちて、われ獨たたず、知ることとは物と周く知りて、わ

れ獨知らず、愛することは物を兼ね愛して、われ獨愛せず、成る時は物と同く成りて、われ獨成らず、彼自蔽塞、而不知順吾理者、則亦末如之何矣、

かの私欲を以て、自蔽ひ塞ぎ、わが性の理に順ひて、これを盡すことを知らざる者は、己を成し物を成す道にをいて、いかんともすることなかるべしとぞ、一説に自われと蔽塞して、わが性を物と共にすること知らざる時は、大人といへども、亦いかんともすることなしと、これを化することあたはざることをいへり、

○一故神

天地の化、陰陽兩端ありて、兩端もと一氣なる故に、その神靈妙用、はかりがたし、譬之人身、四體皆一物、故觸之而無不覺、不待心使至此而後覺也、

覺るとは、痛痒をおぼゆるなり、物わづかにふれて、即さること、その心使ひ、物のふる、處に至るの後をまたず、

此所謂感而遂通、不行而至、不疾而速也、

此三句は、みな易繫に筮占の感應神速なることをとく詞なり、こゝには借て、心の靈妙をとく、云意は、わづかに感動することあれば、即通じてこれに應じ行かざれども、をのづから至り、疾くせざれども、をのづから速なり、

○心統性情者也

統ぶとは、主宰たる義なり、仁義禮智信の五性は、體なり、喜怒哀懼愛惡欲の七情は、用なり、心は體用をかね、性をそなへて、情を發す、よりにこれを統ぶと云、

○凡物莫不有是性、一物必一性を具ふ、

由通蔽開塞、所以有_二人物之別_一、

性の本體は、みな善なれども、氣稟ことなるによりて、通れると、蔽はるゝと、開けると、塞がれるあり、通蔽は、共に人の性を云、物に對して云時は、開は人の性なり、塞は物の性なり、

由蔽有_二厚薄故有_二智愚之別_一、

人性の蔽に、又厚薄あるによりて厚きは愚なり、薄きは智なり、

塞者牢不可開、

物の性は、塞かれること牢くして、ついにひらかれず、

厚者可以開、而開之也難、

人の性はその蔽はるゝこと厚けれども、修學の功を以て開かるべし、されどもこれを開くこと難し、

薄者開之也易、

蔽はるゝこと薄き者は、開けやすし、

開則達于天道、與聖人一、

開きて通するの功成る時は、性の本體にかへり、天道に達して聖人の性と一なり、

爲學類凡百十一條

學者すでに道體のおほむねを明にせば、則ち學を爲る大方をきはむべし、よりに此卷道體に次ぐ、

濂溪先生曰、聖希天、賢希聖、士

希賢、

聖人は人道の至りなる故に、たゞ天道と一致ならんことを希ふ、これ聖人の學なり、然らば賢と士とは、なんぞ聖と天とを志として、これを希はざる、蓋し學者心を立るとは、廣大ならんことを要すれども、志を立るとは、近切ならんことを要す、此三つの希ふは、志を立るを以ていへり、心を立るとはなを知に屬す、學を爲るの本領なり、志を立るとは行に屬

す、必この地に至らんことを求めて、いまだ得ざれば
さしをかぬなり、この故に、志す所は分に隨ひて異な
り、もし實に志す時は、たとひ聖賢に至らずといへど
も、亦可なり、たゞ泛然として企て及ばれぬ所に至ら
んと、みだりに期するばかりは、これ志を立るにあら
ず、

伊尹顔淵大賢也、

此より以下、士の賢を希ふことを説く、

伊尹耻其君不爲堯舜、一夫不
得其所、若撻于市、

伊尹道を以て自任するの重きことかくの如し、事は
商書孟子に出たり、

顔淵不遷怒、不貳過、三月不違
仁、

顔子聖人學ぶの精きことかくの如し、文は皆論語な
り、

志伊尹之所、志學顔子之所、學、

士たる者伊尹の君をたすけ、民を濟すの志を以て、わ
が志とし、顔子の心を正うし、身を脩るの學を以て、
わが學とせばなり、
過則聖、及則賢、不及則亦、不失
於令名、

もし賢を希ひて、その志す所をこゆる時は、聖人にも
至るべし、唯その志す所に及ぶ時は、賢なり、もしそ
れ及ばずといへども、その道正きによりて、わが令名
名譽は失はぬなり、

聖人之道、入乎耳、存乎心、蘊之、
爲德行、行之爲事業、

聖人の道は、天然に出て、人の實用に利あらずと云こ
となし、この故に、よくこれを學ぶ者は、耳に入りて、
則心にとまり、これを身につめば、徳義行實とな
り、これを外に行へば、國家天下ををさむる、事爲功
業となるなり、

彼以文辭而已者、陋矣、

伊川先生曰、學以至聖人之道
也、

顔子の學ぶ所かくの如しと、

聖人可學而至歟、

又問ひをまうく、聖人は生知安行の人なるに、學を以
てその地位に至られんやと、

曰、然、

至らるべしとなり、

學之道如何、

又問ひをまうく、聖人を學ぶの道いかんと、

曰、天地儲精、得五行之秀者爲
人、

天地の精氣あつまりたくはふるによりて、萬物をう
みだす、中にも五行の氣の秀たるを得る者は人とな
る、

聖道の重きことを知らずして、かの詩文辭章をのみ、
事とする者は、其學淺陋にして、己を修め、人を治む
る用をなさず、

○或問、聖人之門、其徒三千、獨
稱顔子爲好學、

事論語に見えたり、聖人は孔子なり、此章は、伊川の
顔子好學論なり、伊川二十歳にて、國學に在し時、胡
安定先生此事を題にして、諸生を試みられし時、伊川
此論を作りて對へり、これはじめにまづ問ひの詞を
まうく、

夫詩書六藝、三千子非不習而
通也、

詩書は、六經の二つをあぐ、六藝は、禮樂射御書數、こ
れ孔門教學の常法なり、

然則顔子所獨好者何學也、

これまで問ひの詞なり、

其本也、眞而靜、

人の天然の本性は眞實にして、人爲の偽りなく、且生る、初は、いまだ物に感動せずして静なり、

其未發也、五性具焉、曰仁義禮智信、

これ上の段の意を申ねとく、其未發は、即静なる時なり、仁義禮智の五性は、即本然の眞なり、

形既生矣、外物觸其形、而動其、中矣、其中動而七情出焉、曰喜怒哀樂愛惡欲、

人形をそなへて、既に生ずれば、外にまじはる物、その形にふれて中心を感動す、中心うごきて、七情感ずるに隨ひて發出す、喜び怒り哀しみ愛れみ惡み欲ふ心これなり、樂を一つに懼に作る、

情既熾而益蕩、其性鑿矣、七情すでに熾にして、火のもえ出るが如く、又ます

然後力行以求至、所謂自明而誠也、

これ上文をうけて云、其情を約にして、心を正うし、性を養ふは、存養の工夫にして、學をする大本なりといへども、又そのまゝ、みゆく道には、致知力行の次第あるとなり、養の字を、往と作りたる本を是なりと、朱子の説に見えたり、學をするの道、まづ其理を心に明にして、ゆく所の道を知り、然して後に、其知る所を力め行ひて、以て志す所に至らんことを求む、これ中庸にいはゆる自明而誠あるなり、蓋しまづ善を明にするに由りて、其身を誠にして、以て知る所の善を實にするなり、

誠之道、在乎信道篤、

此より下は、上文明誠の工夫を用ひて、其效を得る所以の道をとく、誠之と云内に、これを明にする意をも兼て見るべし、道を信すること篤き時は、異端邪説にまどふことなし、心に明なるの效、これに由りて得るなり、

蕩ひて、水のながれゆくが如し、情はもと性より出づといへども、熾にして蕩ふに至る時は、其性反てうがちやぶらる、

是故覺者、約其情、使合於中、正其心、養其性、

覺者とは、道理を明に覺る者なり、其情の發する所をつまやかにして、蕩はしめず、其事に應ずる所をして、過不及なき中になはしむ、よりにて其心正きことを得て邪まならず、其性養ひを得て鑿たれず、

愚者則不知制之、縱其情而至於邪僻、梏其性、而亡之、

僻は、ひがむなり、梏は、手械なり、物をしばりいたむる義にとる、愚者は情を制約することを知らずして、これを縱にして、其發するにまかす、よりにて其心正きことを得ずして、邪僻に至り、其性養ひを失ひて、いため亡さるゝに及ぶ、

然學之道、必先明諸心、知所養、

行ふこと果すと、いさみすゝんで、たゆまざること

を云、之の字は道をさす、下同じ、

行之果、則守之固、

守ること堅固にして動かす、行の果すと、守るの固きには、前後なし、みな力め行ふの效を得る所以なり、

仁義忠信不離乎心、

これ道を信することの篤き效なり、

造次必於是、顛沛必於是、出處語默必於是、

造次とは、いそがはしく、かりそめなる時を云、顛沛とは、顛倒流浪する時を云、論語の文なり、出處は、出て仕へ隠れて處る時を云、是の字、もと仁をさせども、こゝには上の道の字をうけて云、これ皆行ふことの果せる效なり、

久而弗失、則居之安、

シラシラ、ザルハ、チチル、スシ

久而弗失、則居之安、

久而弗失、則居之安、

上に云所のこと、久きを歴て、とり失はざるは、これ守ること固き效なり、よくかくの如くなる者は、身の居る處、安定におちつきて、少もあやぶみおそるゝ所なし、これ道を得て、徳の成れるなり、

動容周旋中禮而邪僻之心無自生矣、

動容とは、うごきはたらぐ容儀なり、周旋は、めぐるなり、曲折の義にとり、中禮とは、をのづから禮節にかなふぞ、これ孟子の文なり、かくの如くにして、邪僻の心これによりて生ぜざるに至るは、これ聖人にちかし、

故顔子所事則曰非禮勿視非禮勿聽非禮勿言非禮勿動

此より下は、顔子學を好むの事實をとく、此段は論語をひく、これその行ふことの果し、守ることの同じ工夫なり、

仲尼稱之則曰得一善則拳拳

服膺而弗失之矣、

稱すとは、ほむるなり、得るは、聞き知るぞ、拳々は、さゝげもつ貌なり、これ亦篤く信じて、行ひ守るの功なり、

又曰不遷怒不貳過有不善未嘗不知知之未嘗復行也

上は論語の文、これよく非禮に克つること、下は易繫の文、これその善に明にして、過を二たびせざるのこゝと、共に明誠の效なり、

此其好之篤學之之道也、

然聖人則不思而得不勉而中

此より下は、顔子の學、分明に聖人に至る道なれども、短命なりける故に、いまだ聖に至らずして終れることを云、此段中庸の文をひく、聖人は生れながらにして知る故に、思はずして其理を得、又安んじて行ふ故に、勉めずして其道にあたるなり、

不求諸己而求諸外

己に求るは、即善を明にし、身を誠にするの學、外に求るは即下文に云所これなり、

以博聞強記巧文麗辭爲工榮華其言鮮有至於道者則今之

學與顔子所好異矣、

博聞とは、學び聞く所博きぞ、強記は、強く記すぞ、記すは、おぼゆる義なり、これ記誦の學を云、文を巧にし、辭を麗くするは、これ辭章の學、これを工夫として、唯その詞のみを榮華にす、榮華とは、はなやかに加ざる義なり、これ皆その得る所を、身の外に求るの學なるによりて、道を得るに至る者すくなし、

○横渠先生問於明道先生曰、定性未能不動猶累於外物何

如、

此章は、明道の定性書なり、先生二十三歳の時、張子

顔子則必思而後得必勉而後中其與聖人相去一息所未至者守之也非化之也

一息は、ひといきの間なり、化すとは、その工夫の迹みえず變化することを云、化する時は則聖人と成る、

以其好學之心假之以年則不日而化矣、

その學好む心を以ての上に、今少し年をかして、命をのべたらば、時日をついやさずして、化すべしと、

後人不達以謂聖本生知非學可至而爲學之道遂失、

此より下は、後世の學、顔子の好む所に異なることを云、蓋し後人は學んで聖に至るべき道理に達せず、心に思へる所かくの如くなるによりて、學をするの道遂に失へるなり、

の問ひに對へて作れり、これまで問ひの詞なり、定性とは、心をしづむることを云、常に心をしづめんとなれども、なを外物のひくにかゝづらひて、動かざることあたはず、いかゞはせんとなり、

明道先生曰、所謂定者、動亦定、靜亦定、無將迎、無内外、

これ心の定ると云本義をとく、將は、をくる、迎は、むかふるなり、それ心動く時にも亦定りて、妄にうごかず、靜なる時にも亦定りて、其内くらからず、物すでに去るを送る意なく、物いまだ來らざるを迎る意なく、心を内とし、物を外とするのへだてなし、よくかくの如くなる時は、常に定りて内に在るなり、

苟以外物爲外、牽己而從之、是以己性爲有内外也、

天地萬物、もと一つの太極を共にして、萬理みなわが性にそなはる、然れば人心常に天下の事物に應接して、其理に通關せざることを得ず、もし外物を以て己

が外なる物として、己が心をひき出して、これに就かば、これ己が心性を以て、内外ある物とするなり、且以性爲隨物於外、則當其在、

外時何者爲在內、又心を物に外にしたがふとせば、その出て外に在る時、内にありて主宰たる者は何ぞと、

是有意於絶外誘、而不知性之無内外也、

蓋 張子其心外物に誘き去らるゝことを惡みて、これをふせぎたちて内心を定めんとす、よりにこれに對ることかくの如し、

既以内外爲二本、則又烏可遽語定哉、

内心外物の理、もと一貫なるを、今すでに其本二つにして、われくに出る者とせば、則又なんぞにはかに性を定むるの沙汰せられんやと、

夫天地之常、以其心普萬物、而無心、聖人之常、以其情順萬事、而無情、

天地の道の常にして易はらざるること、其心あまねく萬物を生成するのみにして、別に心を用ることなきを以てなり、聖人の道の常にして易はらざることも、亦其情あまねく萬事の理に順ふのみにして、別に情を用ることなきを以てなり、

故君子之學、莫若廓然而大公、物來而順應、

廓然とは、うちひらきて、はがらかなる義なり、君子の其心をまうくすること、廓然と大いに公にして、物我のへだてなく、事物の來り接する時は、各其理のまゝに順ひて、これに應ずるばかりなり、廓然として大公なる時は、内外一貫す、何ぞ外物をにくみたつことをせん、物來て順應する時は、ゆくとして其内定まらずと云ことなし、此二句は、これ一章の綱領なり、

易曰、貞吉悔亡、憧憧往來、朋從爾思、

これ咸卦の爻辭なり、これを引て、上段の意を明す、咸は感の義にとる、貞は、正しく固き義なり、憧憧は、往來の絶ざる貌、朋は、類と云義なり、それ人心正固にして、私意の感應なき時は、其内常にほがらかにして、外物の累ひなし、これ吉なり、よりに凡そ悔ひうらむべきこと、みな亡びてなし、もし私意の感應憧々として、ゆきつ、もどりつ、たえざる時は、唯その類の事のみ、爾の思ふ所に從ひて相通じ、あまねく萬事に及ことあたはず、廓然として大公なる時は、即これ貞にして、憧々たる往來なし、物來て順應するは、即これ朋のみ爾の思ふに從ふにあらず、

苟規規於外誘、之除、將見滅於東而生於西也、非惟日之不足、顧其端無窮、不可得而除也、

はらはんとのみはからば、こゝにきえても、かしこに又生じ、唯これをはらふに、日数の足らざるのみならず、反て其端きはまりなくなりて、ついに除ひ得らるまじきぞ、

人之情各有所蔽故不能適道

凡そ人情の行はるること、各その氣稟によりて、をほひかくさるゝ所あり、この故に、發してみな當然の理にかなふことあたはず、

大率患在於自私而用智

大率は、をほむねと云義なり、氣稟の蔽ふ所、患をなすこと、品多きが如くなれども、をほむね内に心を自私にたて、外に智術を用ひて、其私を濟す、これ兩様なりといへども、二つのこと必相依てある者なり、

自私則不能以有爲爲應迹

有爲とは、すべて人事を云、應迹とは、事に應ずるの行迹なり、自私する者は、たとへば釋氏の清静無爲をむさぼりて、外物の縁を絶ちすつるが如し、これ即人事の當然を以て、應用の迹とすることあたはざるな

り、蓋し張子の性を定めんとする意、これに近し、用智則不能以明覺爲自然

明覺とは、本心の知識、是非邪正を明に覺る者を云、智を用る者は、作爲安排を巧にして、自便自利を求む、これ即知識の本明を以て、自然の宰制とすることあたはざるなり、蓋し自私する時は、則廓然として大公ならず、よりて有爲を以て應迹とすることあたはずして、内外をへだて、外物の誘ことをにくむ、智を用る時は、則物來て順應することあたはず、よりて明覺を以て自然とせずして、反て外誘をふせぎたゝんとす、蓋し此二段、張子その内を定めんために、外誘をはらはんとするを以て、かくの如くいへり、下の段も亦これをうけてとく、

今以惡外物之心而求照無物之地是反鑑而索照也

それ人の一心は、兩用したがし、今自私し智を用ひ、内に向ひて自定めんとして、外物を惡むの心を以て、又外に向ひて物累をふせぎ、無物の境界を照て、こ

孟氏亦曰所惡於智者爲其鑿也

智は心の神明にして、萬事を宰判する所以の者なれども、これに惡む所あるは、その自然に順かはらずして、うがちて用ることあるがためなり、鑿とは、木の目にしたがはずして、鑿にてほりうががつがごとし、これその智を用ひ、物來て順應せざることをいへり、

與其非外而是内不若内外之

兩忘也

此より下二段は、上文無内外の意を明す、云意は、外誘を非としてこれをはらひ、内心を是としてこれを定めんとせんよりは、内外の是非を二つながら忘れ、廓然大公にして、へだてなからんにはしかずとぞ、
兩忘則澄然無事矣無事則定
定則明明則尙何應物之爲累哉

れに居らまく欲するは、これ鑑を反して、うらを以て物を明さんと求るが如し、必得らるまじき道理なりと、蓋し物の累ひを絶たんとして、反て物に累ふは、これ必然のいきほひなり、

易曰艮其背不獲其身行其庭不見其人

此より下二段、易と孟子を引て、上文の意を結ぶ、これ艮の卦辭なり、それ人の身は動物にして、耳目より手足まで、わざをなさざる所なし、唯背中のみ、止りてわざなし、艮其背とは、その止るべき所に止るぞ、事みな理におちて、心みだりに動くことなきを云なり、なを背は身に隨ひて動かざる故に、其身とするこ

内外兩ながら忘るゝ時は、物我のあらそひ、澄然とす
みしづまりて事なし、事なき時は、心をのづから定
る、定る時は、智すなはち明なり、止水のよく物を照
すが如し、明なる時は、理にまどはずして、物來て則
順應す、なを何ぞ物に應ずることを累ひとせんや、内
外兩ながら忘るゝは、自私するにあらざる、よく定り
て、明なるは、智を用るにあらざるなり、

聖人之喜、以物之當喜、聖人之
怒、以物之當怒、是聖人之喜怒、
不繫於心、而繫於物也、是則聖
人豈不應於物哉、烏得以從外
者爲非、而更求在內者爲是也、
今以自私自用、智之喜怒、而視聖
人喜怒之正、爲如何哉、

これ聖人の喜怒を以て、大公順應の意を明す、聖人の
心大公なる故に、喜怒ありといへども、これがために

之言不得已也、

これ程子の友朱長文が、文章を好みて、其事を問ひ
けるに、答へられし書なり、古の聖賢、そのいひをけ
ること、みないはずしてやまれざることなればなり、
いはずともなることをば、著述をせんために、これを
云にあらざると、

蓋有是言、則是理明、無是言、則
天下之理有闕焉、如彼耒耜、陶
冶之器、一不制、則生人之道、有
不足矣、聖賢之言、雖欲已得乎、
此段やむことを得ざるの故をとく、耒耜とは、古の耕
す器、すきの類なり、其柄を耒と云、其さきを耜と云、
陶は、すえものつくる竈、冶は、金を鑄る具、此の類一
つも是なき時は、生民の用をなす道たらず、よりに聖
賢これを制作す、その言辭も亦なをかくの如くなれ
ば、それやんまなく欲すとも、これを得んや、
然其包涵盡天下之理、亦甚約

動かすして廓然たり、唯喜怒すべき物前に來れば、其
理に順應するばかりなり、これその喜怒心にかゝら
ずして、物にかゝれり、爲如何哉とは、その大いに相
違せることをいへり、
夫人之情、易發而難制者、惟怒
爲甚、第能於怒時、遽忘其怒、而
觀理之是非、亦可見外誘之不
足惡、而於道亦思過半矣、

此より下は、上文喜怒の内より怒を忘れ理を觀るの
論を發して、大公順應の工夫に、手を下す方を示す、
怒を急に制して、これを忘るゝは、大公なり、理の是
非を觀て、これを處するは、順應なり、それ發し易く
して、制し難き怒にをけるだもなをかくの如くなれ
ば、すべて外誘の惡むに足らざることを見るべし、而
して聖賢の道にをいても、亦すでに思ひ得ること過
半なるべしとなり、

○伊川先生答朱長文曰、聖賢

也、

聖賢やむことを得ずして云といへども、其言天下の
理を包み涵し盡くして、亦甚簡約なり、
後之人始執卷、則以文章爲先、
執卷とは、書をよむことを云、

平生所爲、動多於聖人、
平生の作る所、やゝともすれば、聖人の言よりも多く
して、彼約なるが如くならず、
然有之無所補、無之靡所闕、乃
無用之贅言也、
贅とは、ありても用をなさざる者を云、天下の理にを
いて、此言あれども、補ふ所なく、なければども、亦闕る
ことなきは、これ無用の贅言なり、

不止贅而已、既不得其要、則離
眞失正、反害於道、必矣、
其言もし簡要を得ざれば、則道理の正眞にあらざし

て反て道理に害をなすこと必然なり、
來書所謂欲使後人見其不忘
乎善此乃世人之私心也

朱長文より來れる書の中に、人の文作ることとは、後人をして、その常に善道を忘れざりつることを、知らせまく欲してぞといへるは、これ亦世俗の名を好む私心なり、

夫子疾没世而名不稱焉者
疾没身無善可稱云爾非謂疾無名也

夫子の言論語に出たり、云爾とは、かういひたることと云詞なり、夫子の言は、君子その身を終るまでに、名とすべき善の實なきを惡むと云ことなり、名なきを惡むといひて、名を求めしむるにあらずとぞ、

名者可以厲中人君子所存非所汲汲

謂始條理者智之事也

上文進德居業は工夫の條目を、内外にわけて云、此より下二段、知至と終之とは、其工夫に手を下す、致知力行の次第なり、知至とは、至善の在る所を、その至りどころと知るぞ、これ致知の工夫なり、知之在先とは、その重きこと、知至の上にあることを示す、幾は、事の端わづかにきざす處を云、その理をさとすることはやきを以て、此人と共に、幾微を察せらるべきぞ、條理とは、樂の八音をのくすぢみちありて、みだれざることを云、これを始むとは、鐘をうちて、ならしはじむるぞ、智とは、知の至れるを云、これ孟子に音樂の始終を以て、孔子の徳の具はれることをたとへたるを、引あはせて、易の文義を明せり、下段亦同じ、

知終終之力行也既知所終則力進而終之守之在後故可與存義所謂終條理者聖之事也終りとは、至善の盡る處なり、終之とは、をしきはめ

汲々とは、つとめて求める義なり、名を人に稱せらる、ことは、中品の人の善をすることを勵すべし、君子の善をするは、唯當然の理に従ふばかりにして、心に存念すること、名はその汲々たる所に非ずと、然れば其汲々たる所は、善をするの實これなり、

内積忠信所以進德也擇言篤志所以居業也

此章は、易乾の文言に、君子進德修業、忠信所以進德也、修辭立其誠所以居業也、知至至之、可與幾也、知終終之、可以存義也と云を釋す、内に忠信の實を積みたくはふるは、其徳を進めて、たかくする所以なり、外に辭を擇びて、妄にいはず、志を篤うして、善をつとむるは、事業に居すはりて、退轉せざる以所なり、忠信は、實心なり、擇言篤志するは、實事なり、事は即其徳の外にあらはるる者なり、

知至至之致知也求知所至而後至之知之在先故可與幾所

て、必これを盡すぞ、これ力行の工夫なり、守之在後とは、その重きこと、終之の上にあることを示す、守るとは、守り終ふることを云、こゝに至れば、天下の義にをいて、一つもとり失ふことなき故に、此人と共にいつまでも義を存主せらるゝぞ、條理を終ふとは、玉磬をうちて、衆音をしめ收ることを云、聖とは、行の盡せるを云なり、
此學之始終也、
上二段の意を結ぶ、

君子主敬以直其内守義以方其外敬立而内直義形而外方

此章は、坤の文言に、直其正也、方其義也、君子敬以直内、義以方外、敬義立而徳不孤、直方大、不習无不利と云を釋す、主敬とは、つゝしみて心を專一にする義なり、動静の間、心に戒慎恐懼の敬畏を忘れざる時は、其内直上直下にして、邪念のかゝづらないな

し、よりにて敬立ち定まる時は、内をのづから直し、事大小となく、必當然の義を守りて、これを失はざる時は、外に行はるゝ所、みな方正にきりたてたるが如くにして、まがりたはむ私曲なし、よりにて義事にあらはるゝ時は、外をのづから方なり、

義形於外、非在外也、

義は心の裁制する所、事にあらはれて、その宜きにあたる者なり、外にあるにあらず、これ上文をうけて、義外の説を正せり、

敬義既立、其德盛矣、不期大而大矣、德不孤也、

内の敬、外の義、すでに立ち定まる時は、其徳つもりて盛なり、盛なる時は、其大いなることを期せずして、をのづから大いなり、これ徳の孤ならざるなり、不孤は、唯一つにならざることを云、

無所用而不周、無所施而不利、孰爲疑乎、

もしいまだ正理にあはざれば、之も亦妄なり、乃亦邪心なり、よりにてなを正しからざるのあやまちあり、既已无妄、不宜有往、往則妄也、

それすでに无妄なる時は、これ至善に止ることを得るによりて、更にたじろくべからず、もし又前後左右にゆくことあれば、則亦邪妄なり、

故无妄之象曰、其匪正有眚、不利有攸往、

○人之蘊蓄、由學而大、在多聞、前古聖賢之言、與行、考跡以觀其用、察言以求其心、識而得之、以蓄成其德、

これ易大畜の象辭に、天在山中大畜、君子以多識前言往行、以畜其徳と云を釋す、凡そ人その徳を蘊蓄する所、みな學によりて大いなり、而して其學は、多く前世往古の聖賢の言と行とを聞きしるにあり、蓋

徳不孤に至る時は、これを用ひて、あまなくゆきわたらずと云所なく、これを施すに、順利にして遂げずと云所なし、かくの如くなる時は、たとひいまだしならはざることをするにも、孰か心に疑をなす所あらんや、自由に行ひて、あやまちなかるべきなり、

○動以天爲无妄、動以人欲則妄矣、

これ易无妄の卦辭を釋す、此卦は下を震にし、上を乾にす、震は動く、乾は天なり、よりにて動くに、天を以てすと云なり、妄は、みだりなり、凡そ人の動くこと、純ら天理を以てするは、これ邪妄无きなり、もし人欲を以てするは、これ妄なり、

无妄之義大矣哉、

其道の至れることを嘆美す、

雖無邪心、苟不合正理、則妄也、乃邪心也、

その事に應ずる心、邪妄によりていはずといへども、

しその行跡を考へては、以てその用をなす所を觀、その言論を察しては、以てその由りて出る所の心を求め、これをきき、識り、其理を心に得て、以て其徳を蓄へ成すことを云なり、

○咸之象曰、君子以虚受人、

これ易咸卦の象辭を釋す、咸は、感の義にとる、君子は其心を虚くして、人より來感する所をうけて、これに應ず、

傳曰、

伊川の易傳なり、下これに倣へ、中無私主、則無感不通、

中心私に主とする所なき時は、則虚し、虚き時は、則感する所として、通せずと云ことなし、

以量而容之、擇合而受之、非聖人有感、必通之道也、

も一唯徳量のひろきを以て、これをいる、は、量には限ある故に、みつる時はうけず、又その志の合ふ所を

擇びてこれを受るは、そのあはざる者をうけず、これみな聖人の内虚うして、感あれば必通するの道にあらざるなり、

其九四曰、貞吉悔亡、憧憧往來、朋從爾思、

說前章に見えたり、

傳曰、感者、人之動也、

感とは、心を以て物を感ずることを云、これ人の動作なり、

故咸皆就人身取象、

初六には、咸其拇と云、六二は腓、九三は股、九五は脛、上六は輔頰、みなかくの如し、

四當心位、而不言咸其心、感乃心也、

九四は心の位にあたるをば、咸其心といはざること、心はこれ感の主にして、感ずる所の者即心なれば

なり、

感之道無所不通、有所私係、則害於感通、所謂悔也、

感應の道、もと感じて通せずと云ことなし、されども其心もし私に係る所あれば、則感通の道に害あり、よりに悔ふべきことあるなり、

聖人感天下之心、如寒暑雨暘、無不通、無不應者、亦貞而已矣、

暘は、日の氣なり、聖人の天下の人心を感ずること、寒暑雨暘の氣の、あまねく及ぶが如くにして、これに通じて應せずと云ことなし、これ其心真正なるが故なるのみ、かくの如くなれば、則吉にして、悔べきこと亡びてなし、

貞者、虛中無我之謂也、

此貞と云は、乃他なし、その中心虚うして、物我の私係、すこしも隔ることなきを云なり、

若往來憧憧然、用其私心、以感物、則思之所及者、有能感而動、所不及者、不能感也、

此より下、申て私係私主の害をとく、此段句義、すでに前章に見えたり、

以有係之私心、既主於一隅、一事、豈能廓然無所不通乎、

一隅とは、物の片隅なり、廓然は、ほがらかなり、

○君子之遇艱阻、必自省於身、有失而致之乎、

此章は、易蹇卦の象に、山上有水蹇、君子以反身脩德と云を釋す、蹇は、なやみなり、艱阻は、即蹇の義なり、致すとは、まねきとする義なり、君子艱難險阻にあふ時は、これわが過失によりて、これを致せりや否やと、自其身を省るなり、

有所未善、則改之、無歉於心、則加勉、乃自脩其德也、

自省て、もし己にまだ善ならざる所あれば、則すみやかにこれを改む、もし心に不足なき時は、ますます其善を勉む、これ自其徳を脩ることなり、

○非明則動無所之、非動則明無所用、

これ易豐卦の傳なり、此卦下を離にし、上を震にす、離は明、震は動なり、それ明ならざれば、動けども、ゆく所を知らず、動かざれば、亦その明を用る所なし、此二つの者、必相まちて、其用をなすべしとすなり、

○習重習也、時復思、澁洽於中、則說也、

此章は、論語學而の首章の義を釋す、習の字を、かさぬる義にとれり、澁洽とは水にひたりとをる義なり、すでに學べることを、よりく又かさねて、思ひ釋

ね、中心にひたりとをる時は、則滋味をおぼえて悦なり、
以善及人、而信從者衆、故可樂也。

すでにわが學び得る所の善を以て、人に教へ及ぼして、同朋遠方よりも來りて、信じ從ふ者多き時は、その悦びふかくして、樂むべしとなり、

雖樂於及人、不見是而無悶、乃所謂君子、

其善人に及ぶを以て、樂とすといへども、或は人しらずして、これを是とせざる時に、心にふづくみいきどをることなきは、則君子と云者なり、これ易乾文言を引て釋す、君子とは、成徳の人なり、蓋し人に及んで樂むことは、順にして易く、人知らずして慍らざることは、逆にして難し、逆境に居て、其樂を失はざるにあらざれば、いまだ君子と云に足らざるなり、

○古之學者爲己、欲得之於己

也、今之學者爲人、欲見知於人也、

これも論語の文を釋す、爲己にする者は、道を己に得んがために、爲人にする者は、人のわが名を知りて、これをほめんがために、

◎伊川先生謂方道輔曰、

道輔名は元案、伊川の友、これ其問ひに答へられし書なり、

聖人道坦如大路、學者病不得其門耳、得其門、無遠之不可到也、

聖人の道は、平坦明白にして、大路の如く、知りやすく、行きやすし、只學者のうれへ、その由りて入る所の門を得ざるにあり、其門をだに得る時は、遠き處にも、到られすと云ことなし、

求入其門、不由於經乎、

若し學者道に入るの門を求めんとらば、經書に由らずして得られんや、

今之治經者亦衆矣、然而買櫝還珠之蔽、人人皆是、

治經とは、其義をとき明すことなり、今の世、經を治る者多けれども、櫝に入れたる珠を買ふ者、櫝のうつくしきをとりて、珠をかへすが如くなる蔽はれのあること、人々皆然りと、これ古語をひきて云、

經所以載道也、誦其言、辭解其訓、詰而不及道、乃無用糟粕耳、

訓詁とは、字義なり、糟粕は、さけのかすなり、それ經は道を載するの器なり、珠を入たる櫝の如し、もし唯その言辭を誦みおぼえ、その字義を解くばかりにて、道を明にするに及ばざれば、なほ櫝をとりて、珠をかへすが如し、經書は無用の糟粕なるのみ、

覲足下、由經以求道、勉之又勉、異日見卓爾、有立於前、

足下とは、人をうやまひて、よびかゝる詞なり、異日は、他日に同じ、今より後の日を云、卓爾とは、立てる貌なり、これ顏淵夫子の道を學び得て、常に現前たることをいへり、本文論語に出たり、

然後不知手之舞、足之蹈、不加勉而不能自止矣、

手舞ひ足蹈の説前に見えたり、此段亦顏淵夫子の教に從ひて、罷んなまく欲すれども、あたはざるの意なり、

○明道先生曰、脩辭立其誠、不可不子細理會、

これ亦易乾文言の語意を發明す、子細とは、詳なる義なり、理會とは、合點と云が如し、

言能脩省言辭、便是要立誠、外に言辭を修め省みて、かりにも妄にはざることを、即これ内に誠意を推したてて、ゆるがせざらしむる工夫なり、

若只是脩飾言辭爲心只是爲
偽也、

もし脩辭と云を、唯その詞を修め飾へて、うつしくし
く云ことのみとして、これを以て心とせば、言行表
裏、一致ならず、誠を立るにあらずして、反て唯これ
偽をするなり、

若脩其言辭正爲立己之誠意
乃是體當自家敬以直内義以
方外之實事、

體當とは、身を以て、親しく檢へ驗る義、自家は、た
いと云ことなり、もしその言辭を修ることを、正に己
が誠意を立んがためにすれば、即これみづから敬直
義方の内外の工夫を、體驗勘當するの實事にして、外
をつくるふばかりの、浮華なることにあらずとなり、

道之浩浩何處下手惟立誠纔
有可居之處有可居之處則可

意なり、忠信を主とするは、これ内に本づきて、以て
其外に達す、辭を脩るは、これ外に正うして、以て其
内を立つ、内外交養ふの道なり、

○伊川先生曰志道懇切固是
誠意若迫切不中理則反爲不
誠、

懇切とは、懇に、たしかなるなり、迫切とは、急にせま
れる義なり、道に志すことの懇切なるは、もとより誠
の意なり、されどもその効をいそがんだめに迫切に
して、苗を抜て長せんことを助くるが如くすれば、道
理の自然に中らずして、誣ひ曲ぐることもある故に、反
て誠ならざるなり、

蓋實理中自有緩急不容如是
之迫、

實理とは、即自然のまゝに、眞實なる道理を云、その
中には、宜く緩かるべきことあり、宜く急かなるべき
ことあり、道を求めるには、ひたすらかくの如くに急迫

以修業也、

浩々とは、盛大流行の貌なり、此道の浩々たる、いづ
れの處より手を下して、工夫を用ふべきと、わきま
がたし、唯わが心の誠を立るのみ、わづかに身を居
へる、實地あり、これその手を下す處なり、すでに
身のをきどころある時は、則學業を修爲して、道にす
み入らるべきなり、

終日乾乾大小大事却只是忠
信所以進德爲實下手處脩辭
立其誠爲實修業處、

これ易本文を引あはせて、上文の意を結ぶ、乾の九三
に、君子終日乾々すと云は、天の行くこと健なるに體
するの工夫にして、大小の大事なり、然るに文言に、
夫子徳に進み業を修るを以て、終日乾々するの事實
として、則忠信を、徳に進む所以の者とすは、これ
その手を下す處を示せり、而して辭を脩めて、其誠を
立るを以て、業を修る所以の事とす、蓋し忠信は即誠

なるべからずと、蓋し此語學者の迫切に求るを、正せ
るがために發すらし、

觀天地之化乃可知、

天地の化、春生じ夏長じ、秋成り冬堅まる、一息のた
えまなけれども、亦一日に遽に成ることなし、これを
見て實理の緩急を知るべしと、然れば道を求る志は、
宜く懇切にして、あからさまなるべからず、されども
その効は、唯功つもれる上に、をのづから得ることを
待つべきなり、

○孟子才高學之無可依據、

孟子は天才高邁にして、これを學ばんとすれども、依
り據りて、手を下すべき處なし、

學者當學顏子入聖人爲近有
用力處、

顏子を學ぶ時は、其道平易なる故に、聖域に入ること
近し、蓋し顏子の學、工夫微細にして、徳に進むこと
次第あり、よりにこれを學ぶ者、力を用ひて、手を下

す處あり、
又曰、學者要學得不錯、須是學顏子、

學者の學ぶ所、その道をふみあやまらざらんことを要せば、唯顏子を學べし、

有準的、

準的とは、手本目當と云義なり、顏子の博文約禮、克己復禮の類、みな學をするにまさ準的なり、

○明道先生曰、且省外事、但明乎善、惟進誠心、其文章、雖不中不遠矣、所守不約、泛濫無功、

これ呂與叔はじめ横渠の門下にて、威儀制度の事にならひ、内に向ふの工夫、をろそかなりしより來りて、はじめ程子にあへる時に、示めされし語、見えたり、外事も、文章も、みな威儀制度の類をさす、泛濫は、水のうきながるゝを云なり、云意は、しばらく外

にをさむることを省きて、唯善を明にして、誠の心をすゝめよ、然らばその文章は、正く理にあたらすと云とも、遠くはづれじ、もし自守る所約ならずして、外事にくたくしくば、水の泛濫するが如くにして、徳にすゝむの功なかるべしとなり、

○學者識得仁體、實有諸己、

云意は、學者仁の全體かくの如くなる者と知り得て、又これを求めて、實に己が有る所の者とせよと、これ學をするの大本なり、

只要義理栽培、

栽は、木をうるふなり、培は、つちかふなり、樹木をうへやしなふことを借りて云、すでに大本を立る上には、博く義理を學び得て、此仁心をやしなひうるほざんことを要せよと、蓋し仁心培養を得る時は、生意日々に充ち長りて、慈愛の施す所、きはまりなかるべきなり、

如求經義、皆栽培之意、

經を治めて、其義を求るやうのことも、亦みな栽培の

意なり、

○昔受學於周茂叔、每令尋顏子仲尼樂處、所樂何事、

顏子の樂む所は、一簞の食一瓢の飲、陋巷に居て、其樂を改めず、夫子の樂む所は、疏食水飲、脰を曲てこれに枕す、樂其中にあり、常人其樂を何事ぞと尋ぬとも、學力いまだ至らずば、いかにこれを察すべき、唯聖人の教る所によりて、顏子の學ぶ所を學び、博文約禮を事として、罷んなまく欲すれども罷す、すでに其才を竭すに至れる時に、はじめて庶幾すべきなり、

○所見所期、不可不遠且大、然行之亦須量力有漸、

學者の見る所、志す所は、遠く又大いにして、天地萬物の理に通じ、聖人の域に至り、天下の事を任ずるを以て、自期すべし、然れどもこれを知上にあり、その力を用ひてこれを行ふことは、只今己が居る所の地位才力を量りて、その脚もとより、着實に歩をすゝ

め、漸々以て向上の地に升るべし、

志大心勞、力小任重、恐終敗事、

もし只遠大に志すまゝに、近切なることを略せば、はるかに想ひ、企て望む、勞にたへず、力の小きなるをはからずして、妄に重きことを任せば、半途にしてすつべし、かくの如くなる時は、その事とする所をしそこなひて、ついに成すことを得まじきなり、

○朋友講習、更莫如相觀而善工夫多、

相觀而善くすと云は、學記の文なり、凡そ朋友と學を講じ習はすこと、只辯論の發明のみならず、更に進み益す工夫を用ることの多き所は、互にその善き所を相見て、心まことに感服し、これを己に取りたもつにはしくことなし、

○須是大其心、使開闊、

學者其心を設ること、推し開きて、濶からしむべきなり、

譬如爲九層之臺須大做脚方得

層は、かさぬるなり、脚とは、基をさす、俗に云地形なり、九重の臺をつくるには、其基を大いにとりて後に、高くてのぼすことを得るなり、

○明道先生曰、自舜發於畎畝之中、至孫叔敖舉於海、若要熟也、須從這裏過、

本文孟子に見えたり、畎畝とは、農家を云、孫叔敖は楚の賢人なり、海とは、海邊の困窮なる處を云、凡そ古の聖賢、多くは患難困窮の中よりおこり出づ、蓋し人難をふみ、困に居る時は、事變を歷ること多くして、患を慮ること深く、理を察すること密にして、事を制すること審なり、この故に、人もし其徳の磨練して、熟せんことを要せば、這の艱苦の裏より、こえさぐべしとなり、

○參也竟以魯得之、

これ論語に子の曰く、參也魯なりと云につきていへり、參は、曾子の名、魯は、魯鈍にして、にぶき義なり、得之とは、夫子の道を傳へ得ることを云、程子又云く、曾子の學は、誠篤のみ、聖門の學者、聰明才辯多からずとせず、而して卒に其道を傳はるは、乃實魯の人のみ、この故に學は誠實を以て貴しとす、尹氏の云く、曾子の才魯なり、この故に、其學確し、よく深く道に造る所以なり、

○明道先生以記誦博識爲玩物喪志、

記誦とは、書の文をおぼえて、そらによむことなり、博識とは、博く事を識すぞ、識すも、おぼゆる義なり、玩物喪志とは、周書旅獒の篇の文なり、物を好みて玩ぶ時は、心これに流れて、その本とする志を失ふとなり、記誦博識は、よきことなりといへども、ひたすらこれに心をとらむれば、亦道の志をわするることあり、この故にこれを引て、戒めとするなり、

時以經語錄作一冊、

按するに程子の語、蓋し其門人上蔡謝氏きく所の戒をしるして、これは自その事實をいへる歟、時に謝氏經書の要語をぬきとり、一冊の書こなして、常にこれを玩びけるによりてのこととぞ、

鄭穀云、嘗見顯道先生云、某從

洛中學時、錄古人善行、別作一

冊、明道先生見之曰、是玩物喪

志、蓋言心中不宜容絲髮事、

此より下二段は、又後の人其事の一説をつけしるせり、顯道は、謝氏の字なり、蓋言と云よりは、鄭穀が説歟、凡そ心中に、絲髮ばかりの事をいれをくも、亦その志に害ありとぞ、

胡安國云、謝先生初以記問爲學、自負該博、對明道舉史書成篇、不遺一字、明道曰、賢却記得

許多、可謂玩物喪志、謝聞此語、汗流浹背、面發赤、及看明道讀史、又却逐行看過、不蹉一字、謝甚不服、後來省悟、却將此事做話頭、接引博學之士、

記問とは、物をよくをぼえて、人の問を待ことなり、自負とは、わが長じたる所を自負むなり、該博は、學識の該りて博きなり、史書とは、歴代の記録なり、成篇とは、すでに成りたる一篇を云、これを擧ぐとは、よむことなり、賢とは、人をうやまふ詞なり、蓋し謝氏みづから記誦を好み玩んで、人に矜る意出來り、内に向ふ志を忘れたるによりて、程子これを戒む、賢よく許多の文字をおぼえ得たり、されども物を玩んで志を喪ふの弊ありと、謝氏これをききて、大いにはちて感服す、後に又明道の史を讀に、次第を逐て行々に看過して、一字をもつまづかず、謝氏これを見て、甚さきの戒に服せず、後來又その非を省み悟る、程子は

唯其學の精熟によりて、をのづからおぼえたり、わが
玩ひおぼえて、人に矜るとは、各別の意思なりと、よ
りて常に此事を話の頭として、博學を好む士を、受け
みち引て戒む、

○禮樂只在進反之間、便得性情之正、
これ樂記に禮主其減、樂主其盈、禮減而進、以進
爲文、樂盈而反、以反爲文、禮減而不進、則銷、樂盈而
不反、則放、と云につきていへり、それ禮は、辭讓謙退
して、收斂する意を以て體とす、これもと人の樂まざる
所なる故に、力を着け進みゆきて行ふべし、樂は、
舒暢發越して、快樂する意を以て體とす、これもと人
の流れ易き所なる故に、心をひき反して、内に向ふべ
しとぞ、此章云意は、それ禮樂は、人の性情を正くす
る所以の者なり、而してこれを行ふこと、唯進むと反
るとの間にあり、よく其道に従ふ時は、即性情正きこ
とを得るとなり、

○父子君臣、天下之定理、無所
逃於天地之間、

父子君臣の分際は、人の大倫、天下一定の道理にして
萬古不易のことなれば、天地の間、いづくにも皆ある
所にして、人の逃るゝ所なき者なり、此句莊子に出た
り、

安得天分不有私心、則行一不義、殺一不辜、有所不爲、
天分とは、父子君臣は、みな天のついでたる職分なる
とを云、人よく其分に安んじ得て、少も私心なき時
は、一つの不義を行ひ、一人の罪なきを殺して、天下
を得るの利ありといへども、爲ざる所の守りあり、

有分毫私、便不是王者之事、
もし天分の間に、分毫ほどの私あれば、即王者大公無
我の道にあらざるなり、かの堯舜の帝位を讓れるも、
父子の恩に虧ることなく、湯武の大權を行へるも、君
臣の義に愧ることなきは、これ亦その私心なきが故
なり、

○論性不論氣、不備論氣不論性、不明、二之則不是、
これ古今人性を論ずるの定説なり、蓋し唯性の同く
善なることを論じて、氣質の異なることをいはずは
ば、上智と下愚の移らざる者ある故に、いまだ備はら
ず、孟子の性善これなり、もし唯氣質を以て性とし
て、その本同く善なることをいはずはば、固より性の
性たる本體明ならず、荀子が性惡、楊子が善惡混する
の類これなり、然れども孟子の言は、なを性の本然を
失はず、荀楊が如きは、則全く性を知らざるなり、而
して畢竟性は氣の理、氣は性の質なれば、もと相はな
れざる者なるによりて、本然の性、氣質の性を、二つ
にして説も、則亦非なり、

○論學便要明理、
凡そ學業を講論せば、即必道理を明にせんことを要
すべし、然らざれば、唯これ詞章記誦の學にして此道
に益なし、

論治便須識體、

體とは、體格なり、朝廷の政は、朝廷の體あり、一國の
政は、一國の體あり、州縣の治も、亦州縣の體あり、各
さしあたりて、切要なるつとめあることを云、もし政
治を論じて、その體格を講じ識らざれば、唯泛く制度
文爲の末を事とするのみにして、實用をなさざる
り、

○曾點漆雕開已見大意、故聖人與之、
事みな論語に見えたり、朱子云く、他この大綱の意思
を見得て、細密の處に在いては、いまだ必しも乃理會
せずと、按ずるに、曾點が見る所の大意は、これ道體
の規模なり、この故に、從容自得して、物と共に各其
所に安ずるの意あり、漆雕開が見る所の大意は、これ
道術の梗概なり、この故に、道の小成に安せずして、
必自信することを期するの意あり、

○根本須是先培壅、
これ亦樹をうへやしなふことを借りて云、根本とは、
心の徳をさす、培壅は、土かふなり、涵養の工夫を云、

敬を持ちて以て涵養す、これ培養の功なり、

然後可立趨向也、

これ致知力行の工夫を兼て云、根本を涵養する上に
ついて、知行の功を施し、その趨き向ふ方を、正しく立
つべきなり、

趨向既正、所造淺深、則由勉與
不勉也、

趨向すでに正しきは、道に造るのすぢたがはず、而し
てその造る所の淺きと深きとは、工夫を勉ると、勉め
ざるによれるなり、

敬義夾持直上、達天德自此、

夾持とは、はさみもつなり、達天德とは、中庸の文な
り、聖人天と其徳を合することを云、これ云意は、敬
以て内を直くし、義以て外を方にして、しばらくもた
ゆみなければ、其徳内外にはさみたてられて、私欲の
累ひなき故に、直に向上の地に上るなり、その天徳に
通達すること、唯これよりしてこれを得るとなり、

○懈怠一生、便是自棄自暴、

自棄自暴の義、前篇に見えたり、暴棄は下愚の至りな
りといへども、今學者懈怠の意一たび生ずれば、即時
に下愚の域に入るなり、○此章を上章に合せて見れ
ば、敬義夾持しても、なを速に上達することあたは
ず、懈怠一たび生ずれば、即暴棄の域におつ、これ亦
以て善に従ふは登るが如く、惡に従ふは崩る、如く
なる理を見つべし、

○不學便老而衰、

凡そ人學ある者は、義理主となる故に、老て後に、見
る處ますます、精明なり、學なき者は、血氣主となる故
に、老て後、欲ふかくして得ることを貪るにあらざれ
ば、則亦ばけて諄眊す、此二つを免れざるによりて、
衰ふと云なり、

○人之學不進、只是不勇、

人の學力すすまざること他なし、唯これ志氣のふり
たつ勇なければなり、

○學者爲氣所勝、習所奪、只可

責志、

氣は生るゝ初にうくる所の氣質、習は生れて後にな
れそむ所の習俗を云、學者つねに其志氣に勝たれ、習
に奪はれて、進むことを得ざる者は、唯自其志氣のふ
りたゞざるを責めんより、外なきぞ、○此兩章知仁勇
の三徳も、知仁の工夫、必勇によりて成ることを見る
べし、

○内重則可以勝外之輕、

道義内に重き時は、外物の欲輕くなり、これに勝ての
ぞくこと易し、

得深則可以見誘之小、

内に得ること深き時は、外より誘く所小きになりて、
惡むにたらざることを見べし、

○董仲舒謂、正其義、不謀其利、
明其道、不計其功、

董仲舒は、西漢の時の人、程子其語をひけり、義とは、
一事につきて云、道とは、大綱を以て云、義は本をの

づから正し、これを正うすとは、おさめと、のへて、
邪曲ならしめざることを云、それ義は當然の理にし
て、利は即義の安んずる處なり、事義にかなふ時は、
順利ならずと云ふことなし、然れども君子は唯これ
を正くするのみにして、あらかじめ利をはかること
なし、もし利をはかる意あれば、其義爲にする所あり
とする故に、これを正うするにあらず、道は本をのづ
から明なり、これを明にすとは、かゞげあかして、暗
味ならしめざることを云、それ道は自然の路にして、
功は即道を行ふの效なり、然れども君子は唯これを
明にするのみにして、あらかじめ其功をはからず、も
し功をはかる意あれば、私意その間にまじはる故に、
これを明にするにあらず、

孫思邈曰、膽欲大而心欲小、

智欲圓而行欲方、

孫思邈は、隋唐の間の人なり、陰陽醫藥等の術に通じ
たる者なり、膽は、あなり、俗にさもと云、膽大いなる
時は、義をするにいさみ、事にたへて爲ることあり、
心小きなる時は、理を察すること密に、事を慮ること

と深くして、過失すくなし、此二つのこと、必相濟して、然して後に全きことを得るなり、智圓妙なる時は通じてとゞこほらず、行方正なる時は、守りありて流れず、此二つのことも、亦必相濟して、然して後に全きことを得るなり、按ずるに、此語もと淮南子にいで、思邈これをひけり、而して淮南子には、膽を志に作る、其義も長せるに似たり、然るに程子かれをとらずして、これをとること不審なり、

可以爲法矣、

これ程子上二段の結語なり、みな學をする法たるべしとなり、

○大抵學不言而自得者、乃自得也、

大抵學者功積りて後に、自然に得る所の效は、暗き處忽に明くなり、疑しきこと忽にとけ、欣然として、ひとり心に契ふ所ありて、言語を以て形容することあたはず、これ言はずして自得す、乃眞の自得なり、有安排布置者、皆非自得也、

安排は、をきつらぬるなり、布置も、亦しきをくなり、みなかれこれと意を着け、強て作爲することを云、かくの如くにして、其數足り、其間に合ふを以て、これを得たりとするは、皆自得する者にあらず、

○視聽思慮動作皆天也、人但於其中要識得眞與妄爾、

人の視聽思慮言動は、みな天然にして、たれも必あることなり、其事同じきが如くなれども、理に従ひてする者は、これ天然の眞なり、欲に従ひてする者は、みな人の爲の妄なり、人その中に在いて、これを察識して、其眞を守り、其妄を戒むべし、况や人はこれ萬物の靈なる故に、凡そ身の作用理に従ふ者は、みな天命をうけて、天職をつとむることなり、欲に従ふ者は、其する所みな人の道にあらずして、天命にそむき、天職をすつ、其罪はかりがたき者なり、

○明道先生曰、學只要鞭辟近裏着己而已、

鞭辟とは、貴人出行の時、前を驅る者、鞭にて人を逐

ひ辟くことを借りて云、凡そ學をすること、泛然として外に向ひて功を用れば、己に在いて益なし、唯ひきかへし、わが方へかりむけ、裏に近くして、己にひきつけんことを要せよ、かくの如くするばかりぞと、これ己に切に功を用べきことをいへり、

故切問而近思、則仁在其中矣、

此より下、古語を引て、上段の意を明す、これは論語の子夏の語なり、凡そ學びて聞く所、いまだ信せざることをば、必人に問ひて、これを問こと、又己に切にすべし、而して其理を心に思ひみて、これを思ふこと内に近くして、己に着くべし、これ唯致知の工夫にして、いまだ力行して仁をするに及ばずといへども、よくかくの如くなる時は、心外にはせずして、其徳内に存し、理と共に習熟す、よりに仁をのづから其中にあるなり、

言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦、行矣、言不忠、信、行不篤、敬、雖州里、行乎哉、

此より下二段は、又論語に夫子子張行はれんとを問に答へ玉へる語を引て、言行を己に切にすべきことをとく、行はるとは、その行ふことのふさがらずして、行ひ得らるゝことを云、言忠信とは、その云所、心に根ざして出るを忠と云、事の實にたがふことなきを信と云、あはせて見る時は、唯これ誠にして、忠は信の内に入り、行篤敬とは、その行ふ所、薄く軽からざるを篤と云、をこたりあなどらざるを敬と云、あはせて見る時は、唯これ慎みにして、篤は敬の内に入り、よくかくの如くなれば、己にかくることなく、又人を感ずるに足れり、この故に、南蠻北貊のるびすの邦に居るといふとも、よく行はるべし、もしかくの如くならずば、まちかき州里の内といふとも、行はるべからずとなり、

立則見其參於前也、在輿則見其倚於衡也、夫然後行、

忠信篤敬なれば、行はるといへども、亦一旦の功にては、行はれがたし、念々これを心に忘れずして、常にまのあたりに現前し、立つ時は忠信と篤敬と前にあ

りて、我と共に、參つ相むかふを見るが如く、車に乗
りて行く時は、亦忠信篤敬、馬の衡によりかゝれるを
見るが如く、しばらくも相はなるゝことあたはざる
に至り、それかくの如くにして後に行はるべしと
ぞ、

只此是學

程子上文をすべく、りて云く、唯この知行の工夫を
己に切にすること、これ學をする緊要の處ぞとなり、
質美者明得盡、查滓便渾化、却
與天地同體、

查滓とは、物のかすなり、明むとは、知行の功を兼て
云、氣質のよき者は、知行の工夫を明濟になしつくし
て、私欲のいまだ消滅せざるかすまでをも、すなはち
渾て變化して、ついに天地と共に一體となる、
其次惟莊敬持養、及其至則一
也、

其次なる氣質は、唯外を莊に、内に敬み、内外こもこ

も持守涵養して、其功至りて成るに及ぶ時は、則亦美
質の者と一同にしてかはることなきなり、

○忠信所以進德、脩辭立其誠、
所以居業者、乾道也、敬以直内、
義以方外者、坤道也、

これ亦乾坤文言の文義を釋す、乾の道は剛健なり、進
德脩業は、みな進んで息ざるの方なるを以て、乾に
をいてこれを云、敬直義方は、みなおさめをさむるの
方なるを以て、坤にをいてこれを云なり、按ずるに此
二つのこと、教へ學ぶ者、みな其意を得べきなり、氣
質の高下を以て云時は、上品の質は乾道を用ふべし、
氣體壯實なる者の疾を、たゞ攻撃してこれを治する
が如し、顔子四勿の教を受るこれなり、其次なるより
は、坤道を用べし、氣體みたざる者の疾は、補を兼て
治するが如し、仲弓敬恕の教を受る是なり、又氣質剛
強なる者は、亦剛を以て克ち、柔順なる者は、則柔を
以て入り、浮ぶ者をば、柔を以て抑へ、沈む者をば、剛
を以て起す、なを醫方に正治從治の術あるが如し、又

一人の身にても、事に隨ひて其功をわから施すべし、
又平生收斂提醒敬を持するにも、剛柔の義あるなり、
○凡人才學便須知着力處、既
學便須知得力處、

人わづかに學ぶ者、力を着る處を得ざれば、道に入る
の端を知らず、すでに學ぶ者、力を得る處なければ、
道に造るの實を驗る所なし、これみな己が爲にする
の學にあらざるなり、

○有人治園圃、役知力甚勞、

園圃は、そのなり、樹木菜菓をうふる處を云、役とは、
つかふ義なり、其事に智謀精力を用ること、甚つかれ
たるぞ、

先生曰、蠱之象、君子以振民育
德、

民俗を興起して、これを新にし、徳性を涵養して、こ
れを明にす、

君子之事、唯有此二者、餘無他
焉、二者爲己爲人之道也、

育徳は、爲己、振民は、爲人なり、蓋し農圃はこれ小
民の事なり、明德新民はこれ大人の事にして、君子の
事業、豈此の二つの外あらんや、

○博學而篤志、切問而近思、何
以言仁在其中矣、學者要思得
之、了此、便是徹上徹下之道、

これ又子夏の全語を引て、其意を明す、それ學ぶ所博
からざれば、是非善惡をえらぶこと精しからず、道に
志す所篤からざれば、その學ぶ所ついに己が物とな
らず、餘は前に見えたり、了此とは、其理を明して得
るを云、徹は、とをるなり、蓋し學問思辨は、下學の
こと、仁は上達のことなり、下學より即上達の地に通
ずるを以て、上下にとをりぬけて、一すぢなる道とす
るなり、

○弘而不毅則難立、

本文論語に見えたり、弘は、見識徳量の弘く大いなるを云、毅は、志氣踐行のつよくいさめるを云、弘なるのみにて、毅ならざれば、ひとりだちしがたし、

毅而不弘、則無以居之、

毅にして弘ならざれば、守る所せばくして、道理をあらまねくいれをく處なし、

西銘言弘之道、

張子の西銘は理一分殊の發明なれども、その主意理に重きを以て、かくの如くにいへる歟、

○伊川先生曰、古之學者優柔厭飫、有先後次序、

優柔とは、ゆたかにやはらかなるぞ、厭飫とは、食にあくことを借りて云、古の學者は、その功を用ること優柔にして迫らず厭飫にして餘ありて事みな着實なり、この故にその進むこと先後次第ありて、近きより遠く、浅きより深く、卑きより高し、よりてその自得すること深厚なり、

今之學者却只做一場話説、務高而已、

一場とは、場にはなり、一座と云義なり、話説はものがたりなり、今の學者の功を用ること、虚浮にして己に切ならず、その人と共に議論すること、只一座の談話となして、みだりに、高遠なることを、務めていひすつるのみなり、

常愛杜元凱語、若江海之浸膏、澤之潤、渙然冰釋、怡然理順、然後爲得也、

晋の杜預字は元凱、左傳の解つくる、これはその序中の語なり、前の優柔厭飫の字も此序に出たり、渙は、とける義なり、怡は、よろこぶぞ、これみな致知のことといへども、力行の義をも兼て見るべし、江海は水深き故に、浸すこと遠く及ぶなり、膏澤とは、しほしほとふる雨を云、雨多き故に、潤ほす所あまねくわたるなり、學者工夫を用ること、かくの如くなれば、其

功つもりて後に、疑はしきこと、渙然として春の水の如くにとけきえ、怡然として心よろこばしくなりて、義理みな順ひとをり、少しも心にさかふ所なし、然して後にこれを得たりとすと、此語優柔厭飫の意をよくかたどれるを以て、程子つねにこれを愛せられたるなり、

今之學者、往往以游夏爲小、不足學、然游夏一言一事、却摠是實、

往々は、多くはと云詞なり、今の學者、孔門の子游子夏の學、平常なるを視て、これをあなどるといへども、游夏の一言一事すべてこれ致知力行の實ありて、一つも無用のことなきを知らざるなり、

後之學者、好高、如人游心於千里之外、然自身却只在此、

云意は、等をこえ、高きにはせて、己に切ならざれば、ついに得る所なしと、

○修養之所以引年、國祚之所以祈天、永命、常人之至於聖賢、皆工夫到這裏、則有此應、

修養とは、道家に精氣を煉り養ひて、壽をのぶる術なり、國祚とは、天子の在位を云、祈天、永命とは、周書召誥の文なり、天命永くなりて、國祚の久しからんとをねがふとなり、天子功を積み、仁を累ぬるは、即これ天の永命を祈るの道なり、常人道を學んで、眞積り力め久きは、即これ聖賢に至るの方なり、此等の類みな一旦の功を以て、幸にこれを得る者にあらず、只その工夫積りて、這驗を得べき裏に到れる時、はじめこの應ある者なり、蓋し物の始終成敗はみな天命の氣數ありて、自免るゝことを得ず、されども人は萬物の靈なるによりて、よくこれを變じ換ることあり、それ誠はよく天地を動かし、鬼神を感ず、よりて工夫至極し、心專一にして誠なる時は、その應驗あらずと云ことなし、修養の方術なを然り、况や道明に義正くして、其誠至れる者をや、

忠恕所以公平

己が心を盡して、のこす所なきを忠とす、己が心を以て人の心をはかり、これを推して人に及ぼすを恕とす、忠にあらざれば、恕を推すことあたはず、忠恕の二つは、なを首尾本末の如し、人よく忠恕なる時は、私意に累はされずして、人我のへだてなし、心術事爲の公に平かなる所以なり、

造德則自忠恕其致則公平

徳とは蓋し仁をさす、仁に造ること、宜く忠恕よりすべし、その工夫を致し極むる時は、則をのづから仁にして公平なり、この故に孟子の云く、強恕而行、求仁莫近焉と、

○仁之道、要之、只消道一公字、公只是仁之理、不可將公便喚做仁、公而以人體之、故爲仁、

要之とは、すべく、る義なり、仁の道、天地萬物を以て一體とする故に、最も至公なり、この故に、只公の

恕則仁之施、愛則仁之用也

仁は、心にそなはれる體なり、愛は、仁の外に行はるゝ用なり、恕は、この仁愛を人に推し施す所以の者なり、

○今之爲學者、如登山麓、方其迤邐、莫不闊步、及到峻處、便止、須是要剛決果敢以進、

登山麓とは、麓はふもととなり、只山に登ることを云、迤邐とは、路をかなた、こなたへ、つたひゆくことを云、かくの如くなる時は、なを濶く歩みてのぼる、その峻くして、たちきりたる處に到る時は、則は、いかりなやみて止まるが如し、よりて其學ついに成らざるなり、此時に只その志氣をふりたて、剛毅決斷果克勇敢にして、はげみつとめてすゝむべきなり、○朱子をもへらく、學をすること、須く剛毅果決ならんことを要すべし、悠々たれば事をなさず、且つ夫子の聖を以てだも、憤を發して食を忘れ、樂んで以て憂を忘るとの玉ふ、これ何ほどの精神、何ほどの骨肋にかあ

一字を以て仁を論すべし、餘のことにてはこれをかたどりがたし、然れども公は亦只これ仁の理を云のみなり、公を以て即仁とはよびなされず、公理をば、人の身を以て、これと一體になるを、仁と名づくるなり、蓋し仁は人天地生物の理を、物とひとしくうけられたる者なれば、人の心は、もと人我のへだてなくして、公平なり、而してこれをば人の生身より、惻怛慈愛の情によりて、行ひ出す故に、亦公平の道理にもとることなし、父の羊をぬすめるを、其子これをあらはすが如きは、其迹公なるに似たれども、忍びざる心を忍びてする故に、公の理に害あり父子の間其罪を相かくすは、其迹不公に似たれども、忍びざる至情に本づくによりて、公の理に害なくして、乃ち眞の公道なり、

只爲公則物我兼照故仁、所以能恕、所以能愛、

只公なる時は、物我の私にくらまされずして、共に兼照すがために仁なり、仁なる故に、よく恕し、よく愛する所あるなり、

人謂要力行、亦只是淺近語

人の詞に、學は只力め行はんことを要すと、蓋し知ることはやすく、行ふことはかたきが故なりといへども、一向にかくの如く云のみなるも、亦これ淺近の語なり、

人既能知見一切事皆所當爲、不必待着意、纔着意、便是有箇私心、這一點意氣、能得幾時、子

人すでによく知を致して一切の事、みなわがまさにすべくして、せでかなはざる所と知見せば、何のはかりなやむ所ありてか、せざることをあらん、必しも意氣をつけて強てすることを待たじ、わづかに意氣をつくれば、即私心その間にありて、自得にあらざるなり、一點とは、すこしばかりのことを云、時子の子は、只つけ字なり、この一點の意氣に乗りてするとも、幾時の間にか任へ得ん、やがてたへがたくなりて、つ

○知之必好之、好之必求之、求之必得之、

只その道理を知れば、必心まことにこれを好む、これを好めば、必これを求めてやまず、これを求めれば、則必これを得て、わが物となる、これ自得なり、

古人此箇學、是終身事、果能顛沛造次必於是、豈有不得道理、

顛沛とは、災變患難にあふ時を云、造次とは、いそがはしく、かりそめなる時を云、本文論語に見えたり、古人は此學を以て、身を終るまで、一生の事業として、すみやかにせまることもなく、をこたりすつる時もなく、只勉々孳々として、斃れて後にやむ、よくかくの如くして、常にわすれず、造次にも、顛沛にも、必こゝにをいてせば、何ぞ道理を自得せざることあらんや、

○古之學者一、

此下も亦伊川の語なり、古の學一つは、即儒者の學、説下に見えたり、

今之學者三、異端不與、

異端とは、聖人の道の外に、その端を異にして、教を立つ、古の楊墨、今の佛老の類これなり、其道大いにかはれるを以て、三つの數にあづからず、

一曰文章之學、

詩賦辭令を巧に作りならふぞ、

二曰訓詁之學、

訓詁とは、文義を云、經傳の文義を、精くとかくばかりの學なり、

三曰儒者之學、

己を脩め、人を治め、常人より聖人に至るの道を學ぶなり、

欲趨道、舍儒者之學不可、

不可とは、道に造られずとぞ、蓋し道は本なり、文章訓詁はみな其末なり、儒者の學、道を以て主とすれど

も、文章訓詁の末も、亦をのづから其中にあり、

○問作文害道否、曰害也、凡爲

文、不專意、則不工、若專意、則志

局於此、又安能與天地同其

大也、

聖人の徳、天地とひとしく、三才ならび立て、共に化育の功をなす、儒者の志す所これなり、

書曰、玩物喪志、爲文亦玩物也、

呂與叔有詩云、

呂大臨字は與叔、程子の門人なり、

學如元凱、方成癖、

癖とは、好む所の者と、こほりて病となるを云、杜預ふかく左傳を好みて、其解つくる、自われに左氏の癖ありといへり、

文似相如、殆類俳、

俳は、俳優の戯、此方の猿樂様のことなり、漢の司馬相如詞賦を巧につくり、つとめて人を悦ばしめけるは、俳優に類するなり、

獨立孔門無一事、

上二人が如き學を以ては、世に名をとることありといふとも、只孔子の門下に立つ時は、一事の用をなすこともなきぞ、

只輸顏氏得心齋、

顔子の心齋のこと、莊子に見えたり、葷酒を絶つ齋戒にあらずして、其心つねに明潔なるを云、こゝにはこれを借りて、敬を持することとす、云意は二人孔門に立て、一事もなく、却て只顔子の心齋をたもち得て、ひとり己に切なるの學に、まけたるとなり、

此詩甚好、

此詩訓詁文章のみを事とするは、聖學にあらずと云ことをよくいひおほせたり、

古之學者、惟務養性情、其他則、

不學、

養性情は、即持敬涵養のことにして、古人は只これをつとむ、其他のことは、皆學の本業にあらず、

今之爲文者、專務章句、悅人之

耳目、

ひたすら詞の章句を巧にして、人の悦びもてあそぶことを務るぞ、

既務悅人、非俳優而何、

呂が詩の意に應ず、

曰、古者學爲文否、

古人も文つくることを學びたるかと、

曰、人見六經、便以謂聖人亦作文、

人六經の文のよきを見て、聖人も亦文つくるに意ありと思へり、

不知聖人亦攄發胸中所蘊、自

成文耳、

攄發は、のべひらくなり、聖人は只胸中につむ所の道理を、詞にのぶる處を、のづから文を成して、これをつくりたるふことを待たず、

所謂有德者必有言也、

これ論語を引て、上文の意を明す、凡そ徳ある者は、亦必其徳詞にあらはるゝ所ありて、聞くにたへたるなり、

曰、游夏稱文學何也、

論語に孔門の十哲、文學には子游子夏と云によりて問ふ、古人文つくることを學びずば、游夏の文學と云は何ぞやと、

曰、游夏亦何嘗秉筆學爲詞章也、

游夏の文學と云は、詩書禮樂の文を、講習し得たるを云、後世の如く、筆をとりて、詞賦文章をかきなならむたるにあらず、

且如觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下、此豈詞章之文也、

これ易賁卦の象辭を引く、天文とは、日月星辰陰陽寒暑の運行を云、人文とは、人倫禮樂の品節儀文を云、君子は天文を觀て、以て四時の變遷を察にし、人文を觀て、以て教化して、天下の風俗を成す、古人の文と云には、かくの如き者あり、豈これも亦今の詞章の文の如くなる者ならんやと、

○涵養須用敬、進學則在致知、

根本を涵し養ふには、つねに端莊純一の敬を持つべし、學に進んで發明することは、理を窮めて知を致すにあり、これ學をするの大要にして、一時にならび下す工夫なり、車の兩輪鳥の兩翼の如し、かたつゝ廢つべからず、而して本立つ時は、知ますゝ明なり、知精き時は、本ますゝ堅し、一つの者亦互に其功を相濟す、

○莫說道將第一等讓與別人、且做第二等才如此說便是自棄、

學者の志す所すべからく高遠なるべし、天下第一等の事は、及ぶまじければ、これを他のよくする人にゆづりあたへて、我はしばらく第二等の事をせんと云ことなかれ、かくの如くに云意あれば、即これ自棄なり、

雖與不能居仁由義者、差等不同、其自小一也、

差等は、しなゝり、第二等の事を志すも、仁に居て體とし、義に由て用とすることあたはずして、これをすつる自棄とは、其差同じからずといへども、自己を小にすることは、亦一つなり、

言學便以道爲志、言人便以聖爲志、

學のすゝむ所を云時は、即道に造らんことを期し、人とならんことを云時は、即聖人の地位を期す、これ即第一等を以て志とするの學なり、

○問必有事焉、當用敬否、

必有事焉とは、孟子の文、浩然の氣を養ふ者、必つねに事とする所の工夫ありて、忘るゝことなかるべきことをいへり、或人その事とする所には、敬を用ふべきや否やと問ふ、

曰、敬是涵養一事、

敬は、内を純一にし、外を端莊にして、徳性を涵養する、一むぎのことにして、事業の名目にあらずとぞ、必有事焉、須用集義、

集義とは、つねに念慮事爲の間に在いて、巨細となくみな利をすて、義に従ふ工夫を、積み集ることを云、孟子浩然の氣を、集義の生る所と云時は、その事とする所は、これ集義の功を用るなり、

只知用敬、不知集義、却是都無

事也、

敬は集義の本なりといへども、もし只敬を持するこのみを知て、義を集ることをせざる時は、これすべて事業とする所の者なし、

又問義莫是中理否、

義とは、事の理にあたることを云にてはなきかと、曰、中理在事、義在心、

理にあたりあたらざるは、事の上であり、義は心の事を宰判して、各その理にあたらしむる處なり、よりに心ありと云、

問敬義何別、

これ亦上の問答によりて、敬と義とのわけを問ふ、

曰、敬只是持己之道、

己をたもちて、徳を養ふの道なり、義便知有是有非、順理而行、是爲義也、

義はこれ事理の是非あることを知り得て必その理の義に順ひて、行ふを云なり、
若只守一箇敬、不知集義、却是都無事也、

義上章に同じ、

且如欲爲孝、不成、只守着一箇

孝字、須是知所以爲孝之道、

守着的着は、つけ守なり、父母に孝せまく欲する者、只孝の一字の義を守りて、善く父母につかふまつるを孝とすとのみ、こゝろゆることとは成さず、又その孝をする所の道、其事いかゞはすると知るべきなり、

所以侍奉、當如何、溫清當如何、

然後能盡孝道也、

親の旁に侍りて、奉養する所の事、いかゞはする、衣食を冬温にして、夏清くする所の事、いかゞはする

と、かくの如くに一々講求して、然して後によく孝道を盡すことを得るなり、又これを以て、只敬のみを守らずして義を集むべきことを明せり、

○學者須是務實、不要近名、方是、

それ名と實とは、影形の如し、その實あれば必その名あり、然れども學者はひたすら實をつとめて、名を求る意なきこと、是なりとす、もしわづかにも名に近づけば、實に遠りて是ならず、

有意近名、則是僞也、大本已失、

更學何事、

もし名に近づく意あれば、その學眞實ならずして、虚僞なり、學をする大本すでに失へり、更に又何事をか學びん、

爲名與爲利、清濁雖不同、然其利心則一也、

名の爲にするは清く、利の爲にするは濁れりといへども、凡そ爲にする所ありてすること、そのわが身を利する心は、一つにしてかはりなし、君子は何事をするにも、みなわがまさすにすべき、當然の義として、少しも爲にする所なし、

○回也其心三月不違仁、

本文論語に出たり、顔子一たび仁に至る時は、三月の久きをふれども、其心仁に相そむき違ふことなし、只是無纖毫私意、有少私意便是、不仁、

纖毫は、ほそき毛なり、極めて少しのことを云、仁に違はずとは、仁はこれ心徳の全く天理にして、毛頭の私欲もまじはらざるを云なり、もしわづかにも私意あれば、即これに違背して不仁なり、多くある後をまたす、

○仁者先難後獲、

論語の文なり、先後とは、その次第を云にあらす、蓋し仁者は、その功を用ひ、事を行ふの、しがたきこと

學而善思、然後可與適道、

すでに學んで、又よく思ひ釋る者は、深く求めてやまざる故に、此人とは、相與に道にすゝみゆかるゝなり、

思而有所得、則可與立、

思ひて得る所の實ある者は、守る所かたくして、物にうごかしむばゝれざる故に、此人とは、相與にひとりだちせらるゝなり、

立而化之、則可與權、

化すとは、學ぶ所精熟して、道理と共にとけあふに至る時を云、權は、もと秤の錘なり、事の輕重をはかりて、其宜きにかなはしむることにとりて云、すでに立ち定まるより、融化して守りを借らざるに至る時は、義精く仁熟して、一隅にとゞこほらず、かくの如くなる人にして後に、權宜を與にせらるゝなり、

○古之學者爲己、其終至於成物、

をはからずして、急にこれをつとむ、その效の得る所を、はかる意なきなり、

有爲而作、皆先獲也、

凡そ爲にする所ありてすることは、みな其效を期する意あり、

古人惟知爲仁而已、今人皆先獲也、

仁の徳、天理全くして、私意まじはらず、效をはかるは、これ私意なり、この故に古人仁を求る者は、只その當然の道なることを知て、これをすのみにして、をのづから效をはかる意なし、今の人得ることを先んずるが如きは、決して仁に入るに由る所なし、

○有求爲聖人之志、然後可與共學、

此章も亦論語の文義を釋す、これ志を立るには、即聖人を以て標的とすべし、これ其志の大なるによりて、此人とは、相與に學を同くせらるゝぞ、

物とは、人を以て物を兼ねとく、蓋しよく己が性を盡す時は、亦よく人物の性をつくす、よりに其學己がためにする者は、その終り亦よく物を成すに至る、

今之學者爲物、其終至於喪己、

此爲物は、爲人を云、好んで人の師となり、好んで人の事を謀るの類をさす、其學理いまだ精しからず、道いまだ明かならずして、人の爲にすることを好む者は、名を求め、外を飾るにあらざれば、義を知らずして、事を妄に作すの人となる、この故に、只それ人を成し得ざるのみならずして、ついに己をあはせて共に失ふなり、

○君子之學、必日新、日新者、日進也、不日新者、必日退、未有不進而退者、

日進むとは、今日よりも明日すゝみ、明日よりも又明日進むすゝむなり、日退くは、これにうらがへして知るべし、たとへば水にさかのぼる船の如し、をしのぼさ

ざれば、則ながれくたるなり、のぼらずして、くだらずと云ふことなし、
唯聖人之道、無所進退、以其所造者極也、

只聖人の道のみ、更に進前することもなく、亦退轉することもない、これ其道に造る所、すでに至極處なるが故なり、

○明道先生曰、性靜者可以爲學、

知は靜なるを以て明なり、行も宜く靜を主とすべし、この故に、本性靜なる者は、學をするによし、

○弘而不毅則無規矩、毅而不弘則隘陋、

無規矩とは、なを骨肋なしと云が如し、骨のよはきを云、即前章の難立の義なり、隘陋は、せばきなり、即亦前章の無以居の義なり、

之篤行之、五者廢其一、非學也、

これ中庸の文を論ず、本文五つの之の字は、泛く道理をさして云、凡そ人學をすることは、須く博かるべし、もし博からざれば、是非可否を擇ぶことあまねからず、すでに學びとりては、その疑しきことを、人に問ふべし、而してその問ふこと審ならざれば、師友の情を盡されず、すでに問ひきつたることを、又己に反りて、思ひみるべし、而してその思ふこと慎まざれば、泛濫にして、ついに得る所なし、すでに思ひ熟して、後に、その是非可否を、水火黑白の如く、明に辨きはむべし、もし辨ることいまだ明ならざれば、微細の際、なをまどひあるを免れず、此四つは、みな致知のことなり、すでに明辨する時は、その得る所の道理、實に己が物となる故に、乃これを行にほどこすべし、而してその行ふとは篤くして、力をきはめ、理をつくすべし、此一つは、力行のことなり、凡そ學をするの方、必此五つのことをそなふべし、もしその一つをもすつることあれば、則これ學にあらず、

○張思叔請問、其論或太高、

○知性善、以忠信爲本、此先立其大者、

これ論孟の文をとり合せて云、それ人その性の本善なることを知る時は、萬善己にそなはりて、堯舜にも學んで至るべきことを知る、これを知て、乃己を脩るに、忠信を以て本とする時は、百行みな誠を以て主とす、これ聖人を學ぶの基なり、よくかくの如くなる時は、學をする大綱立つ故に、先その大なる者を立つといふ、

○伊川先生曰、人安重則學堅固、

これ亦論語の文義を釋す、安重は、しづまりて、おもくしきことを云、蓋し人の言動、浮躁輕率なる者は、その知る所忘れやすく、その守る所くづれやすし、よりて其學堅からぬなり、この故に學者まづ安重ならんことを要す、

○博學之、審問之、慎思之、明辨之、

張釋字は思叔、程子の門人なり、その請問ふ所の論其理太高遠なり、

伊川不答、良久曰、累高必自下、

これ中庸の君子の道、たとへば遠きに行が、必近きよりするが如し、たとへば高きに登るが、必卑きよりするが如しと云によりて云、高きをつみかさぬるには、必ひきよりきはめのぼるべしとなり、

○明道先生曰、人之爲學、忌先立標準、

標準とは、目あてのしるしを云、學者聖人を以て志とするはよし、然れども只今する所の工夫に、まづ目あてをたてをきて、其效をいそぐことを忌む、

若循循不已、自有所至矣、

循々とは、よりしたがふ義なり、もし只工夫の次第によりしたがひ、勉々孳々としてやまざれば、をのづから至りつく所ありて、志す所を得るなり、通章の旨即孟子の必有事焉而勿正、心勿忘、勿助、長と云の意

なり、
○尹彥明見伊川後半年方得大學西銘看、

尹焞字は彥明、程子の門人なり、はじめ程門に來れる時、その資質はよかりしかども、いまだ學をすおもむきを知らざりしによりて、伊川まづその說話を聞かして、氣質の濁りをすゝぎ、道を求めるの誠を積ませ、半年過ぎて後に、はじめて書をよむことを得せしむ、大學は古人學をするの次第なり、西銘は仁道の大意なり、

○有人說無心、
或人學を論して、心なかるべしと云者あり、

伊川曰、無心便不是、只當云無私心、

心なしとは、一切に思慮を絶て、心をして枯木死灰の如くならしむるを云、公平にして私心なきは、即仁の道なり、

道恰好着工夫也、

此より下は、謝氏の語なり、鍛煉とは、鍛冶の銅鐵をねりきたふことを借りて云、伊川よく人を鍛煉して、教へ成すことを、會得せられたり、上の如くに等をこゆるの戒を説き了りて、又今恰好に工夫を着る道はいひ示せりと、其説はこゝにみえず、

○謝顯道云、昔伯淳教誨、只管着他言語、

伯淳は、明道の字、教誨はみな教なり、謝氏自云く、昔伯淳人を教誨せられし時、われその教をうくるごとに、ひたすらその言語を執着して、一偏に工夫を用ひたりきと、

伯淳曰、與賢說話、却似扶醉漢、
救得一邊、倒了一邊、只怕人執着一邊、

醉漢とは、酒に酔ひたるをこなり、扶くとは、かゝへたもつ義なり、云意は、賢と說話すれば、醉人の倒る

○謝顯道見伊川、伊川曰、近日事如何、

このごろ工夫を用る所の事いかんと、
對曰、天下何思何慮、

これ易繫に、咸卦九四の擾々往來、朋從爾思と云を、とく所の詞をとりて云、天下の事みな自然の理あり、何ぞ必しも往來擾々として、思慮することを用ひんと、謝氏これを擧ぐるは、近來試る所の事これなりとぞ、

伊川曰、是則是有此理、賢却發得太早在、

賢とは、謝氏をさす、發得とは、ひらき擧て用る義なり、蓋し思慮を用ひずして、萬事その理にあたること、聖人義精く仁熟するの上ならでは、あははざることなる故に云く、此事則これ此理ありといへども、賢今これを發得すること、太早くてありと、

伊川直是會鍛煉得人、說了又

を扶くるに似たり、こなたの一方を救ひ扶くれば、又かなたの一方へ倒れかゝる、只わが説を聞く人、かくの如くに、そのきく所を、一偏に執着せんことを怖ると、

○橫渠先生曰、精義入神、事豫吾內、求利吾外也、

此章は、易繫に、精義入神、以致用也、利用安身、以崇徳也、過此以往、未或知也、窮神知化、徳之盛也と云義を釋す、精義入神とは、義理を精くきはめて神妙の處に至ることを云、これ事の理を、あらかじめわが内に定めて、以てわが外に行ふ所を、順利ならしめんことを求るなり、朱子の云く、求の字病あり、所以利吾外也と云べしと、

利用安身、素利吾外、致養吾內也、

その行ひ用る所を順利にして、わが身を安定にすることは、かねてよりわが外を利して、以て養ひをわが内に致すなりと、これ崇徳の義をとく、此二段は、知

行相資け、内外交養ふの道なり、窮神知化、乃養盛、自至、非思勉之能強、故崇德而外、君子未或致知也、

神と化とは、天地の徳神妙にして造化の功をなすことを云、これを窮めこれを知るとは、聖人の徳天地の功用と、一つになりたることを云、聖人に在いては、即存する所の者神にして、過る所の者化するの事となり、此地位には、これ徳を養ひて、崇く盛んなる時に、をのづから至る所なり、心に思ひ身に勉めて、強て至らるゝ所にあらず、この故に、崇徳と云より外は、君子いまだ自知ることを致すことあらざる所なり、

○形而後有氣質之性

人の形は、生るゝ初に、氣凝りて質となる者なり、性の理は、本みな善なりといへども、形をうけて後に、氣質と共に成りて、各異なり、これを氣質の性と云、

これは形より後のある所にして、性の本然にあらずと、善反之則天地之性存焉、

人よく氣質の偏を改めて、本来の善に反る時は、則氣質の内を在いて、人身にかゝはらずして、天地自然のまゝなる性存してこれをたもつことを得るなり、故氣質之性、君子有弗性者焉、

君子とは、蓋し孟子をさす、それ天地の性も氣質をばなれてある者にあらず、然れども古の君子、人みな氣質の性を修改して、その本然にかへらまく欲す、この故に、或は性悪、或は善惡混する等の氣質の説を、性の本義とせずして、ひたすら性の善なることを云人あり、

○徳不勝氣性命於氣

徳とは、人の天より得たる、本然の理を云、此理を天の賦予する所より命と云、此命を人うけて、心にそなへたる所より性と云、氣は即氣質を云なり、人その本然の理を主として、以て氣質の偏に勝ことあたはず

れば、氣反て主となる故に、性はみな氣に役せらる、これを氣に性命すと云なり、

徳勝其氣性命於徳

人よく氣質の偏を改めて、本然の理主となる時は、その性命みな天然のまゝなり、これを徳に性命すと云なり、

窮理盡性則性天徳命天理

道理をきはめ知て、徳性を全しつくせる者は、即これ徳に性命するの人なり、乃其性は天徳の本然、其命は天理の自然に反りたる者なり、

氣之不可變者獨死生脩夭而已

脩は、命のながきを云、天は、命のみじかきを云、學力を以て氣質の變化せられざる者は、只死生脩夭ばかりなり、

○莫非天也陽明勝則徳性用陰濁勝則物欲行

これは形より後のある所にして、性の本然にあらずと、善反之則天地之性存焉、

人よく氣質の偏を改めて、本来の善に反る時は、則氣質の内を在いて、人身にかゝはらずして、天地自然のまゝなる性存してこれをたもつことを得るなり、故氣質之性、君子有弗性者焉、

君子とは、蓋し孟子をさす、それ天地の性も氣質をばなれてある者にあらず、然れども古の君子、人みな氣質の性を修改して、その本然にかへらまく欲す、この故に、或は性悪、或は善惡混する等の氣質の説を、性の本義とせずして、ひたすら性の善なることを云人あり、

○徳不勝氣性命於氣

徳とは、人の天より得たる、本然の理を云、此理を天の賦予する所より命と云、此命を人うけて、心にそなへたる所より性と云、氣は即氣質を云なり、人その本然の理を主として、以て氣質の偏に勝ことあたはず

人の氣質の明暗清濁は、天の賦予する所にあらずと云ことなし、その陽多くして明なる者は、天然の徳性主となりて、事を用ふ、陰多くして濁れる者は、形氣の物欲主となりて、ほしいまゝに行なはる、

領惡而全好者其必由學乎

領惡而全好とは、禮記の文なり、物欲の惡を治めこなして、徳性の善を全くすることは、それ必學問の力によるとなり、

○大其心則能體天下之物

有未體則心爲有外、人心もと萬理をそなふるによりて、人其心を立つること大なる時は、則よく天下の物の體となりて、のこす所なし、然れば心の分量、もと大いにして外なし、もし物を在いていまだ體しつくさざる所あれば、則これ心外あるなり、

世人心止於見聞之狹

あまねく物に體することあたはず、

聖人盡性、不以見聞梏其心、其視天下無一物非我、

性は心に具へたる理なり、聖人その性の理をつくして、これを全くする故に、見聞のせばきを以て、其心を害せず、よりにてその天下を見ること、一物としてわが分内の事にあらずと云ことなし、

孟子謂盡心則知性知天、以此これ孟子の盡其心者、知其性也、知其性則知天矣、と云につきていへり、性は心の理、天は理のよりて出る所なり、人よく心の量をつくして、其大いなることをきはむる者は、則その具へたる理と、其理の本とを知らずと云ことなし、

天大無外、故有外之心、不足以及合天心、

人心の量、その大いなること、もと天と同じ故にかくの如し、

○仲尼絶四、自始學至成德、竭

兩端之教也、

本文論語に出たり、四とは、意必固我なり、張子絶の字を、禁め止むるの意とす、よりにて教の詞と思へるなり、竭兩端とは、こなたの端より、かなたの端まで、をしとをして、一つなることを云、此四つを禁絶することは、始て學ぶ時より、徳成就の時に至るまで、淺深生熟の異なるばかりにて、をしとをりたる教へなり、

意有思也、必有待也、固不化也、我有方也、

これ四つの者の名義を釋す、有思とは、はじめて思ひをかゝることあるぞ、有待とは、思ひかけたる所を期して待ことあるなり、不化とは、期する意の凝りてとけざるなり、有方とは、こりかたまりたる所、形狀を成して、方所のさしどころあるなり、

四者有一焉、則與天地爲不相似矣、

知及之、而不以禮性之、非己有也、

知はその崇きに及べども、禮を以て卑く足もとより行ひて、理と相習ひ、これを天性の生れつきのまゝなるが如くにせざる時は、その知る所の理、なを己が有る所の者にあらず、

故知禮成性、而道義出、如天地位而易行、

道は體、義は用なり、易は、陰陽の變易なり、云意は、天知地禮と、わが性と、共に相習ひて成就し、而して道義其内より流れ出ること、きはまりなし、なを天地上下に位して、易道其中に行はるゝが如し、

○困之進人也、爲徳辨、爲感速、

これ易繫に、困卦の義を、困徳之辨也と云によりてとく、困とは、患難にあひて、くるしむことを云、凡そ人困に處る時は、目を醒し、心を動かして、よく事理人

天地の徳、周徧にして私曲なき故に、これと相似ず、

○上達反天理、下達徇人欲者、

本文亦論語に出たり、君子の上に向ひて通達するはその日々に天理の本然に、たちかへることを云なり、小人の下に向ひて通達することは、その人欲の私に依り徇ひて、沈み溺るゝことを云なり、

○知崇天也、形而上也、通晝夜

而知、其知崇矣、此章易繫に云く、知崇禮卑、崇效天、卑法地、天地設位、而易行乎其中矣、成性存存、道義之門、又云く、形而上謂之道、又云く、通乎晝夜之道、而知と云を、とりあはせて發明す、禮は、知に對して行を云なり、晝夜とは、陰陽幽明、死生鬼神の類をすべて云、これ云意は、知の崇きこと天に效ふと云は、その知る所、形より上にありて、形なき道なり、又凡そ陰陽晝夜の兩端に兼ね通じて知る、よりにて其知の崇きこと天の如

情に通ずるを以て、徳の明なること、又よく義のため奮ひ發りてたちあがるを以て、感ずることの速なること、す、困厄の人の知徳を進むること、此二つのことあるがためなり、

孟子謂人有德慧術智者常存乎疾、疾、以此、

これ孟子の語を引て、上文の意を明す、徳慧術智とは、その智慧内には徳に本づき、外にはたてのあつたことを云、疾疾は、災患なり、人の智徳あること、往々災患の中にあるを、これより得來るとなり、然れども、學者志ある人は、困によりて進むことかくの如し、もし志なき人は、困にあふてまどひくじけ、平生の學、用をなさずして、反て常人よりもをとれり、

○言有教、動有法、

凡そ一言一動、先王の法言徳行にあらざれば、敢てこれをせざるなり、

晝有爲、宵有得、

晝は必爲る所の事ありて、善にすゝますと云ことな

し、夜は必靜に養ふ所ありて、その益を得るなり、息有養、瞬有存、

息は、鼻いき、瞬は、目た、きなり、一息一瞬の間も、存養の功を忘れざるべしとなり、蓋し君子終日乾々するの工夫、須臾も間斷なく、凡そ應事接物の際に、道を明にし、義を正くするの暇には、或は讀書講習し、或は靜坐涵養し、時とし處として、學にあらすと云ことなく常に此心を提醒して死することなからしむれば、則日々に進むことを得るなり、

○横渠先生作訂頑曰、

張子學堂の左右にいましめの詞をしるして、左を砭愚と名づけ、右を訂頑と名づく、訂は、たゞす、頑は、かたくなし、人不仁にして、身の痛痒をおぼへざるが如くなるを云、その不仁をたゞして、仁をなすいまいめなり、後に程子此兩篇を東西の銘とあらため名づく、これは西銘なり、○張子此篇の大意、人をして萬物一體の仁を知らせまく欲するにあり、而して仁を求ること、孝より切なるはなき故に、孝道を以て、これを發明す、それ仁は、天地生物の理を人心にうけそ

なへて、其徳とする者なり、この故に、人の本心、をのづから人を利し、物を愛すること我がためにすると、かはりなき者なり、然るに人は萬物の靈なりといへども、人我の形ことなるより、私欲いできたりて、親子父子兄弟の間にも、われがちなる意あり、よりに疎き人をば路人の如く、寇賊の如く視るに至ることあり、その私に愛する者ありといへども、亦親疎の差別にあたらずして、眞の愛にあらず、人よくその父母に事る孝道を推し本づけて、天地に事るに至る時は、則萬物をわが一體と視て、愛せずと云ことなく、その愛すること、亦をのづから差別ありて、次第みだるゝことなし、一篇のおもむき、此意を以て見るべきなり、
乾稱父、坤稱母、予茲藐焉、乃混然中處、
上二句は、易の説卦に、乾、天也、故稱乎父、坤、地也、故稱乎母と云によりていへり、稱すとはよびなづくの義なり、天は上にあり、萬物の生を施して、これを主とる、父の道あり、地は下にあり、天の施しをうけて、萬物をのせ養ふ、母の道あり、蓋し人物氣化の初

を以て云時は、もとより皆天地の生ずる所なり、今形化の者といへども、氣を天にうけ、形を地にとらざれば、父母も子を生養することあたはず、この故に、天地はわが身をうみ出せる父母にあらざれども、父母の道あるを以て、稱して父母と云なり、藐焉は、小きなる貌なり、混然とは、とけあひて、一つになれる義なり、天地は萬物の大父母なる故に、此身を以て天地に比すれば、きはめて小きなる者といへども、その形氣天地と混合して、相はなれず、而して天地の中間にあるを以て、天地のために、子たるの道ありとぞ、
故天地之塞吾其體、天地之帥吾其性、
帥は、士卒をひきゐる大將を云、これ孟子に浩然の氣を塞乎天地之間といひ、夫志氣之帥也と云をとりていへり、陰陽の氣、つねに天地の間にみち塞がる、此氣こりかたまりて、わが身となれる故に、今日の天地の氣、即わが此身の體質なり、天地の理氣の内、主宰となりて、將帥の如くなるは、即わが此心の徳性なり、之れによりて見る時は、天を父とし、地を母とし、

わが身混然として中に居て子たるの實證、明に知るなり、

民吾同胞、物吾與也、

民とは、泛く人をさす、同胞とは、胞はえななり、同く母の胎胞より生れたる兄弟を云、物とは、鳥獸草木金石水土、凡そ有情無情の者をすべて云、與とは、くみする義なり、わが相與して、つねに心をかくる者を云、蓋し人と物と、共に天地の間に並び生れて、皆天地の氣を得て體とし、天地の理を得て性とす、中にも人は萬物の靈にして、我と親き同類なるによりて、わが兄弟の如し、物は人の貴きにしかずといへども、亦その體性たる所の本同きを以て、わが與する等輩の者の如し、その兄弟の如くなる故に、凡そ天下の人にいて、愛せずと云ことなし、その等輩の如くなる故に、有情無情の者をして、皆その生をとげしめ、これを用ること、その宜きかなはずと云ことなし、これ儒者の道、必天地に參り化育を賛くるに至りて後に、備れりとする所以にして、亦一つも強てする所なし、皆自然の理に順ひてする者なり、

大君者、吾父母宗子、其大臣、宗子之家相也、

大君とは、天子を云、宗子は、俗に云總領、家相は、家老なり、それ人は天地を父母として、同く其中に生ずれども、正く天地につきうけて、人物をすべつかさどるは、則天子一人なり、この故に、これを吾父母の宗子とす、天子を輔佐して、萬事をおさむるは、即大臣なるを以て、宗子の家相とするなり、

尊高年、所以長其長、慈孤弱、所以幼其幼、

高年は、年たけたる人を云、孤は、みなしご、弱とは、泛くいとけなき者を云、天下の老人は、みな一つなるを以て、他人の老を尊敬するは、即其家の長者を、長として事の道なり、天下の幼少は、みな一つなるを以て、他人の少年を慈愛するは、即其家の幼者を、幼としてめぐむの道なり、

聖其合德、賢其秀也、

聖人は即わが兄弟の、天地と徳を合せたる者なれば、尤これをあがむべし、賢人も即わが兄弟の、なみより秀たる者なれば、亦これを敬すべきなり、

すべき工夫をとく、皆上には天に事る道をあげて、下には親に事る孝を以てこれに合はす、此段上の句は、周頌の詩に、畏天之威、子時保之と云の意にとる、之の字、詩にては天と祖神との照臨の心をさす、こゝにはわが身のこととなす、下の句も、大雅の詩に、燕翼子と云詞を借り用ふ、云意は、賢人つねに天を畏れて、その身をばづかしめじと保ち守るは、なを子として親の遺體をつゝしむことの至れるが如しとなり、

樂且不憂、純乎孝者也、

上の句は、易繫に、樂天知命、故不憂と云意をとる、下の句は、左傳に、顯考叔を純考と云詞を借る、但こゝには孝の字を、愛となして見るべし、云意は、聖人天命を知りて、天理にうち順ひ、つねに樂んで憂へざるは、なを子として其親を愛することの純にして、二心なき者の如しとなり、天を畏るゝに敬をいひ、天を樂むに愛を云こと、その宜きに稱へりといへども、亦一偏にかざらず、敬至れる時は、愛も亦其中にあり、愛純なる時は、敬も亦共に至れるなり、

于時保之、子之翼也、

此より下の段々は、人すでに天地の子たる時は、則その親に事る道を以て、天に事へて、萬物一體の仁に體

違曰悖德、

此より下二段は、上の二段に對し、不孝のことをあげて、衆人天に事ることあたはざる至極をいへるなり、違とは、理にたがふぞ、これ易繫に、聖人のことを、與天地相似故不違と云意を、うらがへしてとるならん、悖德とは、孝經の語、道理に悖りたる惡德を云、これ云意は、人天理に違ひて、人欲に徇ふは、なを孝經に、其親を愛せずして、他人を愛するを、悖德と云者の如しとぞ、

害仁曰賊

これ孟子に、賊仁者謂之賊と云にとる、蓋し仁はこれわが身の天にうけたる生理なり、これをそこなひほろぼす者は、なを其親を弑する、大逆無道の如し、よりにこれを賊と云、賊は賊子なり、

濟惡者不才

これは左傳に本づきて云、天理をなみし、惡をなしとげてあらためず、外より教訓せられざる者は、なを古へ渾敦窮奇樛杌と云二族の不才の子、わが惡名を増長して、其親を辱しむるが如し、

其踐形惟肖者也

これ孟子に、惟聖人然後可以踐形と云にとる、惟肖とは、商書の詞を借り用ふ、踐形とは、わが身にそなはる道理を、ことごとく踐み行ひ、其形體につみ充て、闕る所なきを云、即これ聖人の其性を盡すことなり、人よくかくの如くなる時は、則天地の德と相似てたがはず、なを子孫よく父祖の才德に肖て、不肖の子孫にあらざるが如し、蓋し樂天は知の至りを以て云、踐形は行の盡くせるを以て云、みな聖人の事なり、

知化則善述其事窮神則善繼其志

これは易繫に、窮神知化、德之盛也、中庸に、夫孝者善繼人之志、善述人之事者也と云を、とりあはせたり、知化とは、其する所の事天地變化の道に、適合するを云、これを子をよく父のしおきつる事を傳へ述るが如し、窮神とは、其德の精微なること、天地神明の妙に、至りきはまれるを云、これを子をよく父の志を

承け繼ぎて、つねに失はざるが如し、化は迹ある故に、事を以て云、神は形なき故に、志を以て云、亦皆聖人樂天踐形のことなり、

不愧屋漏爲無忝

上四字は、大雅の詩に、相爾在室、尚不愧屋漏と云をとる、これ衛の武公人に誦へさせて、己を戒められし詞なり、屋漏とは、室の西北の隅を云、おくふかき處なり、云意は、人なき處、事なき時として、しばらくも敬畏の心を忘るゝことあれば、心にをいて自愧る所ある故に、屋漏に閑居するとも、愧ることなかれとぞ、これを孝經に、小雅の詩を引て、夙興夜寐、無忝爾所生と云孝行の如し、所生とは、父母をさす、平生わが身に愧ることなきは、即親を忝めざるのことなり、

存心養性爲匪懈

上四字は、孟子に存其心、養其性、所以事天也と云にとる、つねに其心を存して放たず、これを以て、其性を養ひてそこなはず、これ天にうけたる所の者をば、

惡旨酒崇伯子之顧養

これ孟子に、禹惡旨酒と云をとる、旨酒とは、むまきさけなり、崇伯子は、即禹のことなり、禹父鯀、崇伯と云諸侯なりければなり、これ昔儀狄と云者、始めて美酒をつくりて、禹に奉る、禹飲でこれを甘んじ、後世必酒を以て其國をほろぼす者あらんと玉ひて、それより儀狄を疏んじて美酒を絶ち玉へることを云なり、人よく人欲を禁止して、天理を存養すること、禹の旨酒を惡めるが如くなるは、なを子として身の嗜欲を戒め、父母を奉養することを、念ひて忘れざるが如し、これ亦孟子に、博奕好飲酒、不顧父母之養を以て、五不孝の一つとするに、うらがへしていへるなり、

育英才、穎封人之錫類

上三字は、孟子に、得天下之英才、而教育之と云をとる、穎封人は、即鄭穎考叔、封人は、其官なり、左傳を按ずるに、鄭の莊公其弟、共叔が謀叛に、母のくみせることを怒みて、母をおしこめをき、われ黄泉に及ばずば、再ふまじと、誓をたつ、されども後にこれをくやめり、黄泉とは、地のそこにわく水を云、これ死して葬らる、後のことをいへり、穎考叔孝子なりしかば、其中をやはらげんために、ある時進物をとりて、莊公にまみゆ、莊公これに食をあたふ、考叔その肉を食せず、莊公故をとひければ、考叔小人母あり、これをもてかへりて、母にをくらんと請ふ、莊公き、て、爾母あり、我ひとりなしとなげ、り、考叔何とてかくはの玉ふぞと問ひければ、莊公その故を語る、考叔が云く、然ば今地をほりて、水のわく處に至り、上より道をつけて、其中にて母きみとあひ玉へ、たれか誓にそむけりとすべきといひければ、莊公これに従ひて、ついに母子の親み、初の如くなれり、そのかみ君子此事を稱して、穎考叔は純孝なり、其母を愛し

て、莊公にひき及ぼす、詩に云く、孝子不匱、永錫爾類とは、それこれを謂かといへり、云意は、孝子の誠つきざれば、永く其善を以て、爾の同類までに、あたへ及ぼすとなり、それ人の徳性は、一己の私ならず、天下の人、同く天にうく、この故に、己に得る所あれば、則亦人にをし及ぼして、英たる才徳を育ひなす、これを穎封人わが孝を以て、莊公に及ぼせることを、爾の類に錫へたるなりと云が如しとぞ、

不弛勞而底豫、舜其功也

これ孟子に、舜盡事親之道、瞽瞍底豫と云意にとる、不弛勞の三字は、論語の文を借り、人よく勤勞のつとめに、をこたらずして、天に事るの道をつくし、天豫を此人に致して、嘉祥の應驗あるに至る時は、これ舜その頑父瞽瞍に孝をつくして、瞽瞍豫を致せる功效と同じ、即此人も亦天のための舜なり、

無所逃而待烹、申生其恭也

これ檀弓にのせたる、晋の申生がことをとりていへり、無所逃とは、莊子の語なり、晋の獻公の世子申

生、その繼母の驪姫が、公を弑せんとすると云、讒言にあひて、誅せられんとする時に、其弟重耳國をたちのかれよと、すゝめければ、申生われ父を弑せんとするの名たてり、天下に父なきの國あらんや、然らばわれいづくにかゆかんといひて去らず、ついにくびれて死せり、人よく其身を脩めて、命の天壽を、天にまかせて、うたがはず、もし逃るべき道理なしと見れば、鼎鑊に烹らるゝ刑罰をもさけずして、これを待つ時は、これ申生が父の誅をまちて、去らざる孝恭と同じ、即此人も亦天のための申生なり、恭とは、父の命をつゝしむことを云、時の人申生に諡して、恭世子といへるによりてなり、

體其受而歸全者、參乎

これ孝經に云く、身體髮膚、受之父母、祭義に、曾子曰、父母全而生之、子全而歸之と云の語、並に論語にのする、曾子疾にふして、手足を啓かしめたることを、とりあはせていへり、參乎の二字も、論語の文、參は、曾子の名なり、こゝにひき用る意、其受たるとは、天にうけたる徳性をさす、これに體すとは、其理の一

つになる義なり、歸全とは、善く其事を終る義なり、生れてうけ來れる徳性を、そこなはず、けがさずして、死する時に、全くして歸らしむるとの意なり、人よくかくの如くなる時は、曾子の父母にうけたる身體を虧かず辱めずして、全く歸したる孝と同じ、即亦天のための曾子なり、

勇於從而順令者、伯奇也

これ説苑にのせたる、尹伯奇がことをとりていへり、周の太師尹吉甫が子伯奇、繼母の讒によりて、父に逐ひ出され、衣なく履なく、中野に霜をふみて、車をひきけれども、只父の命するまゝに順ひて、さかはざりしなり、従とは、まかする義なり、令は、命なり、人よく吉凶禍福の來るをば、天にまかする所、いさみてなやむことなく、只ともかくも、命するまゝに、なびきしたがひて、少もさかふことなきは、即亦天のための伯奇なり、

富貴福澤、將厚吾之生也、貧賤憂戚、庸玉汝於成也

富貴福澤、將厚吾之生也、貧賤憂戚、庸玉汝於成也

福澤は、さいはひありて、うるはしきぞ、憂戚は、うれへいたむなり、厚生とは、大禹謨の文、玉汝とは、大雅の詩の詞なり、玉にすと云を、朱子の詩傳には、重寶して愛護する意とす、一説、こゝに玉汝於成と云は、すりみがきて、よくなしたつる義なりと、恐くはこれ張子の本旨なるべし、それ人家富貴にして、福幸潤澤なるは、天私に我を愛するにあらず、これわが生涯を厚く養ひて、善をすること、易からしめんとなり、家貧賤にして、憂苦毀戚するは、天ことさらに我をなやますにあらず、われをばげましつ、なごめつ、玉つゝるが如くに、すりみがきて、よき人と成さんとなり、天地の人にをける、父母の子にをける、その養育の心豈ことなることあらんや、この故に、聖賢の天に事ること、周公の富を以ても、恭敬を忘れずして、驕ることあるに至らず、顔子の貧きを以ても、心を道に潜めて、其樂みを改ることなし、これなを孝子の其親に事に、愛せらるゝ時は、喜んでわすれず、惡まるゝ時は、をそれて怨むことなきが如し、そのこれに事るの心、亦一ならくのみ、

存 吾順事、沒吾寧也、

仁人の天に事ること、世にいける間は、ひたすら理に順ふのみにして、他の心なし、よりに身終る時は、天に愧ることなく、其心安寧にして、目ひしぐなり、即これ孝子の身存する時は、親に事ること、其志にたがはじとするの外なく、死にのぞんで、親のためには、づかしきことなくて、心を安んじて斃るるの道なり、これ生死の大槩を以て、一篇の意を結べり、

明道先生曰、訂頑之言、極醇無雜、秦漢以來、學者所未到、

極醇とは、醇はひたすらなる義なり、此篇の云所、道理極めて醇粹にして、駁雜ならざるなり、

又曰、訂頑一篇、意極完備、乃仁之體也、
此篇の意趣、極めて完備りて、かくる所なし、乃萬物一體の仁の、體たらくなり、

學者其體此意、令有諸己、其地不逆於心、
游酢字は定夫、程子の門人なり、此篇をよみて、其理渙然とほどけて、心に思ふ所を、相さはることなきなり、

曰、此中庸之理也、能求於言語之外者也、
中庸の性に率ふの道、其本混然たる一理にして、事に應ずる處、其理各殊なりといへども、みな過不及の差なくして、亦各一理を全うす、その通篇のおもむきも、亦始に一理をいひ、中ごろ散じて萬事となり、末に又合て一理となる、これ游氏西銘の言語の外に、理一分殊の旨を、よく求め得たる處なるべし、

楊中立問曰、西銘言體而不及用、恐其流遂至於兼愛、何如、
楊中立、名は時、亦程子の門人なり、言體而不及用とは、楊氏此篇の意を見あやまり、只萬物一體の仁ばかりをときて、差別の義なしと思へるによりて、かくの

位已高、

體は、體認なり、其理と一體になりて、よく會得すること云、而してこれを己が有る所の者とならしむるは、又よく此理を踐て行ふ者なり、其學すゝんで、こゝに至る時は、居る所の地位すでに高し、

到此地位、自別有見處、不可窮高極遠、恐於道無補也、

その居る處高ければ、その見る處隨て廣くなりて、前の見る處と自別なり、更に又高遠の理を、たづねきはむべからず、恐くは道を求るに補ふ所なくして、反て害あらんとぞ、

又曰、訂頑立心、便達得天德、

天徳とは、人爲のかゝつらひなき、天然の徳なり、蓋し此篇の趣、その心を立る所、大公無我の仁に體するにあるを以て、これよりして、すなはち人欲をはなれ去りて、天徳に通達し得るなり、

又曰、游酢得西銘讀之、即渙然

如く疑ひてとへるなり、

伊川先生曰、**横渠立言、誠有過者、乃在正蒙、**

張子のあらはせる正蒙の書には、その言ふ所の過當なる者あり、

西銘之書、推理以存義、擴前聖所未發、與孟子性善養氣之論同功、豈墨氏之比哉、

此書のおもむき、一本の理を推し行ひて、其中に差別の義を存す、豈墨氏が兼愛して、差別なき者の比ならんや、

西銘明理一而分殊、墨氏則二本而無分、

此語の本注に云く、老幼及人、理一也、愛無差等、本二也と、蓋し人の生ずること、必父母に本づき兄弟に

親疎の分たてる上より、根本の一理を推し行ひて、私勝の流弊を止むるは、これ恕の道にして仁を求るの方なり、

無別而迷兼愛、以至於無父之極、義之賊也、子比而同之過矣、

親疎の分別なくして、兼愛の教にまよひ、至親の父を、路人の如くに視て、その極り父なきに至るは、これ義裁制を賊ふによりて、義の賊なり、然るに此二つの者を、をしならべて、同く論ずるは、あやまちなり、

且彼欲使人推而行之、本爲用也、反謂不及、不亦異乎、

横渠此書の作、人をしてこれによりて、仁道を推し行はしめまく欲す、これその本意用にたてんがためなり、然るを反て用に及ばすと云は、異なることなり、やと、

○又作**砭愚曰、**

わかれて、一家の老幼となる、而してわが老幼を愛敬する心を推して、他の老幼に及ぼす、よりに其間に、自然と親疎の等あり、これ理は本一にし其分をのづから殊なるなり、西銘は則ち道理を發明す、墨氏は父母を愛する心を以て、すなはち路人に施して、さらに差等なし、これ其本すでに二つなり、よりにその推し行ふ所、ついに親疎の分別なし、

分殊之蔽、私勝而失仁、

もし徒に分殊の義を知るのみにして、理の一にくらき時は、その蔽はるゝ所、まことに己がためにするの私意勝て、公愛の仁を失ふ、

無分之罪、兼愛而無義、

自然の親疎を知らずして、分別なきに流るゝの罪は、人を平等に兼愛して、その宜きほどを裁制するの義なし、

分立而推理一、以止私勝之流、仁之方也、

張子又砭愚一篇を作る、砭は、いしはりなり、わが愚なる處を、いしはりさすが如くに、さとしたいすとぞ、これは東銘なり、

戲言出於思也、戲動作於謀也、

戯れて口に言ふことも、まづかくいはんと、心に思ふより出で、これを云、戯れて身に動くことも、まづかくせんと、謀るより作りて、これをするなり、

發於聲、見乎四支、謂非己心、不明也、

四支は、四つのえだ、手足を云、戯言すでに聲にあらはれ、戯動すでに四支にあらはれたるを、これわがたはぶれごとなれば、心よりたくみ出せるにあらずと思へるは、智の明ならぬなり、

欲人無己疑、不能、

わが心にあらずと云ことを、人信じて疑ふことなからまく欲すとも得んや、得ることあたはじとなり、

過言非心也、過動非誠也、

過とは、心ならぬしおちを云、過りて言ことは、心ありて云にあらす、過りて動くことは、心の誠よりするにあらす、

失於聲、繆、迷其四體、謂己當然、自誣也、

失すと云も、あやまる義なり、四體は、即四支なり、當然とはまさにかくの如くなるべしと云義なり、過言にして、その聲にはづれいで、過動にして、その四體を繆らし迷はせるを、わが過ちとすることをばちて、反てこれかくの如くせでかなはざることと、思ひなせるは、われと白しむまぐるなり、

欲他人己從、誣人也、

他人もわれに従ひて、その當然なりと思はしめまく欲するは、これ又人をしむまぐるなり、

或者謂出於心者、歸咎爲己戲、失於思者、自誣爲己誠、

歸すとは、よする義なり、自思ひ謀りて、心より出た

ることをば、咎を戯れごとにかぶせて、これによせをき、たましく思ひあやまれる過失をば、白しむまげて、わが當然の誠とす、

不知戒其出汝者、歸咎其不出汝者、

汝より出たる戯れを、戒しむるは、これ意を誠にし、心を正くするの本なり、汝に出ざる過ちに、咎を歸するは、これ善に遷り過を改るの端なり、今彼此をとりまどひて、さかしまに心を用ることを、自知らず、

長傲且遂非、不智孰甚焉、

もし心ある戯をおほひて、わが誠にあらずとすれば、其傲慢日々に増長す、心なき過ちをかざりて、己が當然とすれば、其非違日々に遂げ成る、天下の不智迷妄いづれかこれより甚き者あらん、葉氏おもへらく、それ戯れと過との輕きをしも、克治する所、かくの如くに嚴なり、况やわづかにも、心に僻が事のきざせるをば、しばらくもといめをき、其身をわづらはすことあらんや、

横渠學堂雙牖、右書訂頑、左書

砭愚、

雙牖とは、雙は二つなり、兩方の牖を云、

伊川曰、是起爭端、改訂頑曰、西

銘、砭愚曰、東銘、

程子訂頑砭愚の文字、ことやうなるを以て、人の議論の端をひらかんことを恐れて、唯何となく、西銘東銘と、其名をあらためり、

將脩己、必先厚重、以自持、

これ論語の君子不重、不威と云章を釋す、其義本旨と異なりといへども、此説も亦學者に益あるを以て、こゝにしるせり、云意は、君子己を脩めんとするには、必まづ内外を厚く重々しくして、自持ち守るべし、これ徳をつむの基なり、

厚重知學、德乃進、不固矣、

もし徒に厚重なる基なるのみにして、學問を事とせ

忠信進德、

ざれば、則亦固滯にして、其德すゝまず、必又學を好みて、而して後に德乃ひらけ進んで、固からぬなり、

惟尙友而急賢、

學問忠信の輔けを求むるには、唯朋友を尙びて、賢者にちかづくを以て急とす、

欲勝己者、親無如、改過之

不吝、

客とは、おしみて果さざる義なり、賢にして己に勝れる者の、われに親まんことをねがは、則又その過を改ることの、吝ならざるにしくことなし、もし過を改ること速ならざれば、人善を告るに樂まざればなり、

○横渠先生謂范巽之曰、

范巽之名は育、張子の門人なり、

吾輩不及古人病源何在、

今の人古人に及ばざること、必その病の源あり、今それ何れの處にか在るぞと、

異之請問、

異之その病源のある處を知らずして、これを請問す、

先生曰此非難悟設此語者蓋

欲學者存意之不忘庶游心

浸熟有一日脫然如大寐之得

醒耳、

脱然とは、物の中よりぬけ出る義なり、大寐とは、前後しらずにねいりたることを云、これ云意は、此事畢竟悟りがたきにあらず、われ此題目を設けて、學者を試ること蓋し學者常々これを會得せんとする意を存して、忘ることなくば、庶くは其心道理と共に浸りあひ、ねれ熟して、功積り、時到るに及んで、一日脱然として、大寐のさむるを得るが如くに、悟ることあら

まく欲してぞと、すでによく悟り得る時は、道を信ずること深く、學にすゝむことやまず、

○未知立心惡思多之致疑、

學者のまだ心を善道に立て動かざることを得ざる時は、いまだ見定むる處なくとも、その趣く所を堅く信じて心を專一にすべし、かなたかなたと思ふ所の端多くして、疑を致すこと、尤忌み惡むわざなり、

既知所立惡講治之不精、

心すでに立つ所あることを得る時は、則又講明修治の精細ならざること惡む、

講治之思莫非術內雖勤而何厭、

心立ち定まりて後に、講治するの思ひは、學術の内にあらずと云ことなし、勤めて思ふと云とも、亦何ぞ厭はん、思ふにあかずとなり、

所以急於可欲者求立吾心於

不疑之地然後若决江河以利

吾往、

此段は、申ねて初段の意を明す、可欲とは、孟子の可欲之謂善の語によりて、唯善を云なり、云意は、學者善を明にするに急なる所以は、其心をして、善を信じ、疑はざるの地にたゞしめて、然後に江河の大水をきりながすが如くに、其學のすゝみゆくことを快利にして、とどこほらせざらんことを求めてぞと、

遜此志務時敏厥修乃來、

此より下は、又その善を明にするに急なるべきことを云、これは書の説命の文をひけり、志とは、心に存する所のことを云、これ云意は、學者わが心をむなし、くして、ひきさがり、道理のまゝに、なびき順ひて、又その務ることは、精神をゆりたて、敏くしてたえまなくする時は、その修する所の道源々と流れ來りて、其手に入るとなり、

故雖仲尼之才之美然且敏以求之、

これ論語の文を引て、上段の意を明す、

今持不逮之資而欲徐徐以聽其自適非所聞也、

資は、うくるなり、氣質を云、今人に逮ばざる資質を持ちながら、徐々とゆるかせにして、以て自その分に適へるほどに、うちまかせて、其功を成さまく欲すること、これわが嘗て聞く所にあらずとなり、

○明善爲本固執之乃立、

此章中庸孟子論語の文を、とりあはせて發明す、それ學は、理をきはめて、善を明にするを以て本とす、その得る所の善を、固く執り守りて、乃ひとり立ちすることあり、これ知行を對していへり、

擴充之則大易視之則小在人

能弘之而已、

善道の本體、大いなりといへども、人これを修して、徳とする所は、よくこれをおしひろめて、その本來の分量に充る時は、則大いなり、もしたやすく見あなどる時は、則小きなり、その徳の大いなることは、唯

人よくこれを弘むるの力にあるのみなり、
○今且只將尊德性而道問學
爲心日自求、

此章中庸の語を發明す、學者わが天にうけたる徳性をあがめ尊びて、これを養ひ立るに、をこたりあなどらず、又問學の正道に由りしたがひて、そむきたがはず、此兩端を心として、日々に自求めす、むべし、
於問學者有所背否、於德性有所解否、

これ日々に求めるの法なり、
此義亦是博文約禮、下學上達、
これ論語の文を引て、上文を明す、博く文を學ぶは、善を擇ぶとの精きぞ、これ道問學のことなり、約禮とは、學び得る所を、約にして身にそなへ、禮法に行ふことを云、これ尊徳性のことなり、下學上達は、下人事を學びて、上天理に達するなり、張子は蓋し下學を以て問學のこととし、上達を以て尊性のこととする

なり、
以此警策一年安得不長、
警策とは、さとしむちうつなり、こゝにては、自はげますことを云、長すとは、其學以前より、のび長すことを云、

毎日須求多少爲益知所亡、改得少不善、此德性上之益、
此より下警策の工夫功效を、兩端にわけて云、多少とは、そこばくと云義なり、所亡とは、今まで知らざる所のことを云、張子の本意蓋し知行かねす、むを以て、尊徳性の工夫とするなり、云意は、かくの如くに、毎日點檢して、多少の進益を求むべしとなり、
讀書求義理、編書須理會有所歸着、勿徒寫過、又多識前言往行、此問學上益也、
歸着とは、俗にかたづくこと云義なり、書を讀には、必

義理を求めて、徒に章句訓話の末のみを事とせず、書を編には、必段々歸着する所の條理ありて、徒にひろきことを務めて、みだりに寫しとをるのみなるべからず、又多く前世往古の人の言行を聞き識るべしと、これ易大畜の象辭をとりて云、これみな問學上に、進益を求るの道なり、
勿使有俄頃閑度、逐日似此三年庶幾有進、

俄頃とは、しばらくの間なり、閑度とは、閑は無事なる義なり、しばらくもすることなく、むなく日度を度ることなかれとぞ、日を逐て、かくの如くに、三年の功をつまば、學業德行す、むことあるべしとなり、
○爲天地立心、
それ人は萬物の靈として、各天職をうけ、裁成輔相の任あり、この故に、みな其心を天地のためにたて、公にこれを用ふべし、只一身のためにたて、自私にすべからず、中にも聖人は、天地に參はり、化育を贊けて、天下の人物をして、各その所を得、その徳を成

さしむるを以て職任とす、
爲生民立道、
生民とは、泛く世に生々する人を云、立道とは、聖人三綱五常の柱となり、禮樂刑政の法を制するの類を云、
爲去聖繼絕學、
去りし世の聖人のために、絶たる學脈を繼ぎて、此道をその世に明にすることを云、
爲萬世開太平、
後世の王者のために、世を治め民を安んずるの法を、たてをくことを云、學者此四つの者を以て志を立る時は、則身の任する所至大にして、小き成就に安んぜず、心の存する所至公にして、まぢかき利益を以て、苟くもせざるなり、

○載所以使學者先學禮者、只爲學禮、則便除去、了世俗一副、
タナリハ、チナハチジヨ、キヨシハ、ルガセ、シヨク、

當習熟纏繞

載とは、張子みづから名を稱す、副當とは俗語、蓋しつきそひたる者を云、これ云意は、學者まづ禮を學ぶ時は、則世俗のことに、一物つきしたがひ、習れ熟みて、其身に纏ひ繞れる者を、除ひ去て了るがためなりと、蓋しその鄙陋の習染をはらひて、文雅の風俗になさんことなり、

譬之延蔓之物、解纏繞即上去

延蔓の物とは、延ひ蔓へる、葛藤の類をさす、たとへば、樹木の延蔓の物に、まとひしめられたるが如し、その纏繞をときすつれば、木の幹枝たちあがりゆくとなり、

苟能除去了一副當世習、便自然脫洒也

脫洒とは、洒は落なり、ぬけおちたる義なり、もし人も亦よく一副當の世俗の習はしを、はらひすつれば、即脫洒して、ぬけいでたるやうになるとぞ、

又學禮、則可以守得定

又禮節を學ぶ時は、則筋骨かたまり、志氣もいよだつ故に、守り得定まりて、物に動かされざることを得るなり、所謂禮に立つと云者なり、

須放心寬快公平以求之、乃可見道

放とは、をしひらく義なり、凡そ人此道の體を見うけんとならば、其心を推しひろげ、寬に快くして、かぎりたる所なく、公に平にして、物我の私なからしめて後に、これを求むべし、然らば道を見ることを得べきぞ、

況德性自廣大

况や其心の德性の分量、もとをのづから廣大なる者をや、

易曰、窮神知化、德之盛也、豈淺心可得

窮神知化の義前に見えたり、云意は易に其德神妙に至り、其功造化にひとしきを、盛徳と云か如きの地位、豈淺陋にして、あさくせばき心を以て、これに至ることを得べけんやと、

人多以老成則不肯下問、故終身不知

人多くはわが老成人なるを以て、下輩の人に問ふことを耻て、心に肯はず、この故に、身を終るまでに、道理を知らず、

又爲人以道義先覺處之、不可復謂有所不知、故亦不肯下問

又は人既に道義を先覺れる人と稱して、其位にをくがために、今又知らざる所ありと、いひがたきを以て、これも亦下問をうけごはず、

從不肯問、遂生百端、欺妄人我、寧終身不知

欺妄とは、あざむきいつはるなり、下問を肯はざるよりして、遂に種々のまことならざる意、端多く出來りて、内己を欺き、外人を欺き、身を終るまでに、道理を知らざるにやすんじてはつるなり、

多聞不足以盡天下之故

故とは、事物の然る所以の理をさす、人博學と稱して、聞き識す所多きのみにては、その知る所、限ある故に、天下の然る所以の理を知り盡すにたらず、

苟以多聞而待天下之變、則道足以酬其所嘗知

酬は、應なり、天下の理萬變きはまりなし、もし多聞の學を以て、その到來をまたば、其道只わが嘗て知る所のすぢにのみ、應するに足れり、

若劫之不測、則遂窮矣

もし測り知られざることを以て、劫しおどろかす時は、則その智窮りて、これに應することあたはず、この故に、聖門の學、萬理一貫することを尙ふなり、

○爲學大益、在自求變化氣質、
それ人聖人より外は、各氣質の偏なきことあたはず、
この故に、學をして大益を得ることは、只自その氣質
の偏を變化して、これを全くするにあり、

不爾、皆爲人之弊、卒無所發明、
不得見聖人之奧、
自その氣質を變化するは、これ己がためにするの實
學なり、それしからずして、功名を求め、記誦を務
の類は、力を用ること多しといへども、此道に在
て、ついに發明する所なくして、聖人の奧ふかき處
を見ることが得ざるなり、

○文要密察、心要洪放、
事物の文理をきはむることの密察にして、詳に明
らんことを要すべし、而して心をまうくることは又
洪放にして、大いにひろくをしひらんことを要す
べし、文理密察ならざれば、道理を見ることがあ
り、かくる所あり、立心洪放ならざれば、なをうけ
るゝ所せばく、應接かたをちなり、

○人雖有功、不及於學、心亦不
宜忘、
人もし妨ありて、その事功、學をするに及ばれざるこ
とありといふとも、亦つねに心にかけて學習を忘る
べからず、

心苟不忘、則雖接人事、即是實
行、莫非道也、
心もし學を忘れざる時は、則日用の間人事にまじは
るといへども、みな其知識心術を、明め正す處なる故
に、即これ己がためにするの實行にして、道にあらず
と云ことなし、

心若忘之、則終身由之、只是俗
事、
心もし學を忘るゝ時は、終身の由りふるゝ所、只これ
俗事にして、己に益なし、蓋しその由る所の事は一つ

○不知疑者、只是不便實作、既
實作、則須有疑、
凡そ學をする者、疑ひと云ことを知らずして、その知
る所もくからず、その行ふ所もふさがるまじく思
へるは、只これいまだ即眞實に工夫を用ひて、たしか
にこゝろみることなき者なり、すでに眞實の工夫を
用ひば、則疑はしき所あるべきなり、

○心大則百物皆通、心小則百
物皆病、
もし工夫を用ること着實なれば、必ゆきつまりて、行
はれざる處あり、即これ疑なり、これよく學ぶ者の、
疑ある所以なり、

にして、心を存すること、學にある時はこれ實行、學
にあらざる時は、これ俗事なり、
合内外、平物我、此見道之大
端、
心にきざす所を、即外になす事と見、外になす事を
ば、即心の動く處と見て、一致に工夫を用るをば、
合内外と云、人と我とをへだつる心なくして、只道
理のまゝに處置するを、平物我と云、此二つをよく
する者は、道に在いて、いまだ精微の蘊に至らずとい
へども、亦これ其端の大いなる處を見る者なり、

○既學而先有以功業爲意者、
於學便相害、
功業とは、俗に云てがらなり、すでに學を以て事とす
といへども、先より功業を立るを以て、意とすること
ある者は、その學をする心術と、即相さまたぐるこ
とあり、

既有意、必穿鑿創意、作起事端、
既有意、必穿鑿創意、作起事端、

也、

穿鑿はほりうがつなり、創意とは、創は、はじむるなり、あたらしきことを、たくみいだすを云、すでに功業に意あれば、必道理によらず、うがちたくみて、僻が事の端をなしいだす、即これ學に害ある所なり、**德未成、而先以功業爲事、是代大匠斲、希不傷手也、**

大匠は、大工なり、それ徳ある者は、必その徳にしたがふの功業あり、もし其徳いまだ成らずして、まづ功業を以て事とせば、これ古語に所謂大匠に代て木をけつれば、手をそこなはぬことまれなりと云者なり、僻が事をしいだす所以なり、

○竊嘗病、孔孟既沒、諸儒囂然不知反約窮源、勇於苟作、

囂然は、かまびすしき義なり、孔孟すでに沒してよ、此道宗として正す所なし、この故に、諸儒各わが好む所をほしいまゝにして、功業文詞の類、諸家の説

世にかまびすし、みな博きより約なるに反り、末より本を窮めて、己がために實益を求ることを知らず、いまだ見る處得る處なくして、みだりに事をおこし、説を立るにいさむ、

持不逮之資、而急知後世、

上に云所は、みな人に逮ばざる資質を持て、名を後世に知られんことを、急にする者なり、

明者一覽、如見肺肝、然多見其不知量也、

眼明なる者、一たび見る時は、その學の淺くして實なきこと、肺肝を見とすが如くに、これを知る、これによりて、正しく其人の自わが分量を知らざる處見ゆるなり、

方且創艾其弊、默養吾誠、顧所患日力不足、而未果他爲也、

創艾とは、草をなぎかるやうに、平らぐることを云、

他爲とは、即誠を養ふことをさす、云意は、今まことにまづ外にはする弊をかりたいらげ、黙して内にむかひ、わが誠實をやしなひなさんとせば、反てその患とする所、工夫を用る、日あしの力足らずして、その爲わざのいまだ果さるまじきかと、思ふにこそあるべけれ、何ぞ外にはすることをするいとまあらんやと、

○學未至、而好語變者、必知終有患、

變とは、非常の道權宜の事をさす、やむことを得ずして、しばらく常にかはりたる事をすることなり、これ聖賢義精く仁熟するの上ならでは、これに與ることあたはず、然るに其學いまだこゝに至らずして、これを語ることを好む者は、その必ついに患にあはんと知らるゝぞ、

蓋變不可輕議、若驟然語變、則知操術已不正、

權變のこと、淺學のかるくしく擬議すべき所にあらず、もし驟にはやくこれを語る者は、其とりあづかへる學術の、すでに正大ならずして、邪僻なることを知る、よゝてそのついに患へあらんことを知らるゝとなり、

○凡事蔽蓋不見底、只是不求益、

蔽蓋とは、おほひかくすなり、底は、詞のたすけ、かくの如きのと云、のゝ字の意なり、凡その事につきて、わが心中をおほひかくして、分明にときいださる者は、人の見る所をもきかず、戒しむる所をも知らず、只これ己がために益を求めざる者なり、

有人不肯言其道義所得所、至不得見底、又非於吾言無所不說、

こゝに學をする人あり、その道義にをいて、知り得たる所、行ひ至れる所をいはずして、人いかんとも見う

けられざる者は、大やう人の云ことをも、きゝながし
て、是非可否をいはず、然れども、これ又顔子夫子の
言をききて、其心一致なる故に、何事をもたゞちにう
けいれて、一つも問ひなせることなきを愚なるが如
し、わが言にをいて、悦びずと云ことなしと、の玉へ
るがたぐひにはあらずと、蓋しかくの如くなる者は、
或はその小き得る所に、いやしくも安んじて、自足れ
る者か、又はその得る所ををりて、人をあなどり、
或はこれをおしみて、人に告ざるの類なり、

○耳目役於外、攬外事者、其實
是自墮、

其心内にむかひて、自其身を修むることを知らず、耳
目の用、外にのみ役はれ、必しも己にあつからざる外
の事までをも、ひきとりて、うけあつかふ者は、己に
益なし、其實はこれ自その徳をひきくづす者なり、
不肯自治、只言短長、不能反躬
者也、

自その徳を治むることを、うけごはずして、只人才の
短き長きを評する者は、これ身に反て自せめたゞす
こと、あたはざる者なり、
學者大不宜志小氣輕、
學者の大きい宜しからざること、其志を立ること小
きに、其氣の輕く浮ぶにあり、
志小則易足、易足則無由進、
志小きなる時は、則みちたりやすし、たりやすき時
は、則進むに由なくして、退にちかし、
氣輕則以未知爲已知、未學爲
已學、
氣輕き時は、則いまだ眞に知らざること、すでに知
り得たりとし、いまだ實に學びざること、すでに學
び得たりとす、虚く外をはるのみにて、内に徳をつむ
もとひなし、

致知類

學を爲ること、必知を致すを以て先とす、この
故に、此篇爲學に次ぐ、

伊川先生答朱長文書曰、心通
乎道、然後能辨是非、如持權衡
以較輕重、

道とは、事物當然の理、これに通ずとは、明にさとの
義なり、權衡は、はかりなり、おもしろしを權と云、さほぜ
衡と云、人よく道に通じて後に、萬理の是非を辨る
は、なを秤をとりて、物の輕重をはかるが如し、

孟子所謂知言是也、

知言とは、天下の人の詞にかけて云ほどの道理を、
ことごとくくきはめ知ることなり、

心不通於道、而較古人、之是非、
猶不持權衡而酌輕重、

古人の是非とは、その爲る所の事と、云所の言とをか
ねて云、

竭其目力、勞其心智、雖使時中、
亦古人所謂億則屢中、君子
不貴也、

億、則屢中とは、論語に夫子子貢が智を評し玉ふ詞な
り、道理によらずして、只心より思ひはかりて、たび
／＼あたることあるを云、蓋し事の是非をば、秤なく
して物をはかる者の、眼力をつくし、心智を勞らしめ
て、たま／＼あたるときあるが如くならしむとも、亦こ
れ億あればば／＼中ると云者なり、道理の明なる
より、てらし知るにあらざるを以て、君子はこれを貴
びざるとなり、

○伊川先生答門人曰、孔孟之
門、豈皆賢哲、固多衆人、
哲は、智のさときを云、衆人とは、衆は、もろ／＼な
り、なみ／＼の人を云、

以衆人觀聖賢、弗識者多矣、

聖は、孔子をさす、賢は、孟子をさす、衆人の眼を以て、聖賢を見れば、其聖賢たる所を、知らざる者、多かるべからず、

惟其不敢信己、而信其師、是故求而後得、

衆人といへども、己が見る所を信せずして、ひたすら師の教を信じける故に、深く求めて後に、ついに其道を得たるなり、

今諸君於頤言、纔不合則置不復思、所以終異也、

諸君とは、門人をさす、頤とは、程子自名を稱す、云意は、諸君わが説をき、て、わづかに其心に合はざれば、則してをきて、又思ひみず、よりに、ついにわが見る所と異なりとぞ、

不可便放下、更且思之、致知之

方也、

放下とは、手はなちすつる義なり、たとひ心にあはずとも、うちすてずして、更にしばらく思ひみるべし、これ知を致すのみならず、致知とは、はやすでに知る所より、いまだ知らざる所へ、をし致して、これをきはむる義なり、○その後覺の人は、智くらく、行に至らざる所ある故に、必先覺の人によりて、これをひらき正されんことを求む、この故に、初は、ころえがたき所ありとも、しばらくひらに師の教を信すべし、もし不幸にして、明師にあはざる時は、其道の正き先儒の説を信するも、亦かくの如くすべし、然る時は、其心專一なるによりて、功つもれる後に、必その求る所を得る效あり、もし己がわづかなる智を自信して、師を信する心專ならざれば、わが生れつきの資質を、すこし改めたるばかりにて、をはるなり、又諸説をき、あつめて、其よき處をとりあはせて、用ひんとする者は、ついに其路にふみまよひて、方角を失ふに至ること多し、然れば學をする道の得失は、只師を信すると己を信するによりて、わかるゝなり、

○伊川先生答橫渠先生曰、

これ張子の問へる所の議論に、程子の答へられし書なり、

所論大概有苦心極力之象、而無寬裕溫厚之氣、非明睿所照、而考索至此、

論する所、大槩その氣象、心を苦め、力を極めて、寛く裕に、温く厚き所なし、これ智の明に睿きより、照し見る所にあらずして、思慮を以て考へ索めて、こゝに至れる者なりと、

故意屢偏、而言多空、小出入時、有之、

意しばしば偏にして全からず、言多く塞りて達せず、中道にはづれて、小き出入り、時々これあるなり、明所照者、如目所覩、纖微盡識

之矣、考索至者、如揣料於物、約

見、髣髴爾、能無差乎、

明は、明睿なり、纖微は、ほそくかすかなるぞ、揣料とは、さぐりはかるさま、約見とは、大かたに見る義なり、髣髴は、ほのかなる貌、

更願、完養思慮、涵泳義理、他日自當條暢、

完養思慮とは、心をしるて用ひずして、完くし養ふぞ、敬を持して、存養せよとなり、これ苦心極力に對していへり、涵泳義理とは、涵は水にひたす、泳は水をおくゝるなり、義理を以て、心を漸々にひたし、いれよとぞ、これ寛裕温厚の意をいへり、他日は、後日なり、條とは、ふさがれる處の、あやすむわかるゝ義なり、暢とは、くゞもれる處をのびゆく義なり、これ涵養久き後に、明睿自然に生ずる效をいへり、

○欲知得與不得、於心氣上驗之、

道理を眞にさとり得たると、いまだ得ざるとは、心神氣象の上につきて、自こころみるべしと、

思慮有得、中心悅豫、沛然有裕者、實得也、

悅豫は、よろこぶなり、沛然は、雨水の多き貌なり、道理を思ひ得ることある時に、心中よろこばしく、沛然とうるほひゆたかなる、おぼえある者は、これ眞實に得たるなり、

思慮有得、心氣勞耗者、實未得也、強揣度耳、

思ひ得ることありといへども、心氣勞れ耗りて、なやましき者は、實にはいまだ得ず、只これしりて揣り度れるなり、

嘗有人言、比因學道、思慮心虛、

曰、人血氣固有虛實、疾病之來、

聖賢所不免、

もと血氣の虚よりして、病を生ずることは、たれもまぬかれぬ所なり、

然未聞、自古聖賢、因學而致心疾者、

義理を以て、優柔厭厭に、ひたし養へば、心氣清みて、うるほふ者にこそはあれ、學問によりて、心虚の疾を致すこと、古來いまだそのためしをきかずと、

○今日雜信鬼怪異說者、只是不先燭理、

今日は、今時なり、鬼怪とは、鬼物のなすわざにて、怪したることあるを云、異說も、常に異なる、あやしき説を云、此等のことを、心にとり雜へて信すること、智くらくして、まづ道理をてらすことなき故なり、

若於事上一一理會、則有甚盡期、

氣象迥別、

規模とは、地のとりまはしを云、意味はこころあり、氣象は、氣勢なり、論語に、孔門の諸子、仁の境界に至ること、或は日に一たび至り、或は月に一たび至る、只顔子のみ一たび仁に至れば、三月これに違はず、これ久うして息ざるなり、此兩様、同く仁の域に至るを以て、その見る所の地どりは、ほゞ相似たりといへども、その氣味の淺深厚薄は、はるかにことなる所あるなり、

須心潛默識、玩索久之、庶幾自得、

日月に至ると、三月違はざるとの、意味氣象を、心ひそまりて、黙してわき識るべし、玩び索ること久くは、何とぞをのづから會得せらるべしとなり、

學者不學聖人、則已、欲學之、須熟玩味、聖人之氣象、不可只於名上理會、如此、只是講論文、字、

須只於學上理會、

此理會は、工夫を以て云、もし不審なる事につきて、一々に理會して、其理を明さんとせば、天下の萬變きはまりなき故に、なんぞ盡期あらんや、

只學問講習の上につきて、理會すべしと、蓋し道理の大槩、すでに明なることを得れば、奇怪の説、きはめざれども、をのづからほどけて、疑なし、もしなをいまだとけがたきことありとも、道理の本を信するによりて、これに惑はざるゝことなきなり、

○學原於思、

人の心は、思ふを以て用とす、心もと萬理を具ふれども、思ふにあらざれば、ひらけず、この故に、學んで理を明にすることは、只善く思ふに本づくなり、されども此思ふと云は、心を義理に涵し厭しめて、忘るゝことなきを云、これによりて、明容をのづから生ずるなり、心力をつくして、しりて求ることを云にあらす、

○所謂日月至焉、與久而不息者、所見規模雖略相似、其意味

云意は、只上に云ことのみにあらず、凡そ學者もし聖人を學びずば學びざるにて、やむばかりなり、實にこれを學びまく欲せば、聖人の言語行事につきて、つらくその氣象を、玩び味はふべし、只その言行の題目の、名義の上につきて、理會すべからず、名義を明せんとのみ求るは、只これ文字を講論するの學にして、聖人を學ぶの方にあらずと、

○問忠信進德之事、固可勉強、然致知甚難、

忠信進德の義前章に見えたり、此問ひの意力行のことは、勉め強めてもなすべし、致知の工夫は、力にまかせざるによりて、甚かたしとなり、

伊川先生曰、學者固當勉強、然須是知了方行得、

力行のこと、勿論勉強すべし、然れども、道理を知り了りて後にこそ、方に行ひ得らるべけれどなり、
若不知、只是觀却堯學他行事、

無堯許多聰明睿知、怎生得如他、動容周旋中禮、

觀却とは、うかゞひ見をはりてと云義なり、他とは、かれと云が如し、即堯をさし云、聰は耳とし、明は、目あきらかなり、睿は、通せずと云ことなし、知は、照らすと云ことなし、皆知り至れることを云、動容周旋中禮とは、動きはたらく容の、周り旋る曲折の處まで、をのづから禮節にあたるぞ、これ行の熟せることを云、

如子所言、是篤信而固守之、非固有之也、

子が勉強と云は、只これその知る所をあつく信じて、かたく守ると云者なり、もとより己に有る所の徳を、自然に行ひ出せるにあらずと、
未致知、便欲誠意、是躡等也、
誠意とは、忠信の行にあて、云、これ大學の次第に、たかへることを云、

勉強行者、安能持久、

力にまかせてすることは、久き後に、必をこたるとなり、

除非燭理明、自然樂循理、

勉強することをまたすと、なり、

性本善、循理而行、是順理、事本亦不難、但爲人不知、旋安排、着便道難也、

旋とは、をひくと云が如し、着は、つけ字なり、人の性もと善なるが故に、理に循ひて行ふは、これ物のすぢめに順ひて、さかはざることなるによりて、もと難きことにあらず、只人まづ理を知らずして事にのみて、をひくに安排して、その間にあはせんとするによりて、難きことといひて、これを勉強するとな

知有、多少般、數、然有、深淺、

般とは、様と云が如し、凡そ道理を知ると云に、又そこばくの様子の數ありて、その深淺はなはだことなりと、
學者須是眞知、纔知得是、便泰然行將去也、

學者の知を致すことは、必眞實に知るべし、すでに眞知なる時は、則わづかに是と見ることを、泰然としてゆたかに行ひもてゆきて、すこしもはかりなやむことなし、

某年二十時、解釋經義、與今無異、然思今日、覺得意味、與少時自別、

某とは、程子自頤と稱せられたるを、語を記す者、名をいみて、某と云なり、經書の文義をほどこことは、今と二十歳の時と、かはらねども、今思へば、今日はその意味を覺り得るとふかくして、わかゝりし時とおのづからことなりと、これ致知の工夫は、只文義を

明すばかりにあらず、其功つもりて後に、真知の效あることを示めせり、

○凡一物上有一理、須是窮致其理、

物とは、事をおかねて云、凡そ一物あれば、必その上に各一理あり、學者ふるゝ處に隨ひて、其理をきはめ致すべしとぞ、

窮理亦多端、

その端多しと、

或讀書講明義理、或論古今人物、別其是非、

人物とは、只人がらを云、

或應接事物、而處其當、

事に應じ、物に接する時に、その理に當ると當らざるとをはかりて、これを行ふ、

皆窮理也、

上に云こと、みな窮理の工夫なりと、中にも書をよみて、義理を講ずること、其功尤大いにして廣し、

○或問格物須物物格之、還只

格一物、而萬理皆知、

格物とは、事物の理にきはめ格りて、きはめつくさずと云ことなきことを云、

曰怎得便會貫通、

なんぞ一物に格りて、即萬理に貫通することを會得せんとなり、

若只格一物、便通衆理、雖顏子亦不敢如此道、

一物に格りて、即衆の理に通ずと云ことは、顔子の明敏といふとも、亦かくの如くは、えいはじとなり、

須是今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然自有貫

通處、

一件とは一箇條の義なり、毎日一理をきはめて、積り習ること多き後には、必しも天下の理をきはめつくさけれども、脱然とぬけいでたるやうになる時節至りて、自然に衆理貫通する處あるなり、

又曰、所務於窮理者、非道盡窮、

了天下萬物之理、又不道是窮、

得一理、便到、只要積累多後、自

然見去、

積累とは、つもりかさなるぞ、見去とは、見得て貫通してもてゆくなり、

○思曰、睿思慮久後、睿自然生、

思曰、睿とは、書の洪範の文なり、思ふにつきたる徳を睿と云、視曰、明、聽曰、聰の類なり、睿とは、思ふ所の通せずと云ことなきことを云、凡そ人格物して、道理を思慮すること久き後に、明睿自然に生ずるなり、

若於一事上思未得、且別換一事、

事思之、不可專守着這一事、

理をきはむる間に、もし一事の上をいいていまだ思ひ得ずば、しばらく其事をさしをき、別に一事をかへて思ふべし、これ窮理の活法なり、

蓋人之知識、於這裏蔽着、雖強

思亦不通也、

人心の知識、靈なりといへども、思ひて得ざることは、知識這の裏にをいて、蔽はるゝことある故なり、此時は、強て思ふといへども亦通せず、しばらく別事にかへて思ふ時は、他日餘のことによりて、亦かの理にも通ずることを得るなり、

○問人有志於學、然知識蔽固、

力量不至、則如之何、

知識蔽はれ固まりて、理にくらく、力量志す所に至らずして、行ふことのかたきは、いかすべきと、

日、只是致知、若智識明、則力量自進、

知を致して、知識明になれば、力量も、まして、をのづから進み出る故に、行ふことやすきなり、

○問、觀物察己、還因見物、反求諸身、否、

問者の意、大學の致知在格物と云を、物の理を見て、己が知を察すと云にとる説をとふ、己は本にして、物は未なるに、これ還て物の理を見るによりて、則身に反り求めて、其知を致すやと、

日、不必如此說、物我一理、纔明彼、即曉此、此合内外之道也、

理は物にあるも、我にあるも、本一貫す、よりにてわづかに彼にある理をきはむれば、即此にある理をさとりて、其知即明なり、彼此時かはらず、處もことならず、これ内にして心、外にして物、その理を合せた

る道なりと、これ中庸の文なれども、蓋し其本旨にはあらず、

又問、致知先求之四端、如何、

四端とは孟子に惻隱羞惡辭讓是非を、仁義禮智の端と云なり、まづここにをいて、知を致すことを求めば、いかゞあらんと、

日、求之情性固是切於身、

四端は情、仁義禮智は性なり、

然一草一木皆有理、須是察、

天下の理、精粗大小となく、すべて一貫す、一草一木の理も、五常五倫の理も、かれこれ相てらして、通するが故なり、

又日、自一身之中、以至萬物之

理、但理會得多相次、自然豁然

有覺處、

相次とは、つゞきてたえざるなり、豁然とは、ほがら

かに、ひらくる義なり、覺は、悟るなり、

○思日、睿、睿作聖、

これ洪範の全文なり、思ふの徳を睿と云、明睿の至りは、聖人徳なす、

致思如掘井、初有渾水、久後稍引動、得清者出來、

此より下は、皆上文の意を發明す、これはまづたとへをあぐ、渾水は、にこりみづなり、稍とは、漸々の義なり、

人思慮始、皆溷濁、久自明快、

溷濁は、みなにごるなり、明快とは、水のすみて、すきとをりこゝろよきが如くなるを云、

○問、如何是近思、

論語の子夏の語をとふ、

日、以類而推、

理をきはむるの方、わがすでに知りたる所より、近

類したる所の者を以て、思ひ得て、それより又次第に近きより推し去りて、これを思ふを、近く思ふと云なり、かくの如くなれば、その思ふ所、條理分明にして、ゆくさきの路、通じやすし、もし等をこえて、遠く思へば、徒に心を苦しめて、ついに得ることなし、

○學者先要、會疑、

それ學は、疑をとくにあらざればすゝまず、されども初學はいまだ疑のある處を知らず、よりにて學者は、まづ疑を生ずるやうにせんことを求めよとなり、朱子の云く、書はじめよむ時は、いまだ疑あることを知らず、其次には、漸々に疑あり、又其次には、節々疑あり、此一番を過ぎをはりて後に、疑漸々にとく、以て融會貫通するに至れば、すべて疑ふべきことなし、方に始めてこれ學なり、

○横渠先生答范巽之曰、所訪物、怪神姦、此非難語、顧語未必信耳、

物怪とは、常にかはりて、怪き物あるを云、神姦とは、姦はかたましきぞ、鬼神のばけて、人をたぶらかす類を云、

孟子所論知性知天、

性は、心に具はる所の理、天は、又理の由りて出る所なり、すでに性を知る時は、則亦天を知るなり、

學至於知天、則物所從出、當源

源自見、

學識すでに天を知るに至れば、此物いかやうの理によりて出来ること云こと、源々と水の流れて出るやうに、をのづから明に見ゆるぞ、

知所從出、則物之當有、當無、莫

不心諭、亦不待語而後知、

妖怪のこと、いまだ道理の本を知らざる時は、人其故を語れども信せず、すでにこれを知る時は、人の語るをまたずして、その有無を知るなり、

諸公所論、但守之不、不爲異端所劫、進進不已、則物怪不須辨、異端不必攻、不踰莽年、吾道勝矣、

諸公とは、門人をさす、所論とは、日ごろいひなる、常にして正き説を云、莽年とは、とし一めぐりなり、常論を信じ守りて、とり失はず、異端の説に、ひきまば、れず、いよくわが學に進み進んでやまずば、自然に智明になりて、物怪のこと、辨明することたまたず、異端の説、攻めきはむるに及ばず、一年をこえずして、わが道かれに勝て、まどはさるることなからんとぞ、

若欲委之無窮、付之以不可知、

則學爲疑、撓、智爲物、昏、交

來無間、卒無以自存、而溺於怪

妄必矣、

說、

任とは、荷と云義なり、了悟は、あきらめさとするなり、聖門の學者は、仁を以て己が任荷として、人の力をたのまず、自實にこれに體せんことを期す、この故に、師説を聞くに、其意をあからさまに知るを以て、知れりとせず、必了悟するを以て、聞き得たりとす、よりにて子貢此説あり、然れども、これは集註の意とことなり、

○義理之學、亦須深沈、方有造、

非淺易輕浮之可得也、

義理の學、重々きはまりなし、深く沈みたる工夫を以て、方にその蘊奥に至ることあるべし、淺く易り、軽く浮べる心を以て、得べきことにあらずとなり、

○學不能推究事理、只是心麤、

心を用ることあらくして、いまだ精しからざる所あるなり、

至如顏子未至於聖人處、猶是

もし又その然る所以をきはめずして、只これを天下の理窮りなき處に、委ねをき、測り知られざることに、付けやりて、うちすぎなまく欲せば、其學疑ひにひき撓まされ、其智物におほひくらまされ、邪説かたこなたより、交來りてひまなく、ついにその守る所の者を、自たもち存するにたえずして、怪妄のことに、まよひおぼれんこと必せり、

○子貢謂夫子之言性與天道、

不可得而聞、

性とは、人心うくる所の天理、天とは、天理自然の本體なり、不可得而聞とは、其理精微にして、きゝえがたきことをいへり、

既言夫子之言、則是居常語之

矣、

居常とは、平居常旦と云義なり、

聖門學者、以仁爲己任、不以

知爲得、必以了悟爲聞、因有是

心麤

顔子の學といへども、いまだ聖人に至らざることは、其心なをあらき處ある故なり、よりにてその仁にをけること、三月を歴れば、一たび間斷あり、聖人の純にしてやまざるが如くなること、あははざるなり、

○博學於文者、只要得習坎心、蓋人經歷險阻艱難、然後其心亨通、

習坎心亨とは、易坎卦の詞なり、習は、かさなるぞ、坎は險難の義にとり、此卦上下みな坎なる故に、習坎と云、經歷は、みなふるなり、凡そ人險阻艱難を歴て、練磨する時は、則その心熟して、通達することを得るなり、よりにて孔門の教、博く文を學ぶことも、そこばくの疑難を経て、これをほとくの後に、はじめて其心とをりて、さることあるなり、

○義理有疑、則濯去舊見、以來新意、

義理をきはむるに、疑はしき處ありて、通じがたくば、しばらく舊見いれたる意を濯去て、別に新き意の出来るやうにせよとなり、

心中有所開、即便剗記、不思則還塞之矣、

剗記は、みなしるすなり、心中ひらけて、發明する所あらば、即時にこれをしるしとめよ、かくの如くすれば、いよくすむ所あり、もしこれを思はざれば、則又ふさがりて、其趣を忘るなり、これ孟子に、山のかよひちを、人これに由りて往來すれば、則ちまちに路となりてかくれなし、もししばらくもこれに由らざれば、則又茅おひてこれをふさぐと、云義をとりていへり、

更須得朋友之助、一日之間、意思差別、須日日如此講論、久則自覺進也、

自己の工夫のみならず、更に又朋友と共に講習して、

其助けを得べし、一日の間にも、そのこと、以前とことなることあらん、日々にいよくかくの如くに講論せば、久うして後に、其學をのづから進むことを覺えんとなり、

○凡致思、到說不得處、始復審思明辨、乃爲善學也、

凡そ理をきはめて、思を致す間に、詞の説き得通らざる處に到らば、すてをかすして、これよりはじめて、又審に思ひ、明に辨る工夫を用ふべし、乃これを善く學ぶ者とす、

若告子、則到說不得處、遂已更不復求、

告子が云く、言に得ずば、心に求ることなかれと、かくの如きは、則これとき得ざる處に到りて、ついにやめて、又通せんことを求めず、よりにて孟子これををしり、○此より以上は、すべて致知の方を論ず、此より以下は、專書を讀の法を示す、

○伊川先生曰、凡看文字、先須曉其文義、然後可求其意、

文字とは、經書の文字を云、未有文義不曉、而見意者也、

○學者要自得、

道理を自然に得て、眞實に知ることを云、六經浩渺、乍來難盡、曉、

易書詩春秋禮樂を六經とす、浩渺とは、水の大いなる貌、その載する所の事理廣大なることを云、乍來は、たちまちなる義なり、

且見得路徑後、各自立得一箇門庭、歸而求之可矣、

を知る、詩は、古人の歌謠を誦して、人情を正すの道とすることを知る、これ路徑を見得るなり、然して後書の二典三謨は、唐虞の盛世、君臣の徳業を見、夏商周の三書は、三代の治亂の故を見ることとす、詩の二南國風は、周の王化列國の俗の美惡を見、二雅は朝廷の政務の得失を見、三頌は、宗廟の祭に、君徳をほむることとす、これ各自に門庭を立るなり、餘經も皆かくの如し、これまでは、みな師友にうけて知る所なり、其上の詳細なることは、家に歸りて、自求めよとなり、

○凡解文字、但易其心、自見理、理只是人理、甚分明、如一條平坦底道路、詩曰、周道如砥、其直如矢、此之謂也、

平坦は、たいらかに安きなり、詩は、小雅大東の篇、周道とは、周にゆく道なり、如砥と云も、たいらかなることといへり、それ經義の理は、只これ人にある理にして、本甚分明なり、一すぢの平安なる道路の如し、

人もしさかしく、まがれる意を以て求めば、それこれを得べけんや、

○或曰、聖人之言、恐不可以淺近看他、曰、聖人之言、自有近處、自有深遠處、如近處、怎生強要鑿教深遠得、揚子曰、聖人之言遠如天、賢人言近如地、願欲改之曰、聖人之言、其遠如天、其近如地、

揚子は、漢の揚雄なり、法言を著す、
○學者不泥文義者、又全背却遠去、

全く文義に背き却りて本意に遠ざかりゆくぞ、
理會文義者、又滯泥不通、

文義にのみ工夫を用る者は、亦滯り泥みて、大意に通せざるなり、

如子濯孺子爲將之事、孟子只取其不背師之意、人須就上面理會事、君之道如何也、

此より下は、みな文義になづむ弊をいへり、子濯孺子は、鄭人、射の上手なり、鄭より孺子を大將として、衛を侵す、衛には庾公之斯をして、これをふせがしむ、之斯は、孺子が孫弟子にて、これも射を善くす、衛人かちて、孺子を追ふ時に、孺子疾おこりて、弓をえひかず、之斯をひつき、このよしをきゝて、孺子をいころすにしのびず、されども、今日の事は、君事なり、すてがたしといひて、鏃をたゞきすて、四矢いかけて後にかへれり、

又如萬章問舜完廩浚井事、孟子只答他大意、人須要理會浚井如何出得來、完廩又怎生下

得來、

舜の父瞽瞍、後の妻にまどひ、其子象と共に舜を殺さんとす、或時舜を廩にのぼせて、修理せしめ、楛をひきて火をかく、舜笠二つをもちて、とびをり玉ふ、又井のそこをさらへしめ、上より土をいれてうづむ、舜ぬけあなをして出玉ふ、象これを知らず、舜の所へゆきて、あらゆる物を、むばひとらんとす、舜のいますを見て羞たり、舜いからずして、反てこれを親愛し玉ふ、萬章此事をあげて、舜いつはりて愛し玉ふかと問ひければ、孟子只仁人その弟にをいて、怒をかくさず、怨みをとめざる、大意ばかりを答へて、其事の有無を辨せず、

若此之學、徒費心力、

○凡觀書、不可以相類泥其義、不爾、則字字相梗、當觀其文勢上下之意、

これ書を見るに、かれこれ其詞の相似たるを以て、文

義になづみ、しゐて其意を一つにとらざるべきことをいへり、

如充實之謂美、與詩之美不同、

充實之謂美も、孟子の語なり、其徳内にみちみてるを、美人と稱す、詩に人を美と云は、大抵その容貌威儀のうつくしきことを云、或は徳のうるはしきことを云ことありといへども、亦孟子の意と同じからず、

○問瑩中嘗愛文中子或問學

易子曰終日乾乾可也、

瑩中姓は陳名は確、瑩中は其字なり、忠肅と諡す、宋人なり、文中子は、隋の王通が著はせる書の名、子とは、其門人師を稱するの詞、云意は、人よく終日乾々の語に體せば、易道の大要を得べしとなり、

此語最盡、文王所以聖、亦只是箇不已、

こゝ程子に問ふ者、瑩中が文中子の語を愛したる意を述ていへり、即中庸に天道至誠にして、息むことな

し、文王の徳も、亦純にして已ますと云を、とりていへるなり、

先生曰、凡說經義、如只管節節推上去、可知是盡、

凡そ經義をとくこと、かくの如くに、其中の要語をとりにて、ひたすら節々に、其理を高くをしあげてゆかば、これにて一經の大意をもつくさんと、知らるゝなり、

夫終日乾乾、未盡得易、據此一句、只做得九三、使

若謂乾乾是不已、不已又是道、

漸漸推去、自然是盡、只是理不如此、

これ終日乾々の語、實はいまだ易の義をつくし得ず、此一句のまゝに據れば、只これ乾の九三となして、使ひ用るばかりなり、

先生曰、固是道無窮、然怎生一箇無窮、便道了得他、

なんぞ一つの無窮と云ばかりにて、即かの道體を、いひ了り得んやと、朱子の云く、須くこれ無窮なる所以を見て、始めて得べし、

○今人不會讀書、

此章も亦論語の文をあげて、書をよむの法を論ず、會は、會得なり、

如誦詩三百、授之以政、不達、使於四方、不能專對、雖多亦奚以爲、

詩は人情に本づき、物理にあまねく、風俗の盛衰、政治の得失を見るべし、又其言溫厚和平にして、人を諷じさすによし、然るによく三百篇の詩を誦する者に、政を授くれども、これに達せず、四方に使用する時にも、人のたすけをからずして、獨うけこたへするこ

もし乾々は、これ健にしてやまざるなり、やまざる所以の者は、又これ道なりといひて、漸々におしあげゆかば、自然に一經の義も、これ盡きなん、然れども、只これ高きを好み、約なるを求るの病にして、經を治るの道理は、かくの如くならずとなり、

○子在川上曰、逝者如斯夫、言

道之體如此、這裏須是自見得、

論語に、夫子川のほとりに在して、水の流るを見ての玉はく、逝く者はかくの如きか、晝夜をすてすと、云意は、道の體たらく、かくの如しとなり、這の水流の裏につきて、自道體を見得すべしとなり、蓋し天地の運化、ゆく者過ぐれば、來る者續ぐ、一息の間も、やむことのないこと、水流の如し、乃これ道體の本然なり、聖人これを學者に示して、亦その時々省察して、毫髪も間斷なからまく欲してなり、

張繹曰、此便是無窮、

張繹字は子叔、程子の門人なり、云意は、これ即道の窮りなき處なりと、

とあたはずば、三百の詩篇多しと云とも、亦何の用をかなさんとたり、

須是未讀詩時、不達於政、不能專對、既讀詩後、便達於政、能專對四方、始是讀詩、

こゝに至りて後に、始めてこれを詩をよむ者とするなり、
人而不爲周南召南、其猶正牆面、

周南召南の云所、みな身を修め、家を齋ることなり、人として、この身に近切なることを、學び得ずば、正むきに牆にむかひて立るが如くに、至りて近き處にても、即一物も見所なく、一步もゆかれまじとなり、

須是未讀詩時、如面牆、到讀了後、便不面牆、方是有驗、

はじめこれ二南をよみ得たる、驗ありとぞ、
大抵讀書、只此便是法、

此とは、上文をさす、凡そ書をよむの法、こゝに云所、即これなりとぞ、

如讀論語、舊時未讀、是這箇人、及讀了後來、又只是這箇人、便是不曾讀也、

舊時は、もと、云義なり、這箇人とは、只この人と云が如し、

○凡看文字、如七年一世百年之事、皆當思其如何作爲、乃有益、

論語に子曰、善人教民七年、亦可以即戎矣、又曰、如有王者、必世而後仁、又曰、善人爲邦百年、亦可

約とは、簡要の處を云、書肆とは、肆はいちぐらなり、書をうるたなを云、
願緣少時讀書、貪多、如今多忘了、須是將聖人言語、玩味、入心記着、然後力去、行之、自有所得、

玩味は、もてあふびあちはふぞ、記着は、おぼゆるぞ、玩味によりて忘れず、又これを力め行ふによりて、自得して、始めてわが物となるなり、○これより以上は、すべて書をよむの法を論ず、これより以下は、讀書の法をわけ、并にこれをよむ次第を論ずるなり、

○初學入德之門、無如大學、

入德之門とは、徳を成す道に、入る所の門なり、これ學者まづ大學をよむべきことをいへり、朱子の云く、大學は、規模大いなりといへども、然首尾かねそなはりて、綱領尋ねべく、節目分明にして、工夫序あり、學者の日用に切なるにあらずと云ことなし、
其他莫如語孟、

云、即戎とは、兵革の事に従ふぞ、仁とは、民仁に化するぞ、勝殘とは、ことごとく殘暴の人を化して、惡をせざらしむるぞ、去殺とは、民善に化して、死刑を用ひざるぞ、かくの如きの類、みな其年紀の内に、いかやうに作爲してなることと思ひみて、乃益あり、只聖賢なれば、かくの如くなることと、見するばかりにては、益なしとぞ、

○凡解經、不同無害、但緊要處、不可不同爾、

凡そ經義をとくに、未々の同じからざるは害なし、されども緊要にしてかなめとする處、人々同じからざれば、其間に聖賢の本意に背く所ありて、道を害多し、

○惇初到、問爲學之方、先生曰、公要知爲學、須是讀書、書不必多看、要知其約、多看而不知其約、書肆耳、

其他の書に、學者の急務としてよむべきは、又論語孟子にしく者なしと、其義は下の章々に見えたり、

○學者先須讀論孟、窮得語孟、自有要約處、以此觀他經、甚省力、

論孟の書をよむ時は、その得る所の道理、簡要にして、約まりたる處ある故に、これを以て他の經書をよめば、みな其義に通じやすくして、力を用ること、甚はぶけるなり、

論孟如丈尺權衡相似、以此去量度事物、自然見得長短輕重、

丈尺は、長短をはかるさほ、權衡は、輕重をはかる秤なり、量度は、みなはかるなり、論孟の書にのする所、其理尤も學者の身心日用に切なるを以て、これをよむ者、只他經のよみやすきのみならず、凡そ事物の理にをいても、亦をのづから分明なる故に、みなその宜き處を見得て、これを處置することやすし、なを權度

を以て、物をはかるが如きぞ、

○讀論語者、但將諸弟子問處、便作己問、將聖人答處、便作今日耳聞、自然有得、

今日耳聞とは、今日わが耳にきゝ入るゝ所なり、論語を深く心に入れてよむこと、ここに云所の如くならば、自然の其趣を會得することあらんとぞ、

若能於論孟中、深求玩味、將來涵養成、甚生氣質、

將來は、まさに來らんとするなり、ゆくさきのことを云、學者よく此二書の中にをいて、深く求めて、玩びそむ故を以て、後來やうやくに、涵養し成して、甚よき氣質を生せんとなり、朱子も書をよむことを、一擧兩得といへり、讀書はもと致知のことなれども、よくよむ者は、兼て涵養の功をも得る故に、一を擧げて、兩つながら得るなり、

○凡看語孟、且須熟讀玩味、將聖人之言語、切己、不可只作一場話說、

熟讀とは、熟は生しきに對して云、いくたびも、ふかくよみ入ることを云なり、切己とは、わが身にひしとつけて、すさまのなきことを云、聖人の言語を以て、即わが身のこととなして、親切に體認せよとなり、一場の話説とは、一座の物がたりと云義なり、人只看得此二書切己、終身儘多也、

人只此二書の道理を、己に切によみ得たらば、一生これを受用すとも、なをつきすして、餘あらんとなり、

○論語有讀了後、全無事者、論語をよみをはりて後に、全く何の得る所の事なき者を云、即曾てよまざるが如くなる者なり、有讀了後、其中得一兩句喜者、

其心此一兩句の理にひらけて、これに通ずる故に喜ぶ、此喜びによりて、やうやくにすゝむなり、有讀了後、知好之者、其意味を知る故に、これを好みて、やむことあたはず、有讀了後、不知手之舞之、足之蹈之者、

これ樂記の文を引て、好むことの深くして、これを樂むに至る者のことを云、その心に得る所の道理を、手に舞ひ、足に蹈みて、自をばえずとなり、

○學者當以論語孟子爲本、まづ此二書をよく治めて、其義に通ずへしとなり、論語孟子既治、則六經可不治而明矣、

六經はくはしく治めざれば共、其義明にしてやすしとなり、

讀書者當觀聖人所以作經之意、與聖人所以用心、

聖人此經述作の大意、何のためぞと、又此經に心を用ひて、人に示さるゝ所の旨趣とを見るべし、

與聖人所以至聖人、而吾之所、以未至者、所以未得者、

又聖人其徳を成して、聖人に至る所の者と、わがいまだ聖人に至らず、いまだ化して聖人とならざる所の者とを見るべしと、以上はみな文義の外に、見とるべきことなり、

句句而求之、晝誦而味之、中夜而思之、

誦すとは、そらによむぞ、中夜は、夜中なり、句々にして求るは、察することのつまびらかなるぞ、晝味ひ夜思ふは、思ふことの熟するぞ、

平其心、易其氣、闕其疑、則聖人

の意味をのづから心中にみち足るなり、

學者須是玩味、若以語言解着、意便不足、

學者此二書にをいて、すべからく心を以て、その旨趣を玩び味ふべし、只詞を以て、その文義を解釋するばかりにては、其意たらぬなり、

某始作二書文字、既而思之又、似剩、

文字とは、注観の文字を云、蓋し此二書、只本文を熟讀すれば、をのづから其意を得べし、よりにて注に注解をしかけつれども、又思ひみるに、これも餘りて、無用なるに似たりと、

只有些先儒錯會處、却待與整理過、

只すこし先儒の錯りて會得する處あれば、本意にあらざるを以て、これがために、整理理めてとをるを待

之意見矣、

其心を平かにするは、心中をむなくするなり、其氣を易らかにするは、その氣象をゆたかにするなり、これみな文義をうがちて求めざることを云、而してなを疑はしきことあれば、これをかきて、其義にしめて通ぜんとせず、かくの如くにすれば、よく聖人の意趣を見得るなり、

○讀論語孟子、而不知道、所謂雖多亦奚以爲、

論孟の書は、此道の總會にして、體用かね明に、精粗ことごとく備はる、これをよみて、道に通ぜざれば、二書文字を多くきはむといへども、只これ章句訓詁の學にして、何の用をもなさざるなり、

○論語孟子只剩讀着、便自意足、

剩は、あまるなり、二書をよみて、その文義すでに通ずとも、なをくりかへしてあまるほどよむ時は、即そ

て、然して後に明なり、よりにてこれはすべきことなるとぞ、

○問且將語孟緊要處看如何、

緊要處とは、緊は急にとりしめたる義なり、最切要なる處を云、これをえらびぬきて、くはしく見ば、いかいあるべきと、

伊川曰、固是好、然若有得、終不浹洽、

浹洽とは、物を水にひたして、内外うるほひとをることとを云、緊要の處を見て、もし道理を悟り得ることありとも、亦ついに萬理貫通することあたはず、少の水に物をひたして、浹洽せざるが如くならんぞ、

蓋吾道非如釋氏一見了、便從空寂去、

釋氏の學は、わづかに其道を見つければ、即一切をすて、虚空寂滅の境界に従ひゆく、儒者の道は、かく

の如くならず、心浹洽することありて後に、よく通ずることを得るとぞ、

○興於詩者

論語の文なり、詩の詞は、人情にいで、人を感動することやすし、よりに學者の善をこのみ、惡をにくむ本心を、ひきおこすこと、詩をよむにをいて、これを得るとなり、

吟詠情性、涵暢道德之中、而歌動之、

吟詠とは、さまよひうたふなり、歌動とは、心にねがひて、うごく義なり、詩の情性を吟詠する間に、わが心、道德の中に、涵り暢て、ねがひうごくことあらむ、これ善心を興す所なり、

有吾與點之氣象

これ論語に、諸子志を述るが中に、曾點が志す所、廣大快活にして、夫子の心を歌動することある故に、これを悦びて、吾は點にゆるさんとの玉ふことをひ

けり、人詩をよむに興起して、悦ぶ所あること、此氣象の如くなることありとぞ、

又云、興於詩是興起人善意、汪洋浩大、皆是此意、

汪洋浩大は、みな水の廣大なる貌なり、凡そ詩をよみて、人の善意を興起する、勢の盛なること、みなかくの如しとなり、

○謝顯道云、明道先生善言詩、よく詩の意をかたるぞ、

他又渾不曾章解句釋、但優游玩味、吟哦上下、便使人有得處、

優游は、ゆるくゆたかなる意、吟哦は、吟詠と同じ、上下は、音のかりめりなり、明道の詩をかたるには、すべて章ごと句ごとに、其義を解釋せず、只本文をよみて、優游に玩味し、吟哦の音かりめりて、をもしる

く、聞く人をして、自然にその旨趣を會得することあらしむと、其事下に見えたり、

瞻彼日月、悠悠我思、道之云遠、曷云能來、思之切矣、

これは邠風雄雉の篇の詞なり、婦人その夫、北狹をふせぐ軍役に、遠くい、久く歸らざるをしたひて、作れる詩なり、云意は、かの日月のゆき、を見て、悠々と久くわれ思ふ、然れども其道はるかに遠ければ、いつかそれよく歸り來んと、而してその大意を釋して云く、これ夫を思ふことの切なるぞと、

終日百爾君子、不知德行、不伎不求、何用不臧、歸于正也、

これ詩の終の章の詞、君子とは、其夫を尊びて云なり、云意は、凡そ同役の諸君子、かしこにあること久き内に、いかなる難をか犯しつらんと、心もとなく思へども、豈みな德行を知らざる人あらんや、その物にまじはる所、そこなふこともせず、むさばることもせ

ずば、何を以てか、よからぬわざあらんと、又これを釋して云く、その思ふこと切なりといへども、心はついに正きに歸すと、蓋しひとり其夫を思ふ心ふかけれども、諸君子にかけて、その皆行をつゝし、身を全うして、歸らんことをねがふ、これその正きに歸する所なり、

又曰、伯淳常談詩、並不下一字、訓詁、

伯淳は、明道の字なり、訓詁とは、字義を釋する詞なり、

有時只轉却一兩字、點掇他念、過、便教人省悟、

點掇とは、とりあぐる義なり、他とは、詩をさす、念すとは、そらによむことなり、時々只本文の一二字を、轉じかへたるまゝにて、とりあげ念誦しとをりて、聞く人をして、自かへりみて、さとらしむるなり、

又曰、古人所以貴親炙之也、

親炙とは、よき人に親づき、火にて薫べ炙らるゝやうに、化せらるゝことを云、古人賢師に親づくことを貴ぶは、これその故なりと、蓋し謝氏明道の詩の教をきゝて、直に其化をうけたることを、幸としていへるなり、

○明道先生曰、學者不可以不看詩、看詩便使人長一格價、

一格とは、一位と云が如し、詩をよむ時は、其人の品、一等すゝみて、貨物の價、一段貴くなるが如くなることを云なり、

○不以文害辭、

これ孟子の語なり、

文、文字之文、舉一字則是文、成句是辭、

云意は、文とは、文字の義にて、文章を云にあらず、蓋し一字をあげて云時は、これを文と云、字をかきねて、句となす時は、これを辭と云なりと、

詩爲解一字不行、却遷就他說、詩をよむ者、もし一字の義を解きて、説きゆかずば、他の義に遷り就きて、説き通すべしと、これ文を以て辭を害せざるなり、

如有周不顯、自是作文當如此、

これ大雅の詩の文なり、有はつけ字なり、云意は、周家の功德、豈顯ならざらんやとぞ、これその顯なることをほめてなり、詩の作文の法、かやうの處は、その句づくり、をのづからこれかくの如くなるべきぞ、もしこれを直に顯ならずとよむ時は、これ文を以て辭を害するなり、

○看書、須要見二帝三王之道、

此章は、尙書をよむの法を論ず、須要は、みな求める義なり、二帝は、堯舜、三王は、夏の禹、殷の湯、周の文武なり、

如二典、即求堯所以治民、舜所

以事君、

二典は堯典舜典なり、

○中庸之書、是孔門傳授、

傳授は、つたへさづくるなり、

成於子思孟子、

此語中庸集略には、成於子思傳孟子とあり、此義然るべし、

其書雖是雜記、更不分精粗、一

衰說了、

一衰とは、按ずるに衰は滾と同じ、ひとまろばしの義なるべし、其書子思聖言自言を雜へ記せども、全篇の趣、理の精き粗きをわかず、うち合せて、一滾に説けり、

今人語道、多說高便遺却卑說、

本便遺却末、

高きと本とを説きて、即卑きと末とを遺れ却るは、こ

れ老佛の説にして、中庸の道にあらず、

○伊川先生易傳序曰、易、變易也、隨時變易、以從道也、

此段まづ易の名義を釋す、易とは、變易の義なり、聖人卦爻を立て、辭を繫て、人をして、時の變易を見て、その當然の理に従はしめんために作れり、伏羲はじめて、卦爻を畫し、文王周公これに辭を繫け玉ふ、これ今の周易なり、

其爲書也、廣大悉備、

これより下は、易の書たることを贊美す、凡そ序中に引く所の本文、みな繫辭傳に出たり、此書の天下の事理にをける、廣大にして包ねずと云ことなく、悉備りて有らずと云ことなし、

將以順性命之理、通幽明之故、盡事物之情、而示開物成務之道也、

性命の理とは、天地性命を賦して、萬物を造化するの道理を云、幽明とは、幽はかすか、明はあきらかなり、死生鬼神の類をさす、故とは、その然る所以の理なり、事物之情とは、物の情、事の宜き處を云、開物とは、人のいまだ知らざる所を、始めて開發することを云、成務とは、人の務めて爲まく欲する所を、全く遂げ成すことを云、

聖人之憂患 後世可謂至矣

此段上文をすべむすぶ、云意は、聖人をして、道に従はしむることの、あまねく又つくせること、かくの如くなるは、これその後世の人の、能ふまじきを、憂へ慮ることの、深く至れるにあらずやとなり、

去古雖遠 遺經尚存

此より下は、傳作の意を説く、古を去ること遠くして、經典多くほろびたれども、此經は幸に遺りて、今なを存す、

然而前儒失意 以傳言後學誦言而忘味 自秦而下 蓋無傳矣

然るに前儒失意、以傳言後學誦言、而忘味、自秦而下、蓋無傳矣、

を用る者、これを以てものいはんとする時は、則其辭を尙びて、これを用ふ、下文の以の字、尙の字、其義みなこれに同じ、

以動者尙其變

動くとは、凡そ運動作爲することをすべて云、みな其理の變易を見て、これに従ふ、

以制器者尙其象

制器とは、器物を作ることをして、主として、凡そ事に隨ひて、其用をたす方を設ることを兼て云、易の卦爻、みな物に象る所あり、器を制する者、各その宜き所を見て、これをと用ふ、

以卜筮者尙其占

凡そ疑はしきことある時は、占ひてこれを決す、龜を灼くと云、著を擲を筮と云、易は著筮の法にして、龜卜には用ひざれども、文の便に、帯びて云なり、蓋し易の辭は、もと占のために立つ、よりにて筮する者は、その占辭に頼る、

吉凶消長之理 進退存亡之道

前代の儒者、その本意をとり失ひて、これを説く所の言をかきつたへ、後來の學者、そのつたはれる言のみを誦して、本來の意味を忘る、秦よりしてこのかた、易の本旨、たえて傳はることなし、蓋とは、疑ふ詞なり、

予生千載之後 悼斯文之湮晦

將俾後人沿流而求源 此傳所以作也

載は、年なり、斯文とは、泛く文道を云詞なれども、其意は易を主とす、湮晦は、しづみくらむなり、流とは、易の辭をさす、源とは、易の意をさす、

易有聖人之道四焉

此より下は、易の用をなすこと大いにして、みな卦と辭に具はることを云、聖人の道、その精微易にあらはれて、其端四つあり、

以言者尙其辭

易の辭は、その理精くして、人情に切なり、よりにて易

備於辭

吉凶は、得失なり、消長は、きゆるとますとなり、吉凶にみな消長あり、消長によりて、吉凶をなす、進退は、すすみしりぞくなり、存亡は、在るとはるぶるとなり、進退に、みな存亡あり、進退によりて、存亡をなす、吉凶はなを泛く云、存亡は吉凶の極れるなり、この兩端のこと、天理人事に、共にこれありて、人事を主とす、而して其道理、みな易の辭にそなはれり、

推辭考卦 可以知變象與占在 其中矣

易の用四つありといへども、動くを以て主とす、言も亦動に屬す、今易を用る者、辭の意を推し求めて、卦の象を考へ見ば、動くに尙ぶの變を知るべし、而して象は卦につき、占は辭につくを以て、亦みな變を求る中にあるなり、

君子居則觀其象 而玩其辭

此より下二段は、又繫辭の文を引き、君子易を學んで、これを用る大槩を論じて、そのこれを學び用るこ

とも、亦みな辭に頼ることを見る、蓋し君子事なくして居る時は、其象を觀察し、其辭を玩味して、事を處するの當否を考ふ、上の言動制器のこと、皆此中にあり

動則觀其變、而玩其占、

此動は、上の居の字に對して、只事ありて筮占する時を云なり、事ある時は、則筮して其時の變を見て、其占の辭を遊び、値ふ所の吉凶を考ふ、

得於辭、不達其意者有矣、未有、

不得辭、而能通其意者也、

易の辭は、もと卦爻の象によりて、これを繋ぐといへども、すでに其辭ある時は、則象と變占と、皆其中に寓す、よりに亦辭を以て、上文をすべて云く、それ辭の文義を得て、いまだその意味に達せざる者はあらん、いまだ辭に得ずしてよく其意に達する者は、あるまじきなり、よく其意を得る時は、象と變占との義は、みな其内にあり、

至微者、理也、至著者、象也、體用

一源、顯微無間、觀會通、以行其典禮、則辭無所不備、

理は形なき故に、至りて微なる者なり、此理の事物にあらはる象は、たれも見ることなる故に、至りて著なる者なり、理は微にして體なり、象は顯にして用なり、理より見れば、象其中にあり、象よりして見れば、理其中にあり、體用その源を一つにして、顯微の間なき者なり、會は、理のあつまれる處、通は、其理の行はる處、典禮とは、常法と云が如し、今一事を行ふ時、衆理の會れる間に、をのづから通りて行はる、當然の處あり、これを會通と云、その通する所、即常に行はる、道なるが故に、典禮と云なり、これ云意は、天下の變無窮にして、紛亂すといへども、體用顯微、もと混一の者なるによりて、則事に隨ひ、理の會通を見て、以てその常法とする所、行はるべし、而してかくの如くに、明めがたく、處しがたきことを、能する所以の道も、亦易の辭に、そなはらずと云ことなしとなり、

故善學者、求言必自近、易於近

者、非知言者也、

よくこゝろえて學ぶ者は、經を解き、道を語るの説を求ること、必近き處よりこれを説く、もし近きをあなどりて、遠きに求るは、これ高妙の説を好む者なり、説を立てるの道を知る者にあらずと、これは泛く云詞なり、易にをいては、辭を近しとして、意を遠しとす、予所傳者、辭也、由辭以得意、則在在乎人焉、

○伊川先生答張閔中書曰、

張閔中は、程子の門人なり、易傳未傳、自量精力未衰、尙覬有少進爾、

易にをいて、見る處、なを少き進むことあらんをまつ故に、傳義をいまだ人につたへずとなり、

來書云、易之義本起於數、非也、

義とは、辭の義をさす、數とは、一二に始まり、五に會し、十に成るの類を云、

有理而後有象、有象而後有數、

按ずるに、聖人まづ陰陽動靜の理を見て、一奇一耦を畫す、奇耦の畫、すでに一二の數あり、又方圓の象あり、象數もと先後なし、されども易は象を以て主とする故に、かくの如く云なるべし、

易因象以明理、由象以知數、得

其義、則象數在其中矣、

易とは、今の卦爻に辭のかゝれる經をさす、それ理は形なくして、象數の先にあれども、象數によりてことごとくあらはる、易の辭は、即此理をあらはして、明にする者なり、この故に、辭の義を得る時は、象數みな其中にあり、

理無形也故因象以明理理既見乎辭矣則可由辭以觀象故曰得其義則象數在其中矣

義上見えたり、必欲窮象之隱微盡數之毫忽乃尋流逐末術家之所尚非儒者之所務也

隱微はかくれてかすかなり、毫忽はみな小數の名、理は本源にして、象數は末流なり、末流を逐ひ尋ねれば、必本源を忘る、術家とは、京房郭璞が數によりて、未來を推すの類を云、儒者の學は理を主とす、象數は其務むる所にあらざるなり、

○知時識勢學易之大方也、時に盛衰常變あり、勢に強弱順逆あり、時は宜くすべけれども、勢いまだせられざれば、これをするにあたはず、勢方にすべけれども、時いまだせられざれば、

宜深識也

○諸卦一五雖不當位多以中爲美、凡そ六爻の位、初三五を陽位とす、二四上を陰位とす、陽爻にして陽位に居り、陰爻にして陰位に居るを位に當るとす、爻その位と陰陽相違へるを、位に當らずとす、一と五とは、上下卦の中位なり、よりて其爻位に當らずといへども、多くは中道を得て美なり、

三四雖當位或以不中爲過、三四は其爻位にあたれども、或はその中ならざるを以て、過て惡しとすることあり、

中常重於正也

位にあたれるを正とす、句義は下に見えたり、蓋中則不違於正正不必中也、時に宜き中道を得れば、いつとても正理に違はず、只理の正きと云ばかりは、必しも時中になはざるこ

ば、これをするに宜しからず、此二つの者を知るこゝと、易を學ぶ方の、大いなる所なり、然れども、合せていへば、共にこれ時なり、この故に、時の一字を、易道の簡要とす、

○大畜初二乾體剛健而不足以進、

大畜の卦は、下乾上艮なり、乾の才は健なり、艮の才は止る、此卦艮上にありて、乾の純陽を止め畜む、其畜る所大いなるを以て大畜と名づく、初九九二は、本下に居て勢よはき故に、進むことあるに足らず、これ宜く進まざるべきなり、

四五陰柔而能止、

六四六五は、本みな陰柔なれども、畜の時を得たり、又上に居て勢つよき故に、よく下の妄に進む者を止む、これ宜く止むべきなり、

時之盛衰勢之強弱學易者所

とあるによりて、中は常に正よりも重し、

天下之理莫善於中於九二六五可見、

九二、六五は、みな位にあたらざれども、その中なるを以て、善きこと多きなり、

○問胡先生解九四作太子恐不是卦義、

胡先生名は瑗、字は翼之、安定先生と稱す、その易を解くに、九四を以て太子の象とす、或人これ必しも卦の本義ならじと疑ふ、

先生云亦不妨、

只看如何用、

只その卦にて九四をいかゞ用ると見るべし、當儲貳則做儲貳使、

儲貳は、太子のことなり、九四を太子となすべき時は

則太子となして使ひ用ふ、

九四近君、便作儲貳、亦不害、

五は人君の位なり、九四は陽爻にして君に近し、よりて太子とするに害なし、

但、不要拘一、若執一事、則三百

八十四爻、只作得三百八十四

件事、便休了、

易の爻義、一事に拘らんことを求めざれ、もし只一事を執着して、一爻にあてば、六十四卦の六爻、只三百八十四條の事となして即やむ、他の用をなさぬなり、

○看易且要知時、

時によりて、卦爻を用るの義變易す、

凡六爻、人人有用、聖人自有、聖

人用、賢人自有、賢人用、衆人自

有、衆人用、學者自有、學者用、君

有君用、臣有臣用、無所不通、因問、坤卦是臣之事、人君有用處否、先生曰、是何無用、如厚德載物、人君安可不用、

これ坤卦、大象の詞をとる、坤は地なり、君子地の道を用ひ、深厚の徳ありて、庶物をうけのす、即これ人君の道なり、

○易中只是言反復往來上下、

これは孔子の象傳の例をあげて説く、反復は、かへるなり、陰極りて陽復し、陽極りて陰生ず、姤と復との類なり、往來は、兩卦の間、陰陽かなたこなたへ往來して、入りかはることあり、これを卦變と云、賁と无妄との類なり、上下は、三畫の卦、上り下りて相かはる、咸と恒との類なり、

○作易自天地幽明至于昆蟲

草本微物、無不合、

是多、若識、則自添減不得也、

昆蟲は、もろくのむしなり、聖人易の制作、天地幽明の大きいなるより、諸蟲草木微細の物に至るまで、其理に合はずと云ことなし、蓋し、萬理も一貫すればなり、

○今時人看易、皆不識得易、是

何物、只就上穿鑿、

卦爻の本意を知り得ずして、只辭の上につきて、妄に其理を穿ちもとむ、

若念得不熟、與就上添一德、亦

不覺多、就上減一德、亦不覺少、

もし本文を念誦し得熟せざる者のために、卦爻の徳を一つそへ、一つへらして、説ききかすとも、その多きも少きも覺えずして、只そのまゝにきうくべし、これその卦の卦たることを、知らざるが故なり、

譬如不識此兀子、若減一隻脚、

亦不知、是少、若添一隻、亦不知、

兀子とは、腰かけて坐する者なり、一隻とは、ひとつ物を云、彼方の兀子は、大抵三脚なり、程子その時坐せられたる兀子を以てたとへとす、此兀子何の用とも知らざる者は、脚の數をも知らず、もしこれを知る者には、脚をますこともへらすことも、得ざるが如しとなり、

○游定夫問伊川、

陰陽不測之謂神、

易繫の語なり、

伊川曰、賢是疑了問、是揀難底

問、

これまづ疑ひ思ひても、ついにとけざるによりて問か、又只とけ難きことを、えらび出して問か、その己に反りて、熟思せしめんために、答へられざるなり、

○伊川以易傳示門人、曰、只說

得七分、後人更須自體究、

體究とは、物と一體になりて、其理を推し究むることとを云、蓋し義理きはまりなく、聖人の心も亦きはまりなき故に、傳義のいまだつくさざる所を、後學にゆづりて、かくの如くいへり、

○伊川先生春秋傳序曰、天之生民、必有出類之才、起而君長之、

此より下は、帝王治世の盛衰を述べて、夫子春秋作り玉ふ端をひらけり、出類之才とは、衆類にぬきんでたる聖賢を云、長は、おさなり、民に君長として、治め教るは、即これ天より民のために、命する所なり、治之、而爭奪息、導之、而生養遂、教之、而倫理明、然後人道立、天道成、地道平、法度を以てこれを治るによりて、民の争ひ奪ふこと

やむ、農桑漁獵等のことを導くによりて、民の生を保ち、身を養ふのこと遂く、孝弟忠信の教をしきて、五倫の條理明なり、以上即人道の立つなり、人君天命をうけて、人民を治め、天地の化育をたすく、天地の道亦これによりて、成就平定して、災變おこらざるなり、

二帝而上、聖賢世出、隨時有作、堯舜より以上、聖賢世々に出で、民のために、時に隨て製作あり、即農桑漁獵、宮室衣服等のことこれなり、

順乎風氣之宜、不先天以開人、各因時而立政、聖賢世々に製作ありといへども、みな風俗氣運の時宜に順ふ、天の時いまだ至らざるを、妄にこれに先だちて、人事をひらかず、凡そ政を立ること、各その時の宜き所によれり、

寅之建正、忠質文之更尙、人道備矣、天運周矣、

三王は、夏殷周の王、三重は、三王の禮なり、三代の正月、夏は寅の月にたつ、人正なり、殷は丑の月にたつ、地正なり、周は子の月にたつ、天正なり、これ天地人の始を擬す、忠は、まこと、質は、すなほ、文は、あやなり、夏の禮は忠實を尙びて、文すくなし、殷の禮は、ほゞ文あれども、なを質朴なり、周の禮は、文飾さかんなり、これみな三重の内のことなり、蓋し三王つぎおこるに及んで、人道かくの如くに悉く備り、天運の人に應ずること、周徧にして、至らずと云所なし、

聖王既不復作、三代以後のことを云、有天下者、雖欲做古之跡、亦私意妄爲而已、

先王の道ほろび、禮すたれたる故に、後世の君、古に倣ひて、政をせまく欲すれども、亦私の意を以て、妄に

爲るのみなり、事之繆、秦至以建亥爲正、秦の始皇、三正の義をすて、そのよく周の火徳に勝つを以て、自水徳の運にあたりとて、北斗昏に亥にたつる月を以て正月とす、水の旺する始めなればなるべし、政事の謬、かくの如くなるに至れり、

道之恃、漢專以智力持世、道徳を尙びずして、専ら智謀才力を以て、天下をとりす、政道の恃れること、かくの如き者あり、

豈復知先王之道也、上二段を結ぶ、夫子當用之末、以聖人不復作也、順天應時之治、不復有也、於是作春秋、爲百王不易之大法、

これより下は、夫子春秋作り玉ふ由緒を述べて、則又其書貴きことを贊美す、それ春秋は、もと魯國の史記の

名、本國並に列國のことを、共に記録す、然るに世おとろへて、先王の道すたれ、史官善を褒め惡を貶しむるの書法正しからず、而して夫子帝王の德あれども、時におはず、位を得て政をし玉ふことあたはざる故に、魯の隱公より以來、其時まで、二百四十年間の史記により、その褒貶の書法を、改め正しうして、王政を此書に寓せをき玉ふ、これ乃後來百世の王者、其義を變易せられざる世を治るの大法となれり、

所謂考諸三王而不繆、建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑者也、

これ中庸に、君子の道を賛する詞を借り用ふ、春秋の義、三王の法に考へ合せて、たがふことなし、其義をたて、天地の道と向ひあはするに、相もとる所なし、鬼神の德幽なりといへども、其法をかの變化の妙に相たして、たがふべきかの疑なし、又只今の時のみならず、百世の後、聖人いて、これを用るをまちても、自信する所ある故に、いかゞあらんと惑はざる者なり、

先儒之傳曰、游夏不能贊一辭、此語史記の世家に見えたり、云意は、孔門の子游子夏文學に長ずといへども、春秋に在いては、辭一つも、贊ることあたはずと、

辭不待贊也、言不能與於斯耳、程子おもへらく、春秋の辭は、もとより游夏が賛けをまつことなし、先儒の云意は、游夏が學、いまだ其義を聞くに與ることを、得ざるによりて、その一辭をもいふことあたはずとなり、

斯道也、惟顔子嘗聞之矣、孔門にたゞ顔子のみ、春秋の道を聞くにあづかれり、行夏之時、乘殷之輅、服周之冕、樂則韶舞、此其準的也、これ論語を引けり、夏の時は、寅の月を歳首とするの時令なり、輅は禮の車、冕は、珠の冠なり、韶は虞舜の徳にかたどれる、樂の名なり、蓋し夏の時は、人事を

如日星、乃易見也、

春秋の大義は、君を尊び、臣を卑くし、王道をあがめ、覇術をいやしめ、中國を内にし、夷狄を外にするの類多、其義はみな大いなることなれども、明白にして見やすし、

惟其微辭隱義、時措從宜者、爲難知也、

只微にして明ならぬ辭、隠れて顯はれざる義、時に隨てはからひをき、其理の宜きかなはしむることは、はかり知りがたきなり、

或抑或縱、或與或奪、或進或退、或微或顯、而得乎義理之安、文質之中、寬猛之宜、是非之公、乃制事之權衡、揆道之模範也、

此段即微辭隱義時措從宜のことを云、或は功あれどもをさへ、或は罪あれどもゆるし、或は功いまだ成ら

行ふに、最宜きかなへり、般の輅は質にして、輅の中制にかなへり、周の冕は文にして、冕の中制にかなへり、韶の舞樂は、善つくし、美つくせる者なり、準は、表を立るさげすみ、的は、弓を射るまとなり、すべて法則のことを云、顔子邦を治る方を問ければ、夫子四代の禮樂をくみあはせ、萬世の通法を定めて告げ玉ふ、其理即これ春秋に、列國の政事を褒貶して、世をおさむるの法則とし玉へる者なり、よりにて顔子春秋の義を聞くに與ることを知るとなり、

後世以史視春秋、謂褒善貶惡而已、至於經世之大法、則不知也、此より下は、後世春秋をよむの非を正すによりて、その見がたきことをいひて、その傳作の端をおこせり、後世の人春秋をよむつねの史の如くに見て、只其事の善惡を、褒貶したるのみと思へり、その世をおさむるの大法たるまでは、これを知るに及ばず、春秋大義數十、其義雖大、炳

ざるに、褒じあたへ、或は罪いまだあらはれざるに、
貶してむばひ、或は尊けれどもこれを退け、或は卑し
けれどもこれを進め、或は辭を婉にしてかくし、或は辭
を直くしてあらはして、皆その義理の中道にあたり
て安く、文質ほどよくして、華ならず俚ならず、寛なる
にも、猛きにもすぎずして、其宜きにかなひ、是とし非と
する所、私なくして公に歸す、これ即政事をさだむる
の權衡、常道をはかるの模範なり、權衡模範は、みな法
式のことを云、模範は、工匠の物をつくるかたなり、
夫觀百物、然後識化工之神、聚
衆材、然後知作室之用、於一事
一義、而欲窺聖人之用心、非上
智不能也、故學春秋者、必優游
涵泳、默識心通、然後能造其微
也、

此段上四句は、下文のたとへなり、化工とは、天地の
物を造化すること、工匠の物を作るが如くなること

を云、それ百物をそなへ見て後に、造化の神妙なるこ
とを知る、衆材をあつめそろへて後に、やづくりの用
足ることを知る、もし只一事一義を以て聖人心を用
ひ玉へる、深き處をうかゞはんとせば、上智の賢哲に
あらざればあたはず、この故に、春秋を學ぶ者は、必
始終の事義を合せかんがへ、優游してゆたかに、涵泳
してひたり、黙してさとり、心つらぬき通りて、然し
て後によくその微妙處に至るなり、
後王知春秋之義、則雖德非禹
湯、尙可以法三代之治、
此より下は、傳つくるの由を述ぶ、下の句云意は、三
代の治法をならひ用ることを、ねがはるべしとなり、
自秦而下、其學不傳、予悼夫聖
人之志、不明於後世也、故作傳
以明之、

聖人の志とは、その百王治世の大法とし玉ふ志なり、
俾後之人、通其文而求其義、得

其意而法其用、則三代可復也、

義は文の義、意は用の意なり、三代可復とは、三代の
政治、今の世に、かへし行はれんとなり、
是傳也、雖未能極聖人之蘊奧、
庶幾學者得其門而入矣、
蘊奧とは、内に蘊て、奥ふかき處なり、

○詩書載道之文、春秋聖人之
用、

聖人の作用は、即道の行はる、處なり、
詩書如藥方、春秋如用藥治病、
上文のたとへなり、
聖人之用、全在此書、所謂不如
載之行事、深切著明者也、

これ夫子の語、史記に見えたり、其全文の云意は、わ
れ徒に言を立て、以て道理の是非を論せんよりは、

そのかみ行ふ所の事にのせて、これを褒貶するが、深
く切に、著はに明にして、以て後世を戒むべきにしか
すとぞ、
有重疊言者、如征伐盟會之類、
盟會とは、諸侯事あれば、霸主の國に會り、互に約束
をたがへじと、盟をすることなり、春秋に同じことを
ば、重ね疊ねしるせるは、征伐盟會の類なり、
蓋欲成書、勢須如此、不可事事
各求異義、

一編の史書を成したてんとするには、異なる義なけ
れども、同じ事をば、かさね記すべき勢なり、よむ者
事々にその異義を求むべからず、
但一字有異、或上下文異、則義
須別、
○五經之有春秋、猶法律之有
斷例也、律令唯言其法、至於斷

例則始見其法之用也

法は、法令を云、法度の條目なり、律は、刑律を云、刑罰の法制なり、斷例とは、事をまうけ、是非を判斷して、刑律を用るの例とすることなり、他經は法律の如し、春秋はなほ其法を用る斷例の如くなり、

○學春秋亦善、一句是一事、是非便見於此、此亦窮理之要、

春秋は一句即これ一事なる故に、その是非明めやすし、よりにて亦これ理を窮るの要なり、

然他經豈不可以窮理、但他經論其義、春秋因其行事、是非較著、故窮理爲要、

これ申ねて理の要たることを、詳にいへり、

嘗語學者、且先讀論語、孟子、更讀一經、然後看春秋、先識得箇

義理方可看春秋

更讀一經とは、蓋し易中庸の類をさす、春秋は窮理の要たりといへども、而もまづ、義理通明にして、然後によく人事の得失の機を察し、聖人の裁斷の權を知ることをあればなり、

春秋以何爲準、無如中庸、

準は、法なり、春秋の是非判斷の法則を知らんとすれば、過不及なき中庸の理を知るにしくことなし、

欲知中庸無如權、須是時而爲中、

中庸の理を知らまく欲せば、義をはかるの權を用るにしくことなし、即これ時に隨て、其理の宜き所をはかりて、まさしく中になへしむればなり、

若以手足胼胝、閉戸不出、二者之間取中、便不是中、

此より下は、又事をあげて、時中の義を明す、胼胝と

在人自看如何

只一事につきて、その時宜にかなふの義には、なほ説き得いたるべし、これより以上、更に事々時に隨て、其義萬變するの權は、聖人の妙用なり、これ詞を以て説きがたし、人自心を以て、いかにと見るべきなり、

○春秋傳爲按、經爲斷、

春秋の傳は、左氏公羊氏穀梁氏の三傳あり、按は、公案なり、訟をきくに、是非の事實を、きき定めたるを案と云、案によりて判斷して、法を用るを斷と云、蓋し傳の事迹を以て案とし、經の褒貶を以て斷とするなり、

又云、某年二十時看春秋、黃聲

隅問某如何看、

いかやうに見るぞと、

某答曰、以傳考經之事迹、

案とする義なり、

は、手足をはたらきて、皮あつくなるを云、俗に云たこなり、もし禹の洪水を治めて、手足胼胝し玉へる苦勞と、顔子陋巷に居り、戸を閉て出ざる安逸と、二つの間をくみて、その中分をとらば、これ則子莫が執中にして、聖人の時中にあらず、

若當手足胼胝、則於此爲中、當

閉戸不出、則於此爲中、

上の此は、手足胼胝をさす、下の此は、閉戸不出をさす、これ即權して時に中するの中なり、

權之爲言、秤錘之義也、

權と云ことは、秤の錘の義なり、其義は前篇に見えたり、

何物爲權、義也時也、

中庸を知るには、何をか權とする、時に宜き義をはかり知ることを云なり、

只是說得到義、義以上更難說、

以經別傳之真偽

傳の事迹に、真と偽とまじはる、又三傳に異同あり、みな經の意を以て、その是非真偽を辨別するなり、

○凡讀史、不徒要記事、迹須要

識其治亂安危興廢存亡之理

治亂は、泛く云、治りて後に安く、危くして後に亂る、興りて盛り、廢れて衰へ、存してながらへ、亡びてたゆること、皆その然る所以の理あり、これを知らんことを要すべし、

且如讀高帝紀、便須識得漢家

四百年終始治亂當如何、是亦

學也、

これ上文のために、その例をあぐ、高帝は、漢の太祖高皇帝なり、高祖寛大の長者にして、張良蕭何韓信三傑をあげ用るを見て、その天下を得べきことを知る、その始めて天下を得て、關中に入る時に、即秦の苛法

をすつるを見て、四百年の基を立つべきことを知る、諸侯大臣を疑ひて、かるくしく罪するを見て、諸侯次第にそむき、功臣その終りを保つまじきことを知るの類なり、史をかくの如くに見るも、亦これ致知の學なり、

○先生每讀史、到一半、便掩卷

思量、料其成敗、然後却看、

紀傳一つを見るごとに、其半に至れる時、末をよまずして思量し、其事の成ると敗るゝとをはかりみて、然して後に其末を見るなり、

有不合處、又更精思、

もし料りて合はざる處あれば、又更に精く思ひ見る、

其間多有幸而成、不幸而敗、

成るまじきことの幸にして成り、敗るまじきことの不幸にして敗るゝこと多し、

今人只見成者、便以爲是、敗者

便以爲非、不知成者愆有不是、

敗者愆有是底、

○讀史須見聖賢所存治亂之

機、

機は、事の由りてはじまる所なり、按するに、春秋の後に、聖賢の作れる史なき故に、此句義疑はし、蓋し云意は、史をよむ時に、古の聖賢傳に存して、後世に垂れ示せる、治亂の機をこゝに見て、その國家の治亂、政事の得失を察せよとの義なる歟、

賢人君子出處進退、便是格物、

賢人君子の出で、仕へ、隠れて處り、進みいで、退き去る迹を見て、これに法とる、即これ格物の學なり、

○元祐中、客有見伊川者、凡案

間無他書、惟印行唐鑑一部、

元祐は、宋の哲宗の年號なり、印行とは、書を板に刻み、印して世に行ふぞ、唐鑑は、程子の門人范祖禹字淳夫が著す所、唐朝の事を論ず、淳夫かつて伊川と共に論じたる説を、盡く用ひたるとぞ、

先生曰、近方見此書、三代以後

無此議論、

ほめてなり、

○橫渠先生曰、序封不可謂非

聖人之蘊、

序封を聖人の蘊にあたらすと云は、これ晋の韓康伯が説なり、その義理淺くして、聖道の蘊奥にあらずと、而して張子これを非とす、

今欲安置一物、猶求審處、

安も置なり、審處とは、つまびらかにばからふぞ、

况聖人之於易、

易とは、易卦をきつゞけを云、

其間雖無極至精義、大槩皆有

意思、

意趣の義なり、

觀聖人之書、須遍布細密如是、

凡そ聖人の書を見るに、その遍く布きつらねて、細密なること、かくの如しと知るべし、

大匠豈以一斧可知哉、

大工のたくみなる所、斧一手にては、知られぬとぞ、これはたとへなり、

○天官之職、須襟懷洪大方看、

得、

周禮の六卿天地春夏秋冬の六官を、わけつかさどりて、天官冢宰は、その長なり、襟は、えり、懷は、ふところ、すべて胸中のことを云、洪も大なり、

蓋其規模至大、

規模の字義、前に見えたり、そのすぶる所至りて大いなる故に、かぬる所も、亦甚多し、

若不得此心、欲事事上致曲窮、

究、湊合此心、如是之大、必不能

得也、

曲とは、かたはしを云、湊は、すべあつむる義なり、もしまづ規模洪大の心を得ずして、天官の職を、事々の上につきて、かたはしの處より、一つづつ致し究めて、其心にすべあはせんとせば、かくの如くに作用の大いなることを、心得ることあたはじとぞ、

釋氏錙銖天地可謂至大矣、

錙銖は、はかりめの少きなる者なり、天地を微塵の如くに見なすは、これ至りて大いなることなり、

然不嘗爲大、則爲事不得、

見る處大いなりといへども、いまだかつて大いなる作用をせざる故に、實事をば行ひ得ず、

若界之一錢、則必亂矣、

もしこれに一錢をあたへて、つかはすとも、宜き所を知らずして、必その處置をみたらんぞ、

又曰、太宰之職難看、

太宰は即冢宰なり、

蓋無許大心胸包羅、記得此復

忘彼、

包羅とは、包はかぬるなり、羅はあみなり、とりまはして、うけいる、義なり、記得は、おぼえ得るなり、かれこれの事を、ことごとくかぬうくることあたはじとぞ、

其混混天下之事、當如捕龍蛇、

搏虎豹、用心力、看方可、

混々は、大水の流るゝを云、天官のつかさとする天下の事、かくの如しとなり、如捕龍蛇搏虎豹とは、柳子厚が、韓退子が文をほめたる詞なり、云意は、かくの如くにいさみて、つよく心力をつけて見ば、則はじめて見得べしとなり、

其他五官便易看、止一職也、

五官は、地官司徒、春官冢宰、夏官司馬、秋官司寇、冬官司空なり、

○古人能知詩者、唯孟子爲其

以意逆志也、

以意逆志とは、己が意を以て、詩人の志を、その情のまゝにむかへとるぞ、これ即孟子詩をよむの法をいへる詞なり、

夫詩人之志至平易、不必爲艱

嶮求之、

詩人の志もと平かに、易らかなり、必しも艱ましく、嶮しき意を以て、これを求めざれと、

今以艱嶮求詩、則已喪其本心、

何由見詩人之志、

喪其本心とは、詩を見る本意を失ふとぞ、

詩人之情性、溫厚平易、老成、本

平地上道着言語、

溫厚は、おだやかにあつし、老成は、老成人の義、おとなしきことを云、道は、言なり、詩人の詞、もと平々たる處より、いひ出したる者なり、

今須以崎嶇求之、先其心、已狹隘了、則無由見得、

詩人之情本樂易、

樂易は、たのしく、やすらかなり、俗に云きげんのよきぞ、

只爲時事拂着他樂易之性、故以詩道其志、

時にあふ所の事、かの樂易の情に、拂りさかふによりて、たへかねて、詩を以て志をいひのぶるなり、

○尙書難看、蓋難得胸臆如此之大、

臆もむねなり、書は二帝三王の徳政なる故に、その規模事體、甚大いなり、よむ者の胸臆、かくの如くに大いならざれば、その意趣に通じがたきなり、

只欲解義、則無難也、

義は、文義なり、

○讀書少、則無由考校得義精、

讀書少とは、よむ時のすくなきことを云、間斷なよめとなり、校も、考ふるなり、

蓋書以維持此心、

維持とは、つなぎたまちて、はなたざるなり、

一時放下、則一時德性有懈、

放下とは、書をよむことを、放ちすつるぞ、

讀書則此心常在、

不讀書則終看義理不見、

心存せざるこゝろある故なり、

○書須成誦、

よくおぼえて、そらによむべしと、

精思多在夜中、或靜坐得之、不

記則思不起

よくおぼゆれば、をのつから精く思ひみて、其義を得ること、多くは夜氣の靜なる時、或は靜坐して心存する時にあり、蓋し記得する時は、その文字生ける者の如くにて、其義思ひに入りて忘れず、ふるゝ處によりて忽然とひらけざることあり、もし記得せざる時は、則文字死せるが如くにて、思ひおこらず、なんぞ義精くなりて、ひらくる時あらん、

但通貫得大原後、書亦易記、

學者義理の大本原に貫通し得れば、書亦おぼえやすし、張子又云く、書多く見て、よく忘るゝ者は、只理いまだ精しからざるがためならくのみ、理精き時は、則須く記し得て、去る處なかるべしと、蓋し書はおぼゆるによりて、其義をのづから精きに入る、義精き時は、書いよく、おぼえやすきなり、

所以觀書者、釋己之疑、明己之未達、

疑は、今までの不審、未達は、ゆくさきの蔽塞なり、

每見每知新益、則學進矣、

書を見るたびごとに、必新き益を得る時は、其學すゝんで達することあり、

於不疑處有疑、方是進矣、

これはじめて進む時なり、これより新益を得ていよく進むなり、

六經須循環理會、

古は易書詩禮樂春秋を六經とす而して樂經亡たり、今は五經に周禮を加て、六經と云なり、循環とは、環を循らすが如くに、をはりて又はじまることを云、張子又云く、六經環循、年三たび觀まく欲すと、

義理儘無窮、待自家長得一格、

則又見得別、

聖賢の書もと義理きはまりなし、この故に、自家の學一格長する時は、經義を見ること、亦一重深し、循環すべき所以なり、

○如中庸文字輩、直須句句理、

會過使其言互相發明

中庸の如き一編の文字の輩は、其旨始終相貫けり、この故に、まづ句句におさめとをりて後に、又其語をしてかれこれ相てらして、其義を互に發明せしむべきなり、

○春秋之書、在古無有、乃仲尼所自作、惟孟子能知之、非理明義精、殆未可學、

時中の權にあづかる者にあらざれば、いまだ聖人褒貶の旨を知ることあたはず、

先儒未及此而治之、故其說多鑿、

いまだ義理精明なるに及ばずして、揣り求め、慮てあてんとす、よりに其說穿鑿多し、

存養類

學者すでに知を致す時は、則その知る所の道を、力め行ふべし、而して存養の工夫は、致知力行をつらぬく、時として用ひすと云ことなかるべし、よりに此卷を致知克治の間にをけり、

或問、聖可學乎、

まづ問の詞をまうく、聖人の徳、學んで至らるべきかと、

濂溪先生曰、可、

學ばるべしと、

有要乎、

これを學ぶに、その簡要ありやと、

曰、有、

こたへなり、

請問焉、

其要をこひとふ、

曰、一爲要、

一とは、心中純にして、雜りなきことを云、

一者無欲也、

心純一なる時は、只これ天理のみにして、私欲なし、

無欲則靜、虛動直、

欲なき時は、事なくして靜なるときに、心の體內に存する所、虚くしてふさがることなし、事ありて動く時に、心の用外に行はるゝ所、直くしてまがることなし、

靜虛則明、明則通、

靜にして虚き時は、則その知る所明にして、よく天下の理に通ず、

動直則公、公則溥、

動きて直き時は、その爲す所公にして、よく天下の務めに溥し、

明通公溥、庶矣乎、

己に在る所明にして通し、物に應ずる所公にして溥くは、聖人にすゝむ道、ちかゝるべしとなり、

○伊川先生曰、陽始生甚微、

陰きはまりて陽の生ずる、其始甚かすかなり、

安靜而後能長、

安穩閑靜に養ひて後に陽氣よく舒び長ず、

故復之象曰、先王以至日閉關、

復の卦は、一陽爻五陰爻の下に生ず、冬至に一陽來復の象なり、先王此象を用ひて、冬至の日は、處々の關をとちて、人の往來をとめ、世間を物しづかにして、陽氣の生長をたすく、それ陰陽は善惡の象なり、この故、程子これを以て、人善心の萌す時に、即ちとりしづめ養ひて、而して後に推し廣むべきことをいへり、

○動息節宣、以養生也、

節とは、物をよきほどにする義なり、身の動き息むこと、その宜きにかなひて、氣血のめぐりを、ほどよくととのへ、宣びてとこのほらざるやうにするは、こ

れわが生を保ち養ふの道なり、
飲食衣服を以て養形也、

飲食衣服を、饑飽寒煖の宜きにかなはしむるは、これわが形體を養ふの道なり、

威儀行義、以養徳也、

容貌の威儀を、かいつくろい、行事の義を正くするは、

推己及物、以養人也、

己が心をはかりて、人のために推し及すは、これ恕のことなり、即これわが仁徳を以て、人を愛養するの道なり、

○慎言語、以養其徳、節飲食、以養其體、事之至近、而所繫至大者、莫過於言語飲食也、

一言の失を以て、徳をそこなひ、一味のすぐるを以て身をそこなふことあればなり、

○震驚百里、不喪匕鬯、

これ易震卦の象の辭なり、震は、雷なり、百里は、此方十里なり、匕は、鼎の肉をあげて、俎にする者なり、鬯は、秬の酒、祭の時にそぎて、神をおろすに用ふ、雷は百里にきこえず、今百里をふるひおどろかすは大雷なり、然るに祭を行ふ者、よく七鬯をとり失はずして、用るとなり、

臨大震懼、能安而不自失者、唯誠敬而已、此處震之道也、

震懼は、をそれなり、大いにをそるべき時にのぞみて、其心よく安定にして、自守の所をとり失はざること、只その誠敬を致すによりてなり、然れば、誠敬は、これ震懼に處るの道なり、よく誠敬を致す時は、處置する所あやまらずして、其道ついに亨るなり、

○人之所以不能安其止者、動於欲也、欲牽於前、而求其止、不可得也、

止之道、

これ忘我と云を以て、不見其身と云義をとく、忘我とは、わが身の形氣に、かゝれる私欲、目の色にをき、耳の聲にをき、口の味にをき、四肢の安逸にをけるの類、みなこれを求める心、おこらざることをいへり、

行其庭、不見其人、庭除之間、至近也、在背、則雖至近、不見、謂不交於物也、

庭除とは、只庭を云、庭は物を除きて、あけをく處なればなり、蓋し物を見ること、その背にある時は、内にわが身を見ざるのみならずして、外に人そのまじかき庭をゆけども、亦これを見ずと、これ其心、外物の欲に、つきまじはらざることをいへり、

外物不接、内欲不萌、如是而止、乃得止之道、於止爲无咎也、

此段上文を結ぶ、外物の欲、來りまじはらず、内心の

此章は、易艮の卦辭に、**艮其背、不獲其身、行其庭、不見其人、无咎**と云を釋す、**艮**は止るなり、**安於止**とは、心安定にして、妄に動かざることを云、心の妄に動くことは、私欲わが前より、ひき動かすがためなり、

故艮之道、當艮其背、所見者在

前、而背乃背之、是所不見也、止於所不見、則無欲以亂其心、而

止乃安、

人の物を見ること前にありて、背は則物を見ざる所なり、凡そ欲すべき物前に來る時に、心これに背きて目にかけてざるを、**艮其背**と云なり、かくの如くなる時は、則外物の欲、其心をひきみだらすしてその止ること、をのづから安定なり、これまでは、**艮其背**と云三字を釋す、

不獲其身、不見其身也、謂忘我也、無我則止矣、不能無我、無可